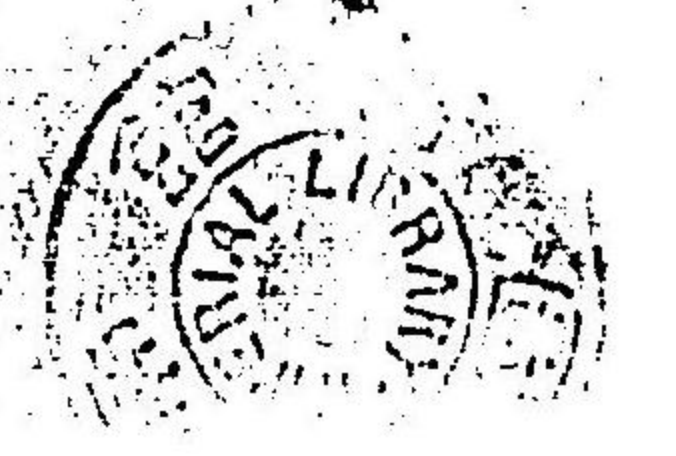


雖練石補元鼈足立極清濁其化浩劫浩劫
出叶環八德大沛浩劫以中生一大桑木延漫
數百里所稱畜艷風土訖適是也此墟曠茫而
無疆令直關以東到京坻數百里而奇魁者有
奇者有從者有秀者所稱籬島子圖繪迺是也
當與縮八荒於赤跡所彙因睫出中春詒賈不
當與軌金玉狗馬玩好而趨勢利者得焉云

箕山 巖谷尚出識



Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note, consisting of approximately 10 lines of text.



Handwritten text in a cursive script, continuing the message from the first page, consisting of approximately 10 lines of text.

凡 例

- 一 東海道は京師よりはじめて江戸に到る都て十州に亘り其驛路を標とし名所古跡神社佛院を圖會とす驛は圓圖をもつて題し行程は其下に署す
- 一 海道神社は延喜式神名帳に載るを選んで記す郷里にことごとく生土神あり多くは勸請の神祠なれば是を除く然れども大厩に到つては擇んで載る寺院も亦これに准じ古刹を擇んで記し末派の墳寺道場の類は際限あらざればこれ又省く大略畿内名所圖會の例に倣ふ
- 一 東海道より五里七里入るの地も亦名神名刹はこれを擧る所謂尾州津島天王三州鳳來寺遠州秋葉山相州大山寺江島鎌倉等なり餘はこれに准す
- 一 渾て方位を示すには前位に循ふて某の東何里某の西何町にありと證し或は左の方右の方とは京師より東關に赴く旅者の左右なり
- 一 引書は古來流布の紀行和歌は代々の撰集詩賦は名家の文集を引據とす軍談は其要を撮んで記し神廟梵刹の由縁は社人寺僧の記せるを勘へ又村翁野夫の謠も是なるは載る事あり

一世に鴨長明道之記同海道記といふ二書あり予是を校ふるに長明は承元五年十月十三日鎌倉に下向し將軍實朝公に謁し法華堂にて懷舊の和歌を詠し事東鑑に見ゆ厥后五年を歴て建保四年六月八日春秋六十四歳にして卒す此事方丈記証説に詳に録せり初の長明道之記に仁治三年八月十日京を出るとあり長明示寂の後廿六年を歴たり正しくこれは多田滿仲五代孫從五位下伊賀守源光行の紀行也和歌は夫木集に入つて光行と記せり扶桑拾葉には此書を源親行と署す親行は光行の長子ならん歟因之此卷中にはことごとく光行紀行と記して長明とは記さず又海道記には貞應二年卯月上旬花洛を出立と書りこれも長明入寂の後七年を歴也此譯鎌倉志にも和歌は長明にして詞は後人の贅する所ならんと書り眞に辭の風體黑白にして長明にあらざる事明らかし長明は無名抄方丈記の二書より外なし又兼好のつれづれに長明四季物語を引り其頃の書は亡びたるならん今世にある四季物語の二書は後人の准へ作れる偽書なり一いにしへより古人の紀行名地の圖畫道中記の類殆多し然れども海道條古今改りて舊書を見るに惑ふ事多し予巡行して今時の見聞を記す猶脱漏は後人の補遺を俟のみ一畫圖は京師江戸及び諸邦の寄合書也故に畫毎に姓名印章あり細圖は浪速竹原春泉齋の一筆によりて姓名を記さず

翻刻に就きて

編者秋里籬島は京師洛外に住る俳人にして名を舜編字を湘夕といへり學識とて素より深からざりしも彼の都名所圖會の版元吉野屋爲八(姓殿)に知られ畫工竹原春泉齋(春泉齋の父)と共に都名所圖會を編し幸ひにして時好に投ぜしより本で同拾遺、都林泉名所圖會、京之水附花洛往古圖、大内裡圖、大和、河内、和泉、攝津、伊勢路、同後編、東海道、播州、水曾、住吉、須磨、明石等各名所圖會の編者ありて善く世に名を知らるゝに至れるなり此東海道名所圖會の如きも其編述の体裁極めて巧妙にして挿畫の如きも春泉齋の外更に當時兩都及浪花に於ける諸名流は勿論、其地方にて少しく名ある畫工には悉く執筆せしめ(裏面に列舉せり)挿畫のみを以てするも本書の價値多きは何人も認むる處なるべけれど惜哉文章假名遣等極めて無頓着なる點多し夫は暫く忍ぶべしとするも引用の證歌に至つては誤謬甚しく殆んど意味を成さざるものあり甚しきに至つては全く作者名をすら取違ひたるものなきに非ず即ち卷三「引馬野」の條下に引用せる堀川百首俊賴朝臣の詠は同書下巻慶安版、六丁或四行に見えたる仲實朝臣の詠にして次行に出たる俊賴朝臣の名を抜抄の際誤記せるものと思はる故に和歌其他誤謬の明白なるものにして夫れと氣附きたるものは原本に依りて訂正を加へたり其他挿畫の地名を活字に改めたる挿畫と文章との連絡を原本よりも密接ならしめたる原本の文字の大小不同にして讀下するに不便なるを改めたるが如き本書の原本に勝れる處にして挿畫の如きも最良の原本を用ゐたれば普通の原本よりは遙に鮮明となれりと信ず

明治四十三年庚戌春

斐文會樓上にて

雨谷 一 榮 庵 誌

插圖執筆名家

土佐守光貞	下河邊維惠	土佐光安	柏友德	東溪
圓山應舉	松村月溪 <small>春吳</small>	石田友汀	奧文鳴	鬼卯
山齋素絢	伊豫權守專顯	白井直賢	蘇英林	幣垣
狩野永俊	青木夙夜	蒲生踊魚	木應受	張安
法橋中利	田中訥言	原在正	高若拙	知白
慧齋政美	竹原春泉齋	法橋艸偃	川地勢	春曉

東海道名所圖會卷之一

目錄

平安城	六	山神森	一九	新宮權現	一九
洛東風景	七	關清水	一九	熊野權現	一九
三條橋	九	關明神祠	二〇	金堂	一九
栗田	九	關小川	二一	御井	二九
日岡	九	手向山	二一	梵鐘	三六
山科	〇	安養寺	二一	食堂	三六
四宮河原	〇	逆如名號石	二四	大鍋	三六
小關越	一	世喜寺	二四	唐院	三六
追分	一	顯證寺	二四	護摩堂	三七
相阪山	二	大津	二四	三層塔	三七
走井	二	練貫水	二五	寶藏	三七
逢坂關	二	及檀道	二五	十八神	三七
山近兩國界	四	長等山	二五	辨天祠	三七
蟬丸祠	五	三井寺	二五	住吉祠	三七
關寺小町跡	五	新羅明神	二八	燈籠石壇	三七
		三尾明神	二九	經藏	三七
		護法善神	二九	敬待仙人入定窟	三八

圓満院御殿	三八	淨明水	四一	崇福廢寺	五一
安樂行堂	三八	二王門	四一	梵釋廢寺	六〇
正法寺	三八	三井十景	四一	明智光秀城趾	六〇
福神石	三八	北院	四一	唐崎	六一
大悲閣	三八	中院	四一	幸崎神祠	六一
近松寺	三八	南院	四一	山王祭神供	六一
八詠樓	三九	智證大師傳説	四一	唐崎一ツ松	六一
安然石塔	三九	同御影銘	四五	日吉山王神社大宮	六二
尾藏寺	三九	大友皇子傳	四五	竹臺	六三
鶴尾八幡	四〇	志賀都	四八	波止土濃	六三
微妙寺	四〇	志賀里	四八	桓武天皇御塔	六三
水觀寺	四〇	滋賀花園	四九	濯眼水	六三
常在寺	四〇	志賀山越	四九	春日祠	六三
早尾祠	四〇	滋賀浦	四九	竈殿	六三
龜丘	四〇	滋賀大輪田	五〇	味字門	六三
龜鳴橋	四一	志賀津	五〇	猿屋	六三
村雲橋	四一	黒主祠	五〇	三十六人俳士圖	六四
夜櫻	四一	貫之祠	五一	二の宮	六五

攝社	六五	三宮	六五	山王祭圖	六八
龜井	六五	金岩	六五	石占井祠	七〇
聖眞子宮	六五	中七社	六五	大鳥井	七〇
本地堂	六五	下七社	六六	生源寺	七〇
橋樹	六五	神祖御宮	六六	妙見祠	七〇
聖女祠	六五	讚佛堂	六六	大將軍祠	七〇
竈殿	六五	金鼓堂	六六	百枝祠	七〇
氣比祠	六五	桓武天皇御廟	六六	小五月會閣	七〇
客人宮	六五	慈眼大師廟	六六	和産和汗塚	七〇
影向石	六五	眞高原	六七	歡喜石	七〇
攝社	六五	四屋若宮	六七	大政所	七〇
十禪師宮	六五	南若宮	六七	宿院	七〇
攝社	六五	登町若宮二社	六七	王子宮	七〇
夢妙幡石	六五	興成宮	六七	靈石	七〇
船石	六五	磯成宮	六七	鼠祠	七〇
明星水	六五	比叡辻	六七	彼岸所	七〇
八王子宮	六五	若宮	六七	地藏堂	七〇
攝社	六五	石占井	六七	早尾社	七〇

走井大師堂	七〇	大伴櫻	七九	膳所城	八七
走井宮	七〇	眞野入江	七九	陽炎清水	八七
猿塚	七〇	比良	七九	膳所町	八七
塔下總社	七〇	打出濱	八二	陪膳濱	九〇
八柳	七一	四宮社	八二	粟津野	九〇
滋賀院	七一	精大明神祠	八二	粟津杜	九〇
神路山	七一	菊濱	八三	粟津里	九一
蛭子宮	七一	玉造	八三	粟津松原	九一
比叡山	七三	大嘗會稻穗貢	八三	兼平墳	九一
富士山遠景	七三	松本渡口	八三		
四明嶽	七四	義仲寺	八三		
西教寺	七五	義仲墳	八三		
來迎寺	七五	芭蕉翁塚	八六		
苗鹿神社	七五	芭蕉堂	八六		
堅田浦	七五	龍ヶ岡	八六		
浮御堂	七八	丈艸塚	八六		
勾當内侍古蹟	七八	膳所	八七		
		吾孫君祠	八七		

東海道名所圖會卷之一

草薙御劔

と申奉るは初の御名は天叢雲劔と申なり
 〔倭姫世記〕八坂瓊曲玉。八咫鏡。草薙劔之三神寶をもつて皇孫に授給ひ永天璽とし給ふ〔日本書記〕素盞烏尊出雲國簸川上に天降まします時啼哭聲聞ゆこれを尋給へば老たる夫婦の者あり其中一人の少女を置て撫て悲しむ素盞烏尊問たまふは汝達誰又何ゆるに斯は愁るぞ夫婦答て我等は此所の國神也名は脚摩乳妻を手摩乳と申し此童女は吾兒にして名は奇稻田姫と申ける此山中に八岐大蛇ありて往に吾兒を多く吞れて今又一人残りし少女もけふはた吞れんとすこれをなん脱免に術なし故に歎哀傷と申す素盞烏も俱に歎たまひ我がの大蛇を戮すべし然らば少女を我妻に得させんや老人大に喜び勅に隨ひ

秋里籬島編

奉ん即素盞烏尊稻田姫の湯津の爪櫛をとり御鬘に挿給ふ夫婦は八の槽に酒を盛て待ける早其期に至れば山河震動し大蛇現れ出たり首尾に八岐あり眼は酸醬の如し背に松柏生茂り八丘八谷の間に蔓延て頭を上げ八槽の酒を飲干醜醜して眠る其時素盞烏所帶給ふ十握劔を抜て大蛇を寸々に斬給ふ尾に至て劔の刃少し飲たり即其尾を裂て視給へば一ツの劔あり大蛇の所居ける上に常に村雲覆ければ天叢雲劔と號給ふ其より此寶劔人代に傳り 神日本磐余彦天皇帝神武神代の躡を繼日向國宮崎に都し給ふ此時天下草昧にして封域いまだ定らず故に寶劔を以て四海を治め初て帝京を大和國橿原宮に遷幸まします厥后十二代大足彦忍代別天皇帝二十八年春二月朔日皇子日本

武尊筑紫の叛賊熊襲を一舉に滅し其國を靜謐給ふ於
 是九州既に治り百姓萬歳を謳ふ同帝紀四十年夏六月
 東夷叛逆のよしを奏す即 天皇斧鉞を持て日本武尊
 に授け東國安泰すべきと詔ありて曰朕聞東夷は讖性
 暴強にして凌犯を宗とす山に邪神あり郊に姦鬼あり
 常に街衢に遮りて人を弊しむ其賊徒の中に蝦夷は尤
 強し男女交りて父子の別なし冬は穴に宿り夏は櫛に
 棲毛を衣とし血を飲で昆弟相疑ひ山に登事飛禽の如
 く郊を行る事走獸の如し撃ば草に隠れ追ば山に入て
 人民を略む古より己來いまだ王化に染ず今朕汝が爲
 人を見るに身體長大にして容姿端正也力は能鼎を枉
 る猛き事雷の如し向ふ所敵なく攻所必勝すといふ事
 なし即知之體は吾子にして實は神人也これを寔に天
 朕が不淑を感で國の不平を靜謐て天業を經綸宗廟を
 不易ならしめんの命ならん是天下は則汝が天下也朕
 が位は則汝が位也願は謀を深くし遠慮を慮て暴賊姦鬼
 を攘退べしと詔ありければ日本武尊斧鉞を授り再
 拜して奏して曰嘗て西戎を征するの年天威を施し秦

熊襲を戮す其後決辰も經ずして東夷暴逆す速に天神
 地祇を祀り 天皇の聖恩を蒙りて其境に臨み徳教を
 示すに猶服せざるものあらば忽兵を發してこれを誅
 罰し四海を謐じ叙慮を慰奉ん 天皇即吉備武彦。大
 伴武日連を日本武尊に從しめ七擲脛を膳夫として冬
 十月朔日威風凜々として出陣したまふまづ 枉道て
 伊勢太神宮を再拜し倭 姫命に辭して曰今詔を被て
 東征し反賊を誅んと欲す於是倭 姫命寶劍を授て
 憤で怠り給ふ事なかれと命じ給ふ日本武尊打立て駿
 河國に至る其地の姦賊陽從ひ尊を欺て曰此郊に麋
 鹿あり氣は雲霧の如く足は茂林の如しこゝに臨んで
 狩し給へと奏す尊其言を信じ曠野に入て悠々然とし
 て覓獸し給ふ姦賊思ふ圖に將て相圖の狼煙を上げ
 れば伏勢一度に起て其野に放火し天兵を塵にせん
 とす尊驚破謀れぬと知めして佩せ給ふ叢雲の寶劍を
 すらりとぬき草を薙攘ひなぎはらひし給ふ風忽然と
 して變り賊軍へ吹靡き猛火熾になれば賊兵途を喪ひ
 烟に噎で倒れ臥す風威いよゝ強して炎四方に滿々

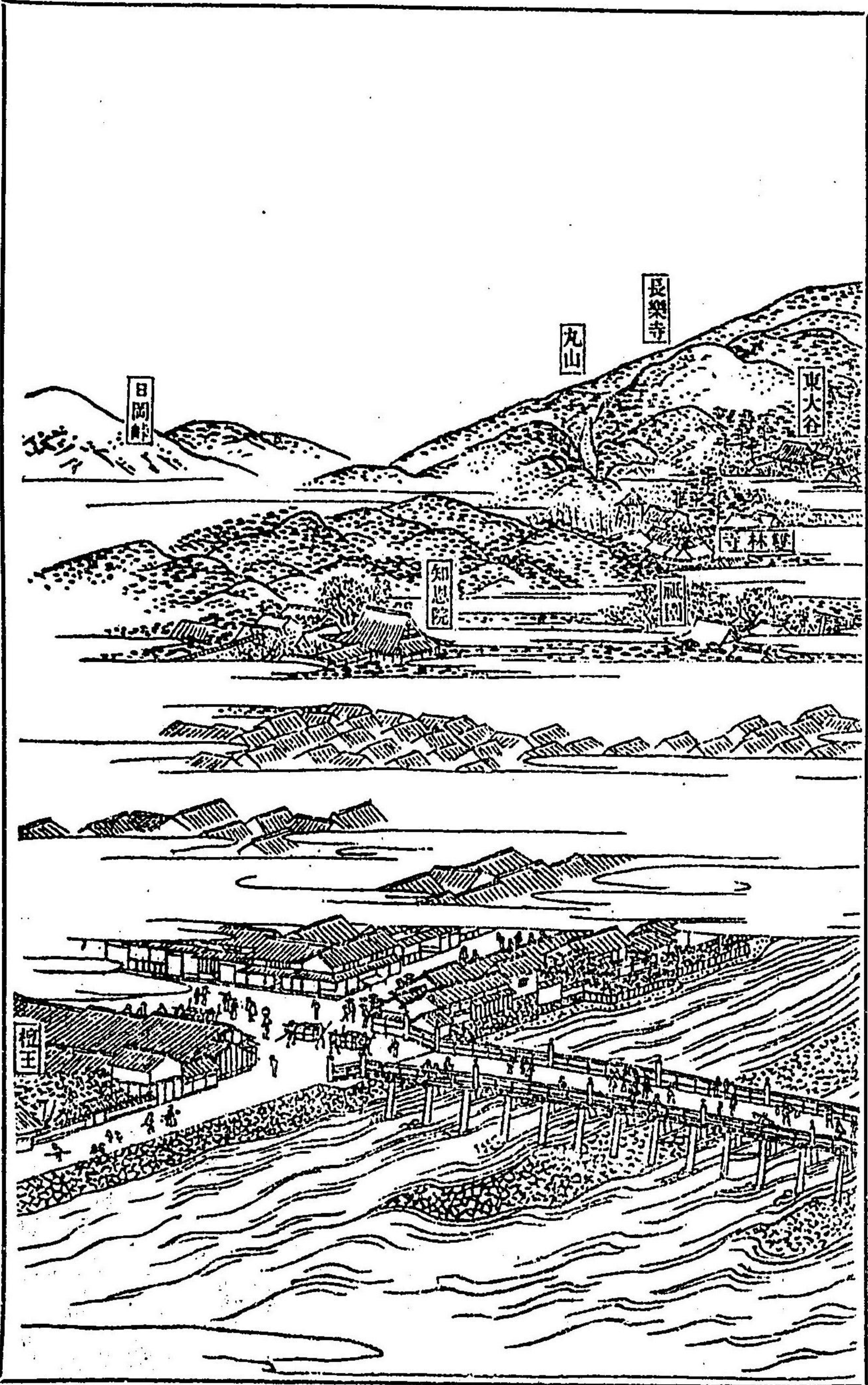
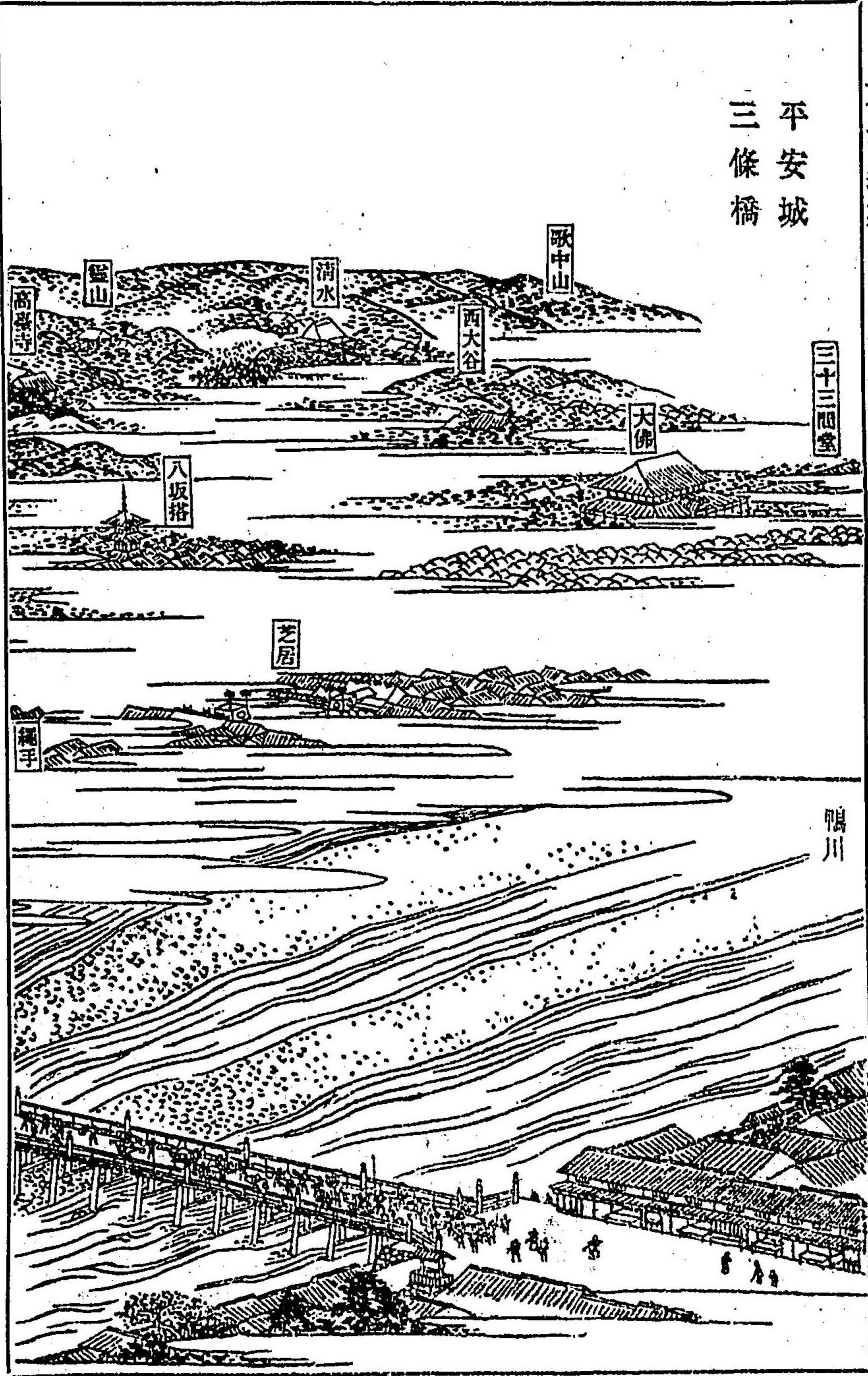
たれば逆賊残らず討れにけり於 是草薙神劍と改
 給ふ其野を燒津といふ 在所末に尊直に進んで相摸國を
 越上總に至り 艦して海上を渡らせ給ふ暴風忽起り
 て王船を覆さんとす尊の從給ふ愛妾 橘媛宣ふは今
 風つよくして濤必鷓舟を沈んとす海神の所爲也願は
 妾尊に贖て海に入尊の御身を恙なくせんと言訖て瀾
 の底にぞ入給ふ暴風忽止んで王船は着岸し給ふ故に
 時の人其海を馳水といふ尊は上總より陸奥に入て蝦
 夷の千島を悉平げ給ふ凱陣の御時確日嶺に至て東方
 を臨給ひ三 歎て吾孀者くと宣ふ於是關のひがし
 を吾孀といひ風俗たるは此縁也

夫名劍の徳は釋名 曰劍は檢なり非常を防檢するの
 所以也管子を按するにむかし葛天盧の山を發て金を
 出す蚩尤これを得て劍を製す名を劍鏗といふ是劍の
 始也周官の桃氏劍を作る厥后楚に龍泉あり秦に太阿
 工市あり吳に干將鏘耶あり越に純鈞。湛盧。蒙曹。
 魚腸。巨闕の諸劍あり漢に高祖の斬蛇あり三尺を提
 て天下を取る魏に文帝の飛景。流彩。華鋒の三劍あ

都のひんがし祇園わたりの
 春のけしき華頂の初花咲そ
 びる頃より地主の櫻の雲こ
 見へ露とちるまで貴賤の服
 ひ圓山の稲歌歌精の昔の昔
 雙林の能羅子女侍の合下河
 原の生花桃楊の昔二軒茶
 屋の豆腐切の昔これみな祇
 園の御神をすしむ御神樂
 の餘りなるべし
 京の水の清きにて
 洗ひみがき
 英服をまこ
 ひて月花に
 うかるも
 名物の一種
 水至て清き
 時は魚すま
 すこ東方先
 生明然とし
 てのたまへ
 る空百
 なりき



平安城
三條橋



りこれら天下の名器也我朝にも小鳥、膝丸、毘切、蜘蛛切、小狐等あり和漢名劔を賞じて天下を治る事古今にゆゑしき例なるべし

古今物名 さかりこけ

花の色はたゞひとさかりこけれとも たかむこのこしはるかへすくそ露はそめける

桓武天皇平安城を興基ありしより結繩の政をして天下を化成し加之代々の聖主徳を踏仁を詠じ上古の風を同うして群生を撫育し給へば四海静にして億兆の歳を彌らんとぞ見えにける光廣卿略の記云延喜の御事をこそ又なき例にも申めれどそれもはしくは匈奴残りたるよし古き文にも見えたり今關のひがし戸ざしわすれて天が下卓錐の地までおだやかならずといふ事なし蔡邑獨斷曰京師は天子の畿内千里日月を象る日月の躡次千里なり毛詩曰文王都を豊に造る蘇秦云燕の地方二千里帶甲十萬これを天府國といふ左思が都賦に金城の萬雉を建三條の廣路を披き十二の通門を立たり抑平安京は都て一千

餘歳の都にて中華にも其例あらず畿内七道は天武帝の御時勅によつて定られ其中にも東海道その冠首たり草薙の餘光焔々として四海の潮は東日に照されて浪の音謐也干戈の威日々に新にして泉鳥敢て翔らず賞罰殿にして虎畏れをます江府までの往來貴賤となく老少となく夜となく晝となく公卿は勅を蒙りて春の御使藩屏の諸侯はかほるく參勤ありあるは商人の交易斗藪の桑門風騷の歌枕俳諧の行脚伊勢まゐり富士詣まで驛路の鈴の絶間もなく馬あり竹輿あり舟あり橋あり泊くは自在にして酒旗所々に翻翻たり周禮曰國野の道十里に一廬あり廬に飲食あり三十里に宿あり宿に驛亭ありとぞ馬に鈴をつくるを驛路の鈴といふむかし毎年貢を馬にて運び藏奉る時又は公卿國々の任ありて守護に下り給ふ時此鈴を付たる馬は夜も關の戸を明て通しけるとなり日本紀孝徳帝の御宇大化二年に關宿を定め驛馬傳馬に鈴の契を付る事あり又續日本紀及び延喜式江家次第令義解等には粗見えたり

新六

旅人の山路へわふる夕霧に

衣笠内大臣

同

道細き里の驛の鈴鹿山

爲家

同

神もさそふりくる雨はしの塚の驛の鈴の小夜深き聲

道遠院

國王七鈴をもつて七道へつかはすには官使に一ツづゝ賜ふ也これを印にてむまやへつく毎にふりならして宿る也其所を驛路といふ驛舎は京師より江戸まで五十三驛也洛陽教業坊三條橋は東海道の喉口にして行程もこれより員始る橋上より洛東の風景を見渡せば木間く神社佛閣列りて花洛の勝景こゝにとやまる橋下の流は水上に鴨皇太神宮ましますにより鴨川といふ名産は硯石水乾すして墨色に艶あり五月の頃は日々に鱒を漁て鬪貢し奉る至て美味也長には台嶺巍然として王城の鬼門を護り悪魔を攘ふ麓に赤山御蔭社一乗寺の降り松石川丈山の詩仙堂白川の瀧如意蘇淨土寺山の大文字月待山の麓には銀閣寺あり神樂岡吉田社は神祇官の齋場にして日本の神々を鎮祭る其南に真如堂黒谷西に百萬遍東に永觀堂あるは鹿



が谷談合谷松虫鈴虫の古墳光雲寺若王寺五山之上の南禪寺山腹には駒が瀧山嶺を獨秀峯といふ三條橋上より南を眺れば華頂山智恩教院圓山の山亭には四時花たえず蹴鞠の香音糸竹の宴會此院々にて遊興を促す長樂寺東大谷雙林寺の西行庵大雅が跡祇園女御の祠蹟祇園社二軒茶屋赤蔽膝刷々として豆腐切る音丁々たり下河原の酣歌の聲祇園町の待宵雲の鬢づら花の顔露打の作り花香煎匂ふ筒井筒いづくも共に秋ならぬ紅葉の色の小町紅清風まねく奇麗扇九ツ十のうなむをとめの拍子よくとんとんと手鞠歌春は曙夏は夜る四條河原の夕涼蟬の羽蒸る染帷子雪の肌をわれや一方見の見ゆる最負組芝居は早雲花矢倉繩手に雨止地藏尊建仁寺の陀羅尼の鐘六波羅蜜寺向ひ鐘六道能化の南無地藏安井の金比羅蛙が池菊溪菊水牛王祠寺は桂のはし柱七観音に伽羅の像八坂の庚申八坂の塔高齋寺の姥櫻幽艶たる萩の花靈山の樓閣より洛陽の萬戸鮮也鳥部山西大谷三寧坂經書堂仲光寺子安の觀音車舍馬止めこれより清水寺に至る地

主の櫻音羽の瀧鼻の水景清が爪形南の方を歌中山清閑寺といふ九重の丹楓要石豊國山阿彌陀峰繼信忠信の石塔三島社東を小松谷といふ法然上人舊蹟の淨刹あり是より苦集滅道澁谷とて山科過て大津へ出る往還也大佛殿は天正年中秀吉公の御建立にして盧舍那佛を安じ樓門には二王の大像内には金色の高麗狗あり古豊國の社にありしとぞ又南に石塔婆あり世俗秀吉公の古墳と云傳ふ大鐘は南方回廊の外にあり三十三間堂を蓮華王院といふ一千體の觀音を安す堂前に夜泣水池の面の燕子花濃紫の色麗しく此所の美觀也後堂にて大矢數あり諸侯の家臣こゝに來て射術を極す東に妙法院法親王の御殿あり日吉社智積院養源院池田町には梵論々々の寺あり明暗寺といふ其南の柿園は松永貞徳居士の遺蹟也新熊野社新熊野觀音泉涌寺に泉涌水あり又佛牙の舍利世に名高し 帝王皇妃の御陵も當山にあり東福寺は藤原氏の菩提所にして開基は聖一國師五山の其一也初めは地名を月輪と號九條關白兼實公の山莊也此ゆるに月輪殿下と號す嫡

孫大相國光明峰寺道家公禪法に歸し給ひ此地を聖一國師に寄附し南都東大寺興福寺を合て東福寺と號す通天橋の紅葉は蜀錦の如し兆殿司虎關の兩僧も此寺に住し思園池の龍圓栢の唐木等名所多し三峯の峰稻荷社は元明帝和銅四年二月初午日出現し給ふ延喜八年贈大政大臣藤原時平三峯の社を修造す永享十年に社を山下今の地に移す南に深草山寶塔寺石峰寺の五百羅漢の石像極樂寺の舊跡に昭宣公の古墳あり元政法師の住所伏見の桃山大和大路を北へ登れば五條橋河原院の古蹟離ヶ島離ヶ森兩本願寺佛光寺の麓まで三條の橋上より一眼に遮て寔平安京の佳景なり

治宗近が水光秀が塚日山神明宮東岩倉大日山此邊の土を製して陶器師ありこれを粟田焼と賞す蹴上の清水は牛若丸吾妻に下り給ふ時關原與市を討て勇威を震ひ日岡峠は木食上人こゝに菴をむすんで阪路を平にしゆきゝの人車牛に慈愍を施す姥が懐千木松松坂といふは日岡の阪路也其ひがしに御廟野あり 天智帝此野に御狩し給ふ時忽然として昇天あり御沓の落止る所に陵をぞ建たり『むかしは御廟道の傍にありゆきゝの人馬乗物より下りて拜をなし通りけるなほ車馬の恐れ多しとて上なる山にうつし奉りぬこれを鏡山といふ峰に松林繁茂あり拾芥抄云十陵の第一也麓に八角の石あり 天皇の御沓此石上に落けり故に御沓石といふ或が云 天智帝の御陵は薩州鹿兒島にありとなん秘藏の事なり』

洛陽三條橋 是東海道の首にして鴨川を過て白川橋あり南の方に青蓮院御門跡粟田御殿金藏寺の三猿堂米地藏粟田天皇華頂山には親鸞聖人植髮尊像あり抑華頂山と號するは法華經玄義に華頂佛尊と見えたり中華天台山の最峰に四時花絶すこれも又華頂となづくこれらの間にやよるならん將軍塚は華頂の高嶺にあり天下に災害あらん時は鳴動すとなん小鍛

明王寺は陵村の北にあり本尊十一面觀音は慈覺大師の作也境内に鏡の池あり 天智帝昇天し給ふ時玉體此池水にうつりしとなん陵村植野村を過て澁谷越あり『京師五條橋へ出る下街道也これより清水大佛兩

本願寺への別れ道にしていにしへは苦集滅道といへり都て此邊を山科郷といふ中に十六ヶ村あり澁谷越を南に行けば東西本願寺の山科御坊といふありむかしの御堂の舊蹟逆如上人の墳實如上人墳岩屋明神大宅寺山階寺の舊蹟栗栖野には田村將軍墳大宅村には三條右大臣藤高公の塔西の山村には大石内藏助良雄蟄居の跡花山に大石が斷食石花山の稻荷梅本寺阿彌陀堂元慶寺僧正遍昭の墳東山寺澁谷小町寺等は此道より京師へ出る路傍にあり」奴茶屋は此別れ道の北側にあり此先祖は片岡丑兵衛とて射術の達人也今に茶店に箭鏃を數々飾る吉祥山安祥寺は北の山手五六町にあり眞言宗にて高野堂と呼ぶ山科毘沙門堂は天台宗にて傳教大師の開基本尊は毘沙門天王御寺務は法親王住職し給ふ右に法華宗の檀林あり護國寺といふ京師妙傳寺に屬す左に諸羽明神のやしろあり天兒屋根命を祭る又山を諸葉山とも書す或は柳山ともいふ楊柳山十禪寺は四宮村にあり本尊聖觀音は聖德太子の作也此ほとりは 仁明帝第四宮人康親王の棲給

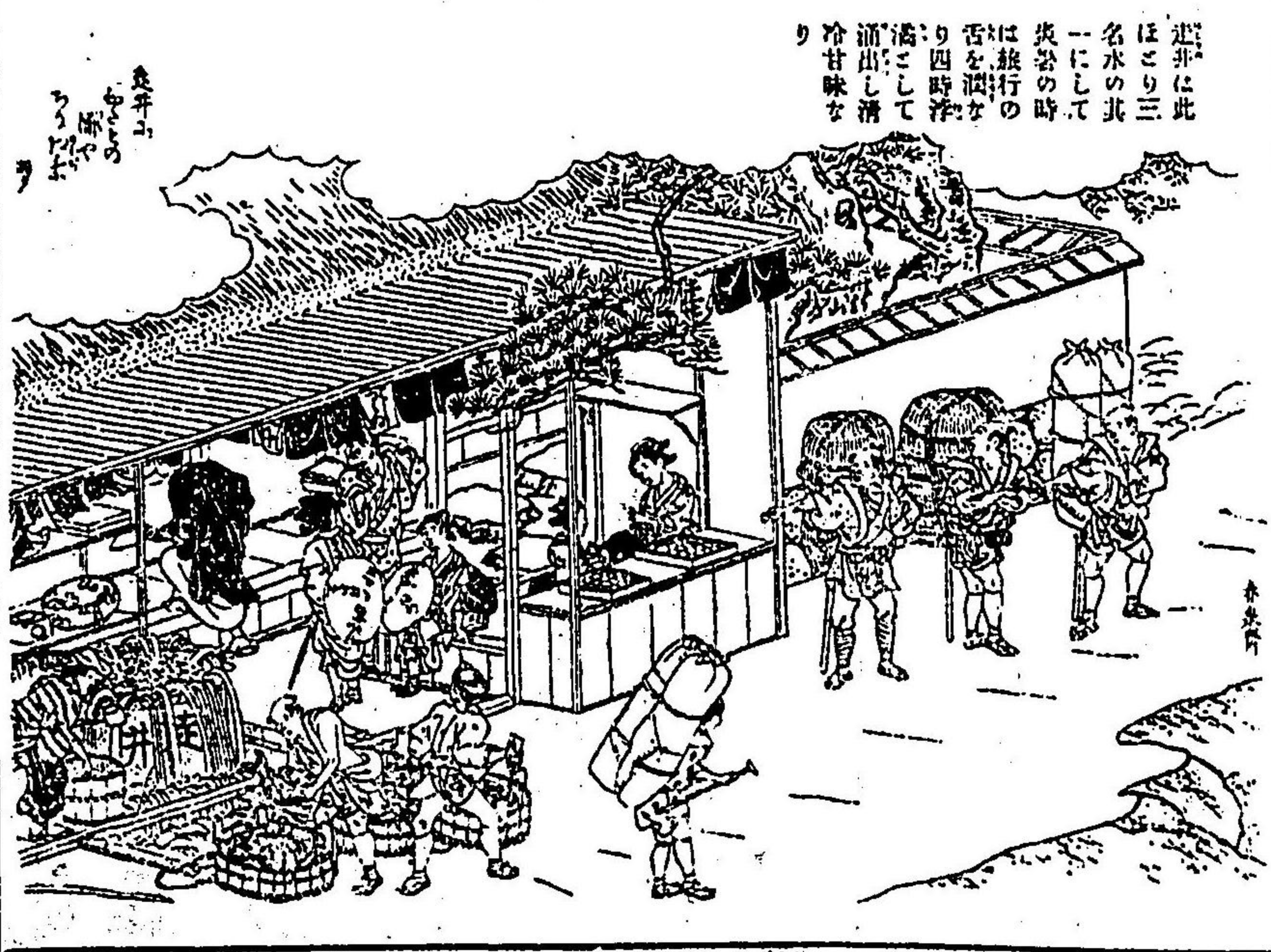
ひし所也山階宮と稱す『三代實錄曰山科宮四品彈正尹人康親王貞觀元年五月七日出家入道し給ひ同十四年に薨じ給ふ年四十三宮殿の風景伊勢物語に見えたり』後に寺とし此禪師を開祖とすそれより久しく荒廢せしを天和中眞慶法印といふ人こゝに住職す『此人異相の道人にして常に小牛に乗往反し又襤褸を着て參内しけりとなん』堂舎は明正院上皇靈夢を感思し給ひ明暦元年に再營ありて二重の高閣を建られ得月臺と號く則宸書の額あり上皇時々行幸ましめて山水を愛し額前に短冊石を布て鳳翥より下り給ひ此石上を行幸し給ふと也本尊阿彌陀佛は 後陽成院の勅作也竹が鼻地藏寺は播州網干龍門寺の盤桂禪師中興し給ひ本尊地藏菩薩は弘法大師作也四宮村廻地藏は小野篁の作にていにしへは小幡里に 六所に建られし也 每歲七月廿四日六地藏 四宮川袖くらべといふ所あり古は市場なり

拾玉 あはれなりこれも世わたるいほまかし 慈 鎮

そのやましの和くちへまで

小關越 四宮村に道晴茶屋といふ併の名物あり此左側の野徑より入る也或が云道晴にはあらず延寶の頃澤村道範の第あり此人の名をどうはれと訛るなりとぞ小關越より長等山三井寺に至る中途に峠あり其東藤尾に山田堂といふあり石光山念佛寺と號し三井寺に屬す本尊には方八尺餘の岩石に阿彌陀佛廿五菩薩梵字等を鐫す智證大師の作也とぞ其外大日如來役行者不動尊を安すこれは京師清水氏靈夢により此山より感得す(京師より追分までは都名所圖會兩編に著すこゝには大略を記すのみ)

追分 村の名とす京師大坂への別れ道也札の辻に道分の標石あり 柳 綠 花 紅 の 文字を鐫す右の方は山科音羽村音羽川牛尾觀音白石明神白石菴妙見祠勸修寺大龜谷を越て藤の森へ出る又小野より南へ行ば小野宮隨心院小野小町化粧水深草少將通ひ路醍醐三寶院上醍醐巡禮觀音醍醐水一言寺日野樂師鴨の長



追分は此名水の其一にして炎暑の時香を瀉せり四時清濁出して冷甘味なり

明方丈石平の重衡塔明智光秀が亡所小栗栖の藪六地藏櫃川木幡里黃葉山萬福寺宇治里宇治橋橋寺惠心院興正寺三室觀音朝日山喜撰が嶽龜石浮塔跡平等院扇の芝釣殿觀音縣のやしろ茶師上林等の町を歴て大和街道廣野新田へ出る也こゝに方壹里餘の大池といふあり冬は水鳥多し鯉鮒を漁る追分より伏見へ三里大坂へ十三里伏見より晝夜共に船あり

相坂山 追分よりひがしの山をいふ古詠多し

後撰 名にしおは、相坂山のされかつら 三條右大臣
人にしられてくるよしもかな
後拾 相坂の杉のむら立引程は 眞選法師
なふちに見ゆる望月の駒
金葉 わさしこが相坂山の郭公 源 定 信
明ればかへる空に啼なり
詞花 相坂の杉間の月のなりせは 大藏卿 匡 男
いくきの駒さいかて知まし
新古 鶯のなげさもいまたふる聲に 太上天皇
杉の葉白き逢坂の山
新後 湖うみやけふより春にあふ坂の 定 家
山しかすみてうら風そ吹
後拾 逢坂の山越はて、なかわれば 後京極攝政
霞につくくしかの浦波

走井 逢坂大谷町茶店の軒端にあり後の山水こらに走り下つて涌出る事瀝々として寒暑に増減なく甘味也夏日往來の人渴を凌ぐの便とす

拾遺 走井のほこをしらばやあふ坂の 洛 原 元 輔
關引こゆるゆふかけの駒
家集 逢坂のかけ樋の水にながるは 兼 昌
音羽の山の木葉なりけり
同 走井のかけ樋の霧はたなひけと 同
のまかにすめる望月の駒

百歳堂 走井前裁の上の山にあり額に百歳堂と書す
百歳堂の筆厨子に小野小町百歳の像を安す座像壹尺右
の手に筆左に短冊を持運慶の作といふ奇作にて古雅也姥櫻堂前にあり

笹原薬師 百歳堂の右にあり石像の薬師を安す關西
笹原薬師と稱す

逢坂關 舊跡は逢坂山の峠より少し東上片原町尼寺
のほとりをいふ也文徳實録に曰文徳天皇天安元年初
て逢坂關を建る關守十二人又寺門より又壇衆二十人
兵具嚴重に鋳て金剛力士の如く忿怒の眼を張て双び

居ると舊記に見えたり關守十二人に天皇より關兵士の號を給ふ今に於て清水町に福塚氏とて其兵士家の末葉一家ありいにしへは關明神の支配も此家より勤しとぞ正徳年中寺門と評論に及び此事も絶しなり又或が云此福塚氏は蟬丸の隨士にて此相坂に來り蟬丸に仕へしといふ『新關』逢坂山の峰といふ詳ならず後藤記云永祿八年八月十八日江陽屋形木家 江西の旗頭に命じて逢坂山に新關を建て關守には山内十兵衛尉これを固むといふ

古今 音羽山音に關つ、あふ坂の 在 原 元 方
關のこなたにさしをふるかな
後拾 逢坂は東路とこそ聞しかと 左京大夫道雅
心つくしの關にそ有ける
新勅 相坂の關ふみならずかち人の 後京極攝政
渡れとぬれぬ花の白浪
續古 色かばるみの、中山秋へて 定 家
又遠さがるあふさかのせき
續拾 相坂の關の杉むら雪消て 衣笠内大臣
道ある御代と春はきにけり
新後 横雲は峯に別れてあふ坂の 源 清 兼
關路の鳥の聲を明ぬる



續千 今しかし月さしやさらぬ旅人の
 進ひろき世に逢坂の關
 新後 逢坂の關の杉むら霧こめて
 立こも見への夕かけの駒
 續古 けふひける駒はのりこそかしこけれ
 佛の道にあふ坂のせき
 同 逢坂を越たに果の秋風に
 末こそおもへ白川のせき
 新後 朝いて、けふ越初るあふ坂の
 關や旅れの始なるらん
 平政時朝臣

〔清少枕草紙〕 頭辨のしきにまいる給ひて物がたり
 (行成卿との物がたり也)などし給ふに。夜いとふけぬ。あす御ものいみなるにこもるべければ(禁中の御物忌に籠らんと也)うし(丑の時)になりなばあしかりなんとてまいる給ひぬ。つとめて藏人所のかうやかみ(紙屋紙)ひきかさねて。後のあしたはのこりおほかる心ちなんする夜をとをして(通夜)昔物語もきこへあかさんとせしを。とりのこゑにもよほされと。いとみじうきよげにうらうへに(裏表)事おほくかき給へるいとめでたし。御かへりにいと夜ふかく侍ける鳥のこゑはまうさうくん(孟嘗君)のいやときこへたれば。たちかへりまうさうくんにはと

りはかんこくくはん(函谷關)をひらきて。三千のかくわづかにされりといふは。あふさかのせき(猶清少に逢んとの事なり)の事なりとあれば
 清少の歌
 夜をこめて鳥のそらればはかるこし
 世にあふさかのせきはゆるさし

心かしこきせきもり侍るめりとさきこゆ。(行成)たちかへり
 行成の歌
 あふさかは人こえやすき關なれば
 鳥もなかれとあけてまつさか

とありし文どもをはじめのは僧都(隆縁なり)のきみのぬかをさへつきてとり給ひてき。のちの御まへ(后宮)にて。さてあふさかのうたはよみへされて返しもせず成にたる。いとわろしとわらはせ給ふ
 山近兩國塚 いにしへは逢坂山の峠の少し南也今に兩國寺といふ淨刹あり當時は追分を山城近江の界とす此邊の名物には大津繪又は算盤縫針銀頭等也繪は土佐又平こゝに住て書初しとぞ算盤は一里塚前を善とす針は此所の名池の側世に名高し原此針細工人

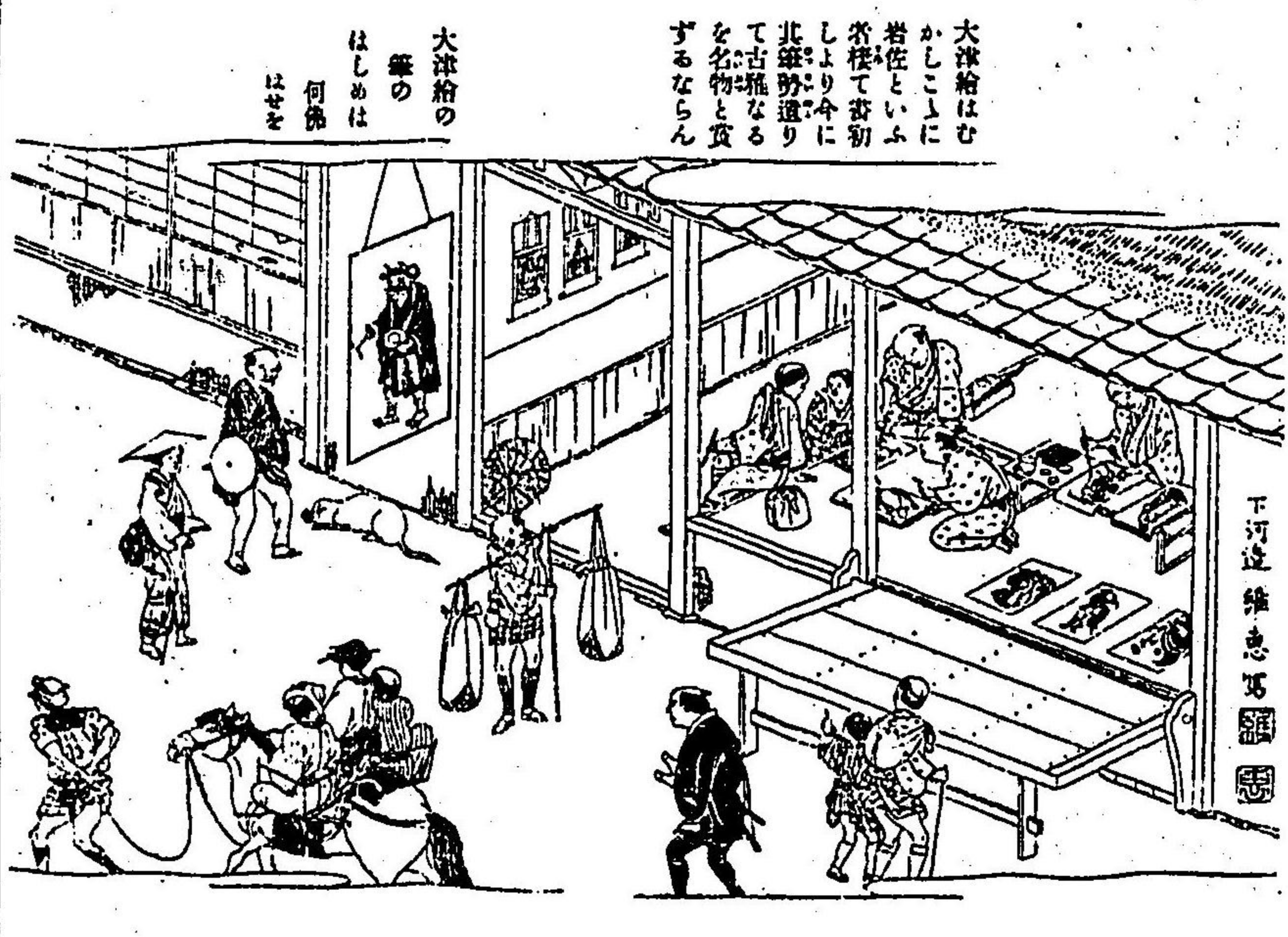
の家京東六條に大きな池ありて其側なれば池の側針といふ東本願寺建立の時公命によつて針師殘らず逢坂山の麓に替地を賜ふ舊名を呼んで今も池の側といふ

蟬丸明神祠 逢坂上大谷町左側にあり蟬丸靈を祭る例祭五月廿三日蟬丸の事次に見えたり

關寺小町蹟 相坂片原町阿彌陀堂をいふ又清水町の山手に世喜寺といふあり末に見ゆ又小町塚は清水町妙光寺といふ經宗の寺にあり何れも由縁定かならず

家集 日くらしのなく山里の夕ぐれば 小野小町
 風より外にとふ人そなき
 同 百くさの花のひもさく秋の野に 同
 おもひたはれむひとなとかめそ
 同 あるはなくなきはかすそふ世中に 同
 あはれいつれの日まてなげかん

〔壯衰記〕三皇五帝の妃も漢王周公の妻もいまだ此驕をなさず衣には錦繡をかさね。口には海陸の珍味をととのへ。身には蘭麝をかほらし。常に和歌を詠じて萬の男を賤くのみ思ひくだし。女御更衣に心をか



逢阪山
關明神
蟬丸祠



けたりし程に。十七にて母をうしなひ十九にて父に
 おくれ。廿一にて兄に別れ。廿三にて弟をさきだて
 しかば。單孤無縁の獨人と成てたのむかたもなかり
 き。いみじかりつるさかへ。日毎に衰。花やかなり
 し顔年々にすたれつ。こゝろをかけたるたぐひも
 疎くのみなりしかば家は破れて月のみ空しくすみ。
 庭はあれて蓬生いたづらにしげるまでになりけれ
 ば。文屋康秀登河椽になりてくだりけるにさそはれ
 て

古今 わひぬれば身をうき草のれなたへて 小 町
さそふ水あらはいなんとそおしふ

と詠て次第にをちぶれゆくほどに。果には野山にさ
 すらへける。人間のありさまこれにて知るべし
 〔清輔袋草紙〕 小野小町之事見玉造云文書生涯
 壯衰其姓玉造氏也小野若住所之名歟或人云伴壯衰
 記者弘法大師所作云小町者貞觀之人也彼玉造壯衰記
 者他人歟

〔無名抄〕 業平朝臣歌枕見んとてすきにことよせて

あづまのかたへゆきけり。みちのくにいたりてやす
 しまといふ所にてやどりたりける夜。野の中に歌の
 上の句を詠する聲ありその詞にいはいはく
 秋風のふくにつけてもあなめく
 といふ。あやしくおぼへて聲をたづねつ。これを
 もとむるにさらに人なし。たゞ死人のかしらひとつ
 あり。あしたになをこれを見るに。かのどくろのそ
 のかしらのめのあなよりすゝきなんひととおい
 でたりける。そのすゝきの風になびくをとの。かく
 聞えければ。あやしくおぼへて。あたりの人にこの
 事をとふ。ある人かたりていはく。小野小町此國に
 くだりてこの所にしていのちおはりにけり。すなは
 ちかのかしらこれなりといふ。こゝになりひらあは
 れにかなしくおぼへければ。涙をおさへて下の句を
 つけけり
 をのといはいはしすゝきおいたり
 とぞつけゝる。その野をばたまつくりのをのといひ
 けるとぞ侍る。たまつくりのこままと。小野小町と

おなじ人かあらぬ物かと人々おぼつかなき事に申て
 あらそひ侍し時人のかたり侍し也
 〔つれく艸〕 小野小町が事。きはめてさだかなら
 すおとろへたるさまは。玉造といふ文にみえたり。
 此文清行が書けりといふ説あれど。高野の大師の御
 作の目録にいれり。大師は承和のはじめにかくれ給
 へり。小町がさかり成こと其後のことにや猶おぼつ
 かなし

山神森 逢坂の山腹阿彌陀堂の後にあり由縁詳なら
 す

關清水 逢坂の峠弘法大師火除名號石の傍にあり又

關明神御旅所にもあり後世准へ作るものか鴨長明の
 時さへ鮮ならず後世にはなをさらしれがたかるべし

古今 君か代にあふ坂山の岩清水 忠 半
 木かくれたりと思ひける哉
 同 逢坂の關になかる岩清水 讚人しらす
 いはて心に思ひこそすれ
 拾遺 逢坂の關の清水に影みへて 貫 之
 今や明らん望月の胸

〔無名抄〕 ある人のいはく。逢坂の關のしみづとい



ふは。はしり井とおなじ水ぞとなべて人しり侍めり。しかにはあらず。しみづは別の所にあり。今は水もなければ。そことしれる人だになし。三井寺に圓齋房の阿闍梨といふ老僧。たいひとり其所をしれり。かゝれど。さる事やしりたるとたづぬる人もなし。我しなんのちは。しる人もなくてやみぬべき事と。人にあひてかたりけるよしつたへ聞て。かのあざり。しれる人のふみをとりにて建曆のはじめのとし。十月廿日あまりの頃。三井寺へゆく。あざりたいめんして。かやうにふるまきことを。きかまほしくする人もかたく侍めるを。めづらしくなん。いかでかするべつかまつらざらんとて。ともなひてゆく。關寺よりにしへ二三丁ばかりゆきて。みちよりきたのつらに。すこしたちあがれる所に一丈ばかりなるいしのたうあり。そのたうのひんがしへ三段ばかりいたりて。くぼめる所は。すなはちむかしのせきのしみづの跡なり。道よりも三段ばかりやいりたらん。いまはこいへのしりへになりて。當時は水もなくて。見どこ

ろもなけれど。昔のなごり。おもかげにうかびていうになんおぼへ侍し。阿闍梨かたりていはく。此しみずむかひて。水より北に。うすひはだふきたる家。ちかくまで侍けり。たれ人のすみかとはしらねど。いかにもたい人の居所にはあざりけるなめりとぞ。かたり侍し』
 寺門において應安の舊記を見るに圓齋房の名なし早其頃亡滅せしか又清水の跡を尋ぬるに本文の趣今さだかにわかり難し大略清水町のほとりなる歟
 關明神祠 逢坂上片原町左の上方にあり此邊より大津清水町までの生土神とす例祭五月廿四日神輿一基清水町御旅所へわたりあり『祭神二座』一座は猿田彦命又道祖神或は幸神とも稱す一座は蟬丸の靈を祭る
 行かふ人を見て
 後撰 これやこのゆくしかへるもわかれては 蟬丸
 新古 秋風になひく淺茅のすゑことに 同
 なくしら露のあはれ世中

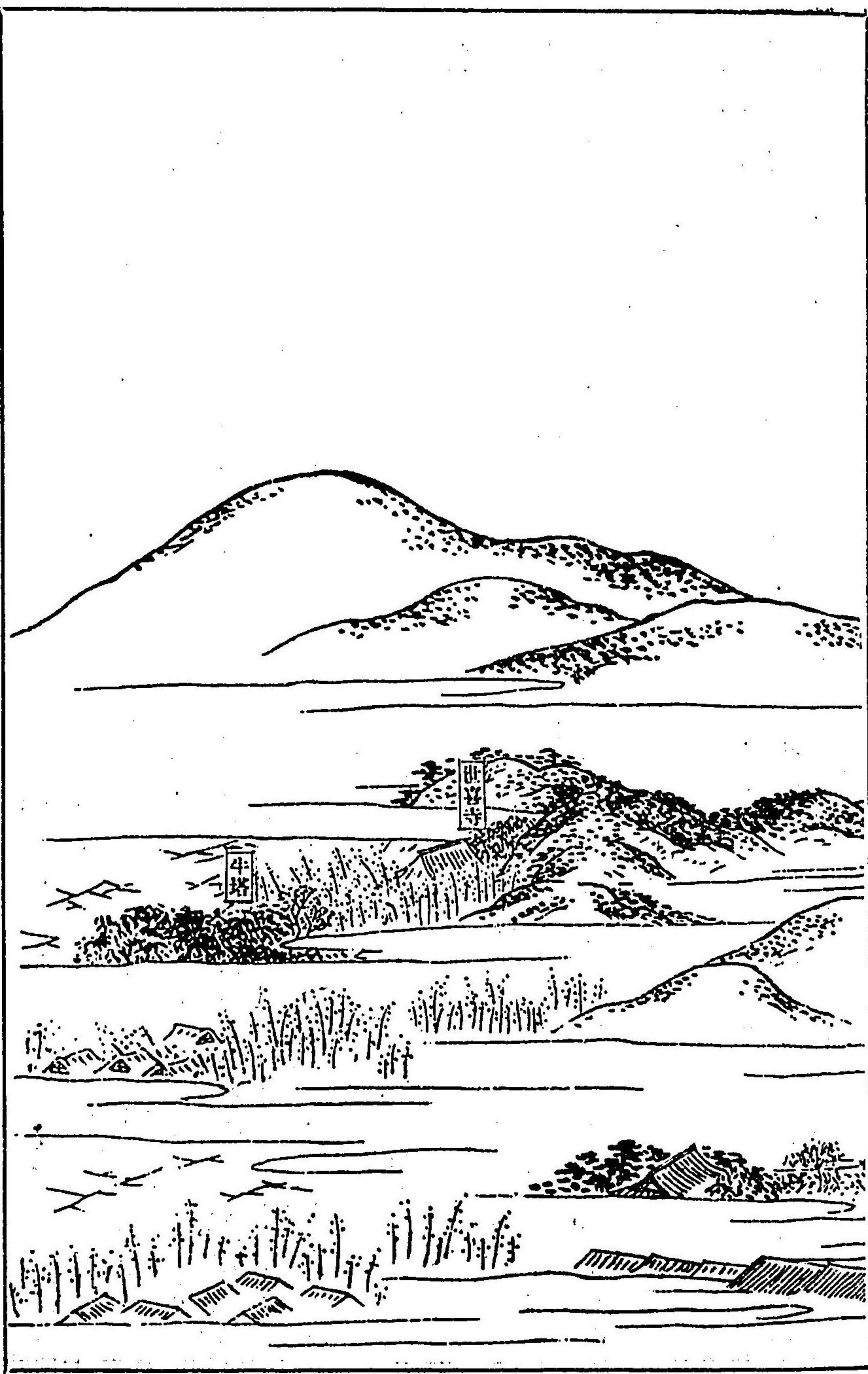
新古 世中はとてもかくてもおなじこと 蟬丸

横古 相坂の關のあらしのほけしきに 同
 立あてそある世を捨んさて

〔無名抄〕 會取に。關の明神と申は。むかしの蟬丸の。かのわら屋のあとをうしなはずして。そこに神となりてすみ給なるべし。いまもうちすぐるたよりにみれば。むかしふかくさのみかどの御使にて。和琴ならひに。良峰宗貞良少將とて。かよひけんほどの事まで。おもかげにうかびて。いみじくこそ侍れ』
 されば蟬丸の姓氏詳にしられず式部卿敦實親王宇多帝の皇子の雜色に管弦を常に嗜み琵琶を善し自流泉啄木の曲を愛して敢てこれを人に傳ず世を遁れ會坂の關に菴を結んで山居しける平生に弄ぶ琵琶を無名と號す蟬丸頭は童子の如く體は僧に似たり時の人道士といひ又仙ともいふ博雅三位かの流泉啄木の秘曲を習はんとて此菴に通ふ事三歳に逮りある時風雨頻なる夜其ころの切なるを感じて秘曲を残らず傳し事

など江談に見へたり
 蟬丸の謠曲に延喜帝の皇子とし又は盲人と作れる事其證詳ならず蟬丸は異なる道士にして世の塵埃に染らず無心の境界なれば盲人と作れる事いはれなきにしもあらず又博雅は延喜帝皇孫にて親王克明の子にておはしけるなり世には博雅の三位と申にや
 關小川 逢坂山の南溪より流れ出る小川也大津にて吾妻川といひすゑは鏡川となづけて湖水に入る
 新千 立かへりなを相坂のいしま行 家 隆
 關のぶ川の花のしらなみ
 金葉 音羽山紅葉ちるらし會坂の 俊 頼
 關の小川に錦をりかく
 手向山 逢坂山の北關明神の後といふいにしへへにも神祠ありしと見ゆ
 千載 紅葉はを關守神に手向置て 權中納言實守
 相坂山を過る木からし
 夫木 鳥居たつあふ坂山のさかひなる 仲 正
 手向の神よ我ないさまぞ
 安養寺 小坂町左にあり寺門長吏に屬す開基智證大師むかしは此上の山にあり後世こゝに移す

近松御坊
世喜寺
牛塔



『本尊立開觀音』長壹尺八寸智證大師の作昔蟬九逢坂の庵に絃曲を樂給ふを夜々立聞し給ふゆゑ此名あり又春日の作の阿彌陀佛を安置す『蓮如上人名號石』石面に無礙光如來と鐫す初は墨書也後世剋す寛正六年の春此上人台徒に襲れ近松寺に忍びし時これを書す關清水明神祠 清水町にあり關明神例祭の御旅所とす社内に關の清水あり後世准作る物歟

世喜寺 同街の左の山手にあり〔拾芥抄〕云關寺本尊彌勒志賀郡にありいにしへは伽藍魏々として三井寺の別院也中頃惠心僧都もこゝに住給ふ今時宗も成本尊に阿彌陀佛を安す『牛塔』當寺門前下壇の地にあり初め關寺建立の時材石を運ぶ大牛也本尊彌勒の前にて屠ぬこゝに葬りて塔を立る

近松山顯證寺 大津寺内にあり西本願寺派河州久寶寺村顯證寺兼帶所也門徒近松御坊と稱す『本尊阿彌陀佛』長貳尺斗親鸞聖人畫像聖德王七高僧蓮如上人二世蓮淳上人等の畫影を安置す傳に云寛正六年の春本願寺第八代蓮如上人洛東大谷

に寺職し給ふ時叡山より衆徒三百餘騎押寄一時に本願寺を燒討にすそれより蓮如上人所々に移住し堅田より大津に來り給ふを門徒濱名太郎左衛門といふ者三井寺を頼しかば長吏より院々へ相觸れ寺門五別所の内近松寺を寄附し山門の惡徒を防ぎけり因茲蓮如上人こゝに止住し給ふ事三ケ年也西本願寺親鸞聖人の眞影十ケ年餘當山に安置す其後山科御堂へ移されしなり

大津

京師より初の驛也これより東を關東とも坂東ともいふ關東二十八州關西三十八州京よりこゝまで三里大坂より十四里也又草津まで三里半餘也旅籠町の名を八町といふ此地は北越及び淡海國中の產物魚物等船にて運び日毎に市をなして京都へ交易す町數九十六町諸侯の藏屋舖多し
古今 我命まさしくあらは又も見ん 讀人しらす
しかの大津にすする白浪
夫木 秋の日もなから山ののみち葉は 隆 祐
大津の里のかさしなりけり
新六 關越てくるればかへる大津馬 知 家
なつか一つれ道いそくなり

大津宮

〔日本紀〕天智天皇紀五年是冬京都之風向近江移同帝六年三月辛酉朔巳卯遷都于近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多云々

拾玉 音羽山ふかき霞を分入れは 大僧正慈圓
大津の宮に春の花園 資 隆
夫木 さ、波や大津の宮に月すみて 見へこそわたれ三保か崎まで

『大津皇子』天武帝第三の皇子也〔日本紀〕容止峭岸音辭俊朗也 天智帝に愛せられ長に及んで才學あり尤文筆を愛す詩賦の興大津皇子より始る也と云々是時を日本詩賦の初とす

懷風藻 春苑實宴 大津皇子
開輪臨露沼遊目歩金苑澄清苦水深曉霞暎暎遠
驚波共結響啼鳥與風聞群公倒戴歸彭澤交誰論
按に大津宮の舊蹟今の布政司の地ならん歟志賀郡は舊趾志賀里にあり次下に見えたり

練貫水 三井寺の麓大練寺の境内にあり方一丈許の池也深さ貳尺上に館ありて額をたつ練貫水金字にして館の軒にかくる傳云 天智帝の御衣を此水にし練しとぞ清澄にして寒暑に増減なし

双檀道

近松寺山の麓の小徑也上古逢坂の關所ありし時寺門及檀衆二十人關所へ詰し時通ひし道也今も三井寺大會の時檀衆出て故實多し

長等山 三井寺の上の山をいふ北は白鳥越南は逢坂山を限る上古櫻花多し
千載 さ、波やなから山の嶺つゞき 藤原範綱
みせばや人に花のさかりな
同 ふ、さするなから山を見渡せば 藤原良清
尾上をこゆるしかの浦波
新古 見せばやなから山の時ふもとなる 慈 圓
なから山の春のけしきを
後撰 めつらしやむかしなから山の井は 讀人しらす
しつめる影を枿果にける
續古 すかのれのなから山のみれの松 前中納言資實
吹くる風も萬代の聲
玉葉 さ、波や浦風更て秋のよの 入道前大政大臣
なから山に月そつたふく
新千 紅葉ちるなから山に風ふけば 刑部卿範兼
にしきなたむしかのうら波
新後 百日の入堂のためにひえの山無動寺にのぼりてよみ侍りける 入道二品親王
あかむすふ跡をに殘せなかなる 山の下水確ふかくとも

長等山園城寺

志賀郡にあり一名三井寺又寺門と

大津柴屋町の花の
曙に月まつ宵の賑
ひは淡海一州の水
門にして諸國の藏
第あるがゆゑ也
上古志賀郡大津宮
なごむかじながら
の遺風とぞしられ
ける



香泉菰月



稱す天台宗修驗道を兼す女人結界

歌枕 さなみや三井の古寺かれはあれと 支 道

玉葉 なかむればころのそにすみまざる 道 珍

歌枕 涙にたくふ鐘の音こそ哀なれ 後 京 極

夫當山は原 天智帝第五の皇子大友の殿舎なり莊園城邑の地なれば園城寺と號す又祇園精舍紺園化城にも比するならん歟初同帝六年大和國飛鳥宮より樂々波大津の宮に遷都まし〜同七年 天皇靈夢を感じて崇福寺を建立し金色丈六の彌勒佛を安し其翌年又園城寺を草創す『寺門傳記第六曰崇福園城俱天智之御願皇子大友奉詔而創二兩寺一分位同等也就中崇福建立魁園城一年故首崇福一矣』厥后大友與多磨『天智帝皇孫大友皇子五男也』其男都堵磨と相議し天智帝の遺勅を蒙り大友皇子の追福の爲に崇福寺を他へ移し園城寺を再營一新すこれより殿堂巍々壯麗玲瓏として給孤の布金となる其頃教待仙僧こゝに練行し貞觀元年の春智證大師に見て傳法を授與し東北

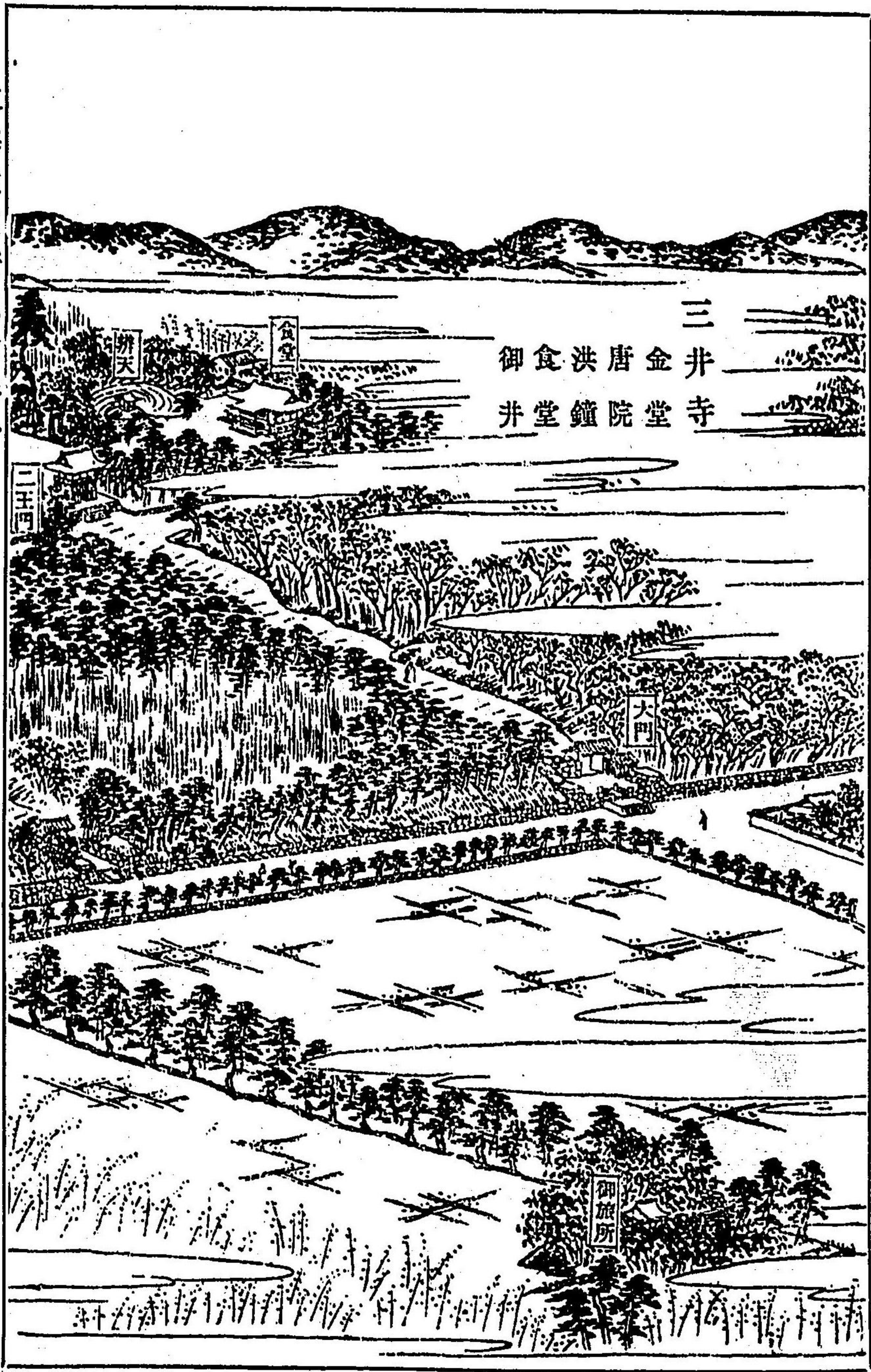
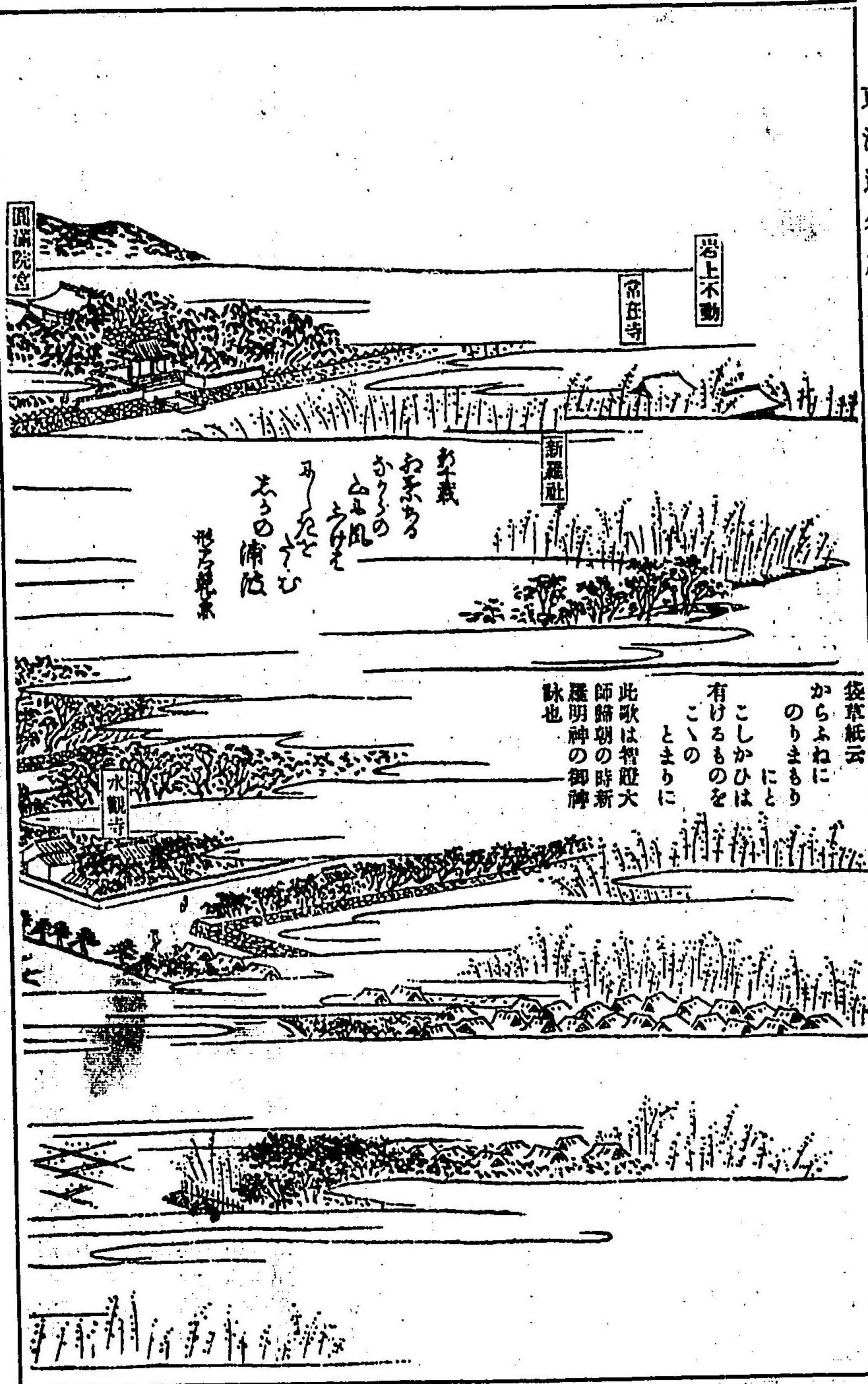
の石窟に入定す其より大師入唐して天台山に登り清涼山に臨み文殊の靈跡を拜し開元寺青龍寺に詣し石象石橋を巡り顯密二教を究め在唐六年にして歸朝し清和光孝陽成三帝の戒師と成寶祚延長を祈り國家泰平を護る於茲三會の曉を期し寺門の繁榮益熾也長等の山櫻は入相の鐘に誘れ丹穂てる秋の月は佐々波に湛へ星霜累れば騷擾の愁なきにしもあらず治承には源三位賴政に荷擔し平家の暴逆に伽藍を弊せられ行營はあさちか原に鴉鳴らんと述懐を詠じ天地老て山河更り龍虎爭ふて草木腥し漸右大將賴朝卿に當山より牒狀を捧しかば平家没官の地を寄附し給ふ事東鑑に見えたりあるは平家物語太平記にも所々に見えて世の人口に膾炙す此寺の高僧記には延暦寺より一百餘年魁じて興基ありし由を書れ三井の古寺と詠せしも宜ならん歟最初 天智帝逆臣入鹿を戮し其罪障を悔給ふて建營ありし事當山鴻基の始元とぞしられける

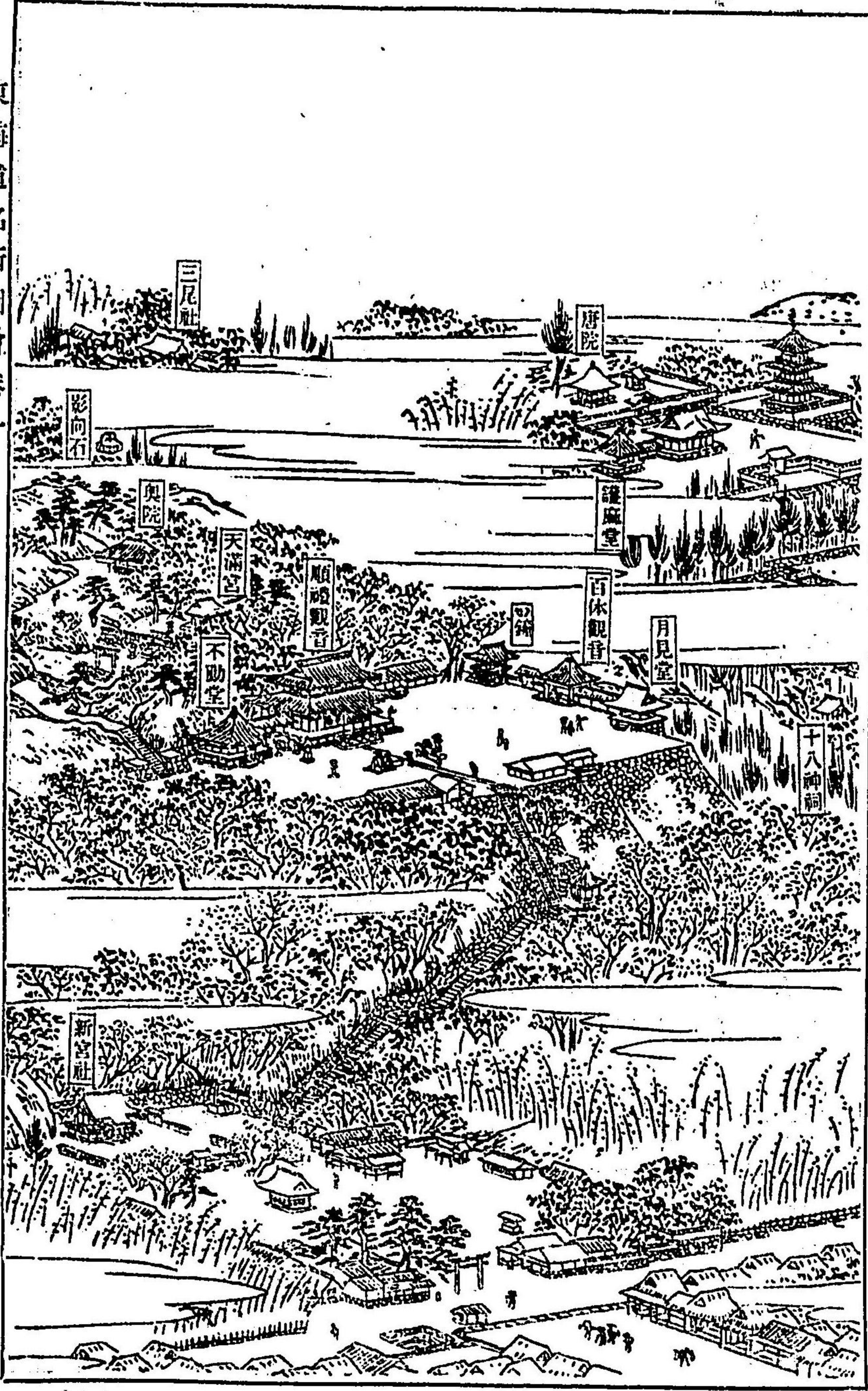
『新羅太神社』寺門北院北谷にあり五社鎮守の其一也

貞觀十七年智證大師の勸請貞和三年足利尊氏再營祭神素盞鳥尊 清和天皇等身の神像を鎮す相殿に般若童子宿王童子を安す右に火御子祠あり新羅は清和源氏なり鎮守府將軍源賴義の三男を新羅三郎義光と號す

〔社傳〕 文德帝仁壽年中智證大師入唐し天安二年六月八日に歸朝の海路に赴給ふ同月十八日酉の刻素髮老翁忽然として海上に現れわれは新羅明神也高僧の教法を護り慈尊出世に到るべしと云終て見えす上浴の時此神又出現し給ふ大師奏問し勅を蒙り初め鴻臚館にとりめ其後三井北院に移す又本地堂には五字文殊を安置す神代の時素盞鳥尊五十猛振命と三韓を征し神靈かの地に止る事神秘あり

現す其古跡を大波止といふ社傳云赤尾(天照大神)黒尾(新羅大神)白尾(白山權現) 『三尾影向石 社頭にあり』 『護法善神社』大門の側にあり五社鎮守の其一也毎歲四月十六日開扉す此日女人詣す千團子といふ 祭神明星天神像を安す大師の作也本地堂に觀世音を安置す 『新宮權現』筒井にあり又の名新日吉社 後冷泉院天喜二年前大僧正明尊勸請す又曆應年中足利尊氏再興祭神日吉山王新宮一説に山王二の宮國常立尊五社鎮守の其一なり例祭五月五日神輿二基寺門境内大津西之町々の生土神とす 『熊野權現』金堂の側上壇にあり五社鎮守の其一也紀三熊野を勸請す 『金堂』寺門中央にあり本尊彌勒佛長壹寸八歩中華南岳大師佛法護持の尊像也本朝 欽明帝御宇初て渡る佛像來朝の最初也 『御井』金堂の側にあり 天智天武持統三帝降誕時此





尾藏寺

尾藏寺

いづのつみはたふ

ちのたり

白ひとよけ

とりのうら

尾藏寺の景

尾藏寺
近松寺
八詠樓



淡海八景
三井晚鐘
湖面朦朧畫
不成。昏鯨島
閣出。園城。假
間好是客船
月。十倍楓橋
半夜聲
相國寺林長老

あつとの夜聲

きりぎりす

まげうき三井乃

入のひの坪

近松園の時鐘

三井



水を産湯に用ゆ故に御井と呼ぶ又此清泉をもつて三密灌頂の闍伽とし慈尊三會の曉を期すとすれば三井とも號く又闍伽井ともいふ此井大友皇子の清所きよところにありむかしよりの名泉にして冽れつしからず鈍鈍からず清妙八徳を具し冬夏に増減なく味甘し

『梵鐘』金堂の側上壇の地にあり高さ五尺五寸亘四尺壹寸厚三寸五分龍頭壹尺壹寸五分傳に云此梵鐘は天竺祇園精舍良方りょうかたにかくる所也佛滅後龍宮界に入りしが延喜の頃倭藤太秀郷ひらたを退治て龍宮より十種の寶器を贈る其中の一器也後に當寺に藏む

〔太平記〕文保二年三井寺回祿の時鐘を比叡山ひえいざんに奪取て撞といへども更に鳴事なし強てこれをつけば三井寺へ歸らんといふが如し山僧怒て無動寺の峰より谷へ落しけり則鐘にひいき多く入し所に小蛇來つて尾をもつて叩ば其地ごとく癒て元の如し

〔寺門傳記〕秀郷龍宮より鐘を得るの説當山に於て取らず秀郷湖中より得て當寺に寄附す法器となるの已來種々の奇瑞をあらはし寺内に凶事ある時は全體に

汗を流し撞ども聲なし又吉事ある時は撞すしておのづから鳴文永の頃山門の狂輩きやうはい當山に寇しかねを取て碎破す一日雲霧降り赤龍現じて鐘をめぐる事數遍なり龍去てかねを見るに聲を發する事元の如し又建武の亂に逆賊かねを奪取て地中に埋む鐘地中に在ておのづから鳴る是足利將軍勝利を得るの吉瑞也とて堀出して寺寶とす當山什寶數品の中にて此梵鐘を第一とす

『食堂』金堂の東にあり本尊釋迦佛赤栴檀毘首羯摩天の作

『大鍋』食堂の縁側にあり口の廻四尋許

『唐院』金堂の南にあり初めは唐坊と號す傳法灌頂の道場なり寺記云清和帝の勅をうけて智證大師草創す寺門最初の建立の地也唐の青龍寺を模す中央智證大師座像貳尺九寸左黃不動尊右御骨大師斗相中央に同じ黃不動は承和五年の冬不動尊金人に姿を現じ大師に告て曰われは是不動明王也弘法擁護のためこゝに來ると云終て見えす即其像を寫し又彫像あ

り共に大師の手作也

『護摩堂』唐院にあり長日寶祚萬歲天下平安の御禱として護摩を修行せらる

『三層塔』唐院にあり本尊釋迦三尊佛此塔初めは大和國比蘇寺にあり 御當家に及んで 命ありてこゝに移す

『新山王神祠』唐院にあり貞觀二年の春大師勅を奉てこゝに勸請す

『寶藏』唐院境内にあり大師將來の諸聖教并に傳法灌頂の寶器を藏む什物寺門傳記に見えたり左に録すが如し

- △大日覺王寶冠 一頂
 - △釋迦如來袈裟 一條
 - △阿難尊者草鞋傳云尊者七歲時鞋 一足
 - △灌頂法器惠果義操法全三師相承灌頂具 一具
 - △尊星王菩薩像 一軀
- 右五品唐の青龍寺傳法阿闍梨法全より智證大師に附與す

△灌頂三摩耶五鈷杵 一具

△五鈷金剛鈴 一口

△白色佛舍利粒々大如母指

其外靈佛靈器數品ありこゝに略す

『十八神祠』南院にあり護伽藍神とす貞觀十七年大師勸請祭神は七佛經の文を配祀す

伊勢 大日枝 十禪師 客人 三の宮 八幡 賀茂 住吉 春日 平野 松尾 石上 武氏 香取 鹿島 江文 丹生 兵主

『辨財天祠』食堂の前池の中島にあり靈驗新なりとて常に信仰の輩多し

『住吉祠』北院にあり寶昭院隆辨僧正の勸請也

『燈幢石壇』金堂の前にあり 天智天皇潛龍の日逆臣入鹿を誅し其罪根を悔て伽藍を創し眞法供養を修するの遺跡也又金堂内陣の三燈は中央佛法繁榮を擬し左は聖朝安泰を禱り右は國土豐饒を期す大師鴻基を開くの日先道場に入て三燈を挑ぐと云々

『經藏』梵鐘の側にあり尊氏將軍一切經を藏む自筆の

奥書あり又慶長七年に唐本一切經毛利輝元寄附す
 『教待仙人入定窟』金堂の東北の側にあり教待は神通
 延壽の仙僧なり其姓氏を知る人なし三井を護する事
 一百餘歳貞觀元年の春初て智證大師に見て當山を附
 屬し傳法弘教の處とし其後伽藍の東北石窟中に入て
 復らす其時百六十二歳といふ本朝神仙傳匡衡江曰三
 井の教待は淡海國滋賀の郡の仙人也數百年を歴ると
 いへども容顏壯年の如し常に魚髓を喰ふ其骨忽變
 じて青白二色の蓮華となる
 『圓滿院御殿』寺門境内にあり聖護院宮。圓滿院宮。
 實相院宮。此三御門跡をもつて三井の長吏とす
 『安樂行堂』北院蓮華谷にあり地藏。彌陀。釋迦。三
 尊を安す智證大師の建立也
 『正法寺』南院にあり初めは聖願寺と號す世俗巡禮
 觀音或は高觀音とも稱す西國巡禮十四番札所也
 本尊如意輪觀音脇士左愛染(寺門傳記)後三條院御願
 寺なり延久四年の春 後三條帝御不豫月を累ねて平
 癒せず時に大僧都禪範詔を奉て一寺を建て金色等身

如意輪觀音像を安置して禱るに忽ち日を歷ずして御
 惱平癒す
 或が云正法寺は初め南院山上にあり文明九年三月朔
 日大衆の瑞夢によつて今の地に移す男女の詣人結縁
 の爲なりとぞ
 『福神石』正法寺奥院にあり石塔婆。角石。俵石の三石
 をいふ山縁詳ならず
 『大悲閣』正法寺本堂良の方にあり方三間半慶長十年
 これを建る近江の八景眼下に見わたし晴天には沖の
 島竹生島など遙に見ゆる又中秋の月を賞するの佳景
 也澁々たる銀漢碧空を貫くの高閣なり
 三井寺登覽
 何來天地動主陰 落日樓臺試一臨
 秋入九江波蕩漾 雲連三越氣蕭森
 湘靈鼓瑟思無盡 遊客行吟恨竟深
 不識關門風雨夜 幾人操曲遇知音
 『近松寺』正法寺の西の方山腹にあり古は近松谷に百
 二十六房あり三井五別所の其一なり

本尊千手觀音金色長壹尺三寸智證大師の作額に高觀
 音堂とあり世人正法寺を巡禮觀音こゝを高觀音とい
 ふ坂路を登りて拜するよりの俗稱なり傍に阿彌陀堂
 あり善光寺如來の模形にして黄金佛といふ又堂内に
 惠心僧都の作の千體佛を安す鎮守は護法善神。辨天。
 稻荷。金比羅を祭る
 『八詠樓』觀音堂に隣る高樓をいふ近江の八勝悉見え
 わたりて中秋の月はなをさら騷人墨客こゝに聚りて
 風流を詠す五別所景勝の一にして又二に双ぶものな
 し絶妙の眺望賞せずんばあるべからず又菩提樹樓前
 にあり世に名高し
 『安然和尚石浮圖』南方山上にあり七層石塔婆にして
 五大院先德安然和尚と鑄す當寺は安然の練行幽閑の
 所にして則入寂の地也當山は關山の東の高嶺也故に
 水乏し一日和尚試に獨鉦をもつて岩頭を穿つ 忽水
 涌出づる事瀧の如し寒暑に渴せず無双の靈泉也名づ
 けて獨鉦水といふ今尚存す
 『尾藏寺』近松寺の北にあり三井五別所の其一也開基



智證大師中興慶祚阿闍梨古は尾藏寺谷に八十坊あり
今僅に五房存す

本尊十一面觀音を安す頭は辨天胴體は毘沙門足は大
黒天なり故に三福觀音とも稱す又笠脫觀音ともいふ
むかし詣人群をなし思はずも笠ぬげしより異名とな
る又西の方壹町斗に慶祚阿闍梨入定の地あり傳云寬
仁三年十二月廿二日入定年六十五寺門灌頂修行の
始祖也

『鶴尾八幡宮』尾藏寺の鎮守也康平六年伊豫守源賴
義朝臣勸請又足利尊氏北國出陣の時靈瑞あり故に造
營し祭禮に流鏑馬あり嚴重なり今廢す

『微妙寺』關山の北尾藏寺の西にあり三井五別所の其
一也開基慶祚阿闍梨むかしは九十六房あり今僅に五
房存す

本尊十一面觀音又樂師佛を安すこれはむかし志賀寺
の靈佛なりとぞ志賀寺は崇福寺をいふ又如意寺の本
尊觀音をこゝに移す又北向不動尊境内に安すこれは
智證大師七度加持の尊容にて園城寺四方に此尊體を

安置する其中の一體なり

『水觀寺』寺門惣門の下路の北にあり三井五別所の其
一なり

本尊樂師佛を安す寺門傳記には十一面觀音と記す開
基大僧正明尊

『常在寺』三井北院惣門の外新羅社の西にあり熊野三
所權現を勸請す寺門五別所の其一なり

本尊釋迦佛を安す開基大僧正行尊當寺西北の山上に
千石岩といふ名巖あり即岩上明神と稱す

『早尾明神社』常在寺西北にあり山王中七社の内早尾
明神の勸請也或説云早尾は貴布禰の神也又此社の下
に石不動尊あり寺門四方鎮座の其一なり此地に瀧あ
り三筋に流て不動川といひ末は湖水に入る

此外寺内寺外神社堂閣多し繁によつてこゝに略す委
は寺門傳記に見えたり

『龜岳』寺門境内にありむかし教待仙人常に魚鼈を食
し其殘骨積て丘の如し近くこれを見ればことごとく
蓮華也遠くみれば龜の形に似たり故に人呼で龜岳と

いふ

後拾

萬代に千世をかされて見ゆる鏡

式部太輔資業

龜のなかなる松のみとりに

『龜鳴橋』龜岳のほとりにあり教待仙人龜鼈の殘骨を
河水に流す忽蘇て聲を連て鳴故に此名あり橋下の流
に魚鼈今に多し

『村雲橋』寺門の前にあり傳云智證大師北嶺より寺門
へ歸りたまふ時此橋上を過るに西の天に火氣あり大
師疾馳して曰今唐の青龍寺に火災の難ありとて橋下
の流水を汲んで西の方へちらし給へば忽雲霧の如く
成て西天に行事風のごとし漸姑くして火氣みな消す

大師これを見て火害穩也とて安堵し給ふ体也弟子等
不思議に思へども問事なし果して翌年青龍寺より書
翰を贈る其辭に曰去る火災の節東方より車軸の如く
霽雨降來つて速に火害消じ伽藍院宇回祿を免るこれ
偏に尊師の厚恩なりと慶謝す弟子等これを見て凡身
ならざる事をしれり故に村雲橋となづく

『夜櫻』中頃鐘樓の前にあり夜陰の鐘聲に和して花盛

安置する其中の一體なり

『水觀寺』寺門惣門の下路の北にあり三井五別所の其
一なり

本尊樂師佛を安す寺門傳記には十一面觀音と記す開
基大僧正明尊

『常在寺』三井北院惣門の外新羅社の西にあり熊野三
所權現を勸請す寺門五別所の其一なり

本尊釋迦佛を安す開基大僧正行尊當寺西北の山上に
千石岩といふ名巖あり即岩上明神と稱す

『早尾明神社』常在寺西北にあり山王中七社の内早尾
明神の勸請也或説云早尾は貴布禰の神也又此社の下
に石不動尊あり寺門四方鎮座の其一なり此地に瀧あ
り三筋に流て不動川といひ末は湖水に入る

此外寺内寺外神社堂閣多し繁によつてこゝに略す委
は寺門傳記に見えたり

『龜岳』寺門境内にありむかし教待仙人常に魚鼈を食
し其殘骨積て丘の如し近くこれを見ればことごとく
蓮華也遠くみれば龜の形に似たり故に人呼で龜岳と

の幽艶を賞す老樹は枯葉して今なし堂前に若木あり

『淨明水』南院筒井にあり方三尺の井也筒井淨明の

舊跡とぞ

『三井門』大門の西にあり金剛力士は佛工運慶の作な
り

三井十景

筒井翁松 金堂白櫻 新羅夕蟬

唐院夜雨 鐘窟古鏡 龜塚曉霜

琴谷冷簾 護法丹楓 龍池寒月

正法眺望

詩歌數多ありこゝに略す

『北院』蓮華谷。然谷。北谷。中院。上谷。中谷。下谷

『南院』花谷。琴緒谷。筒井谷

〔智證大師傳記和讃〕少納言藤原通憲卿艸之雖見
元亨釋書不取當山

歸命頂禮前入唐 智證大師贈法印

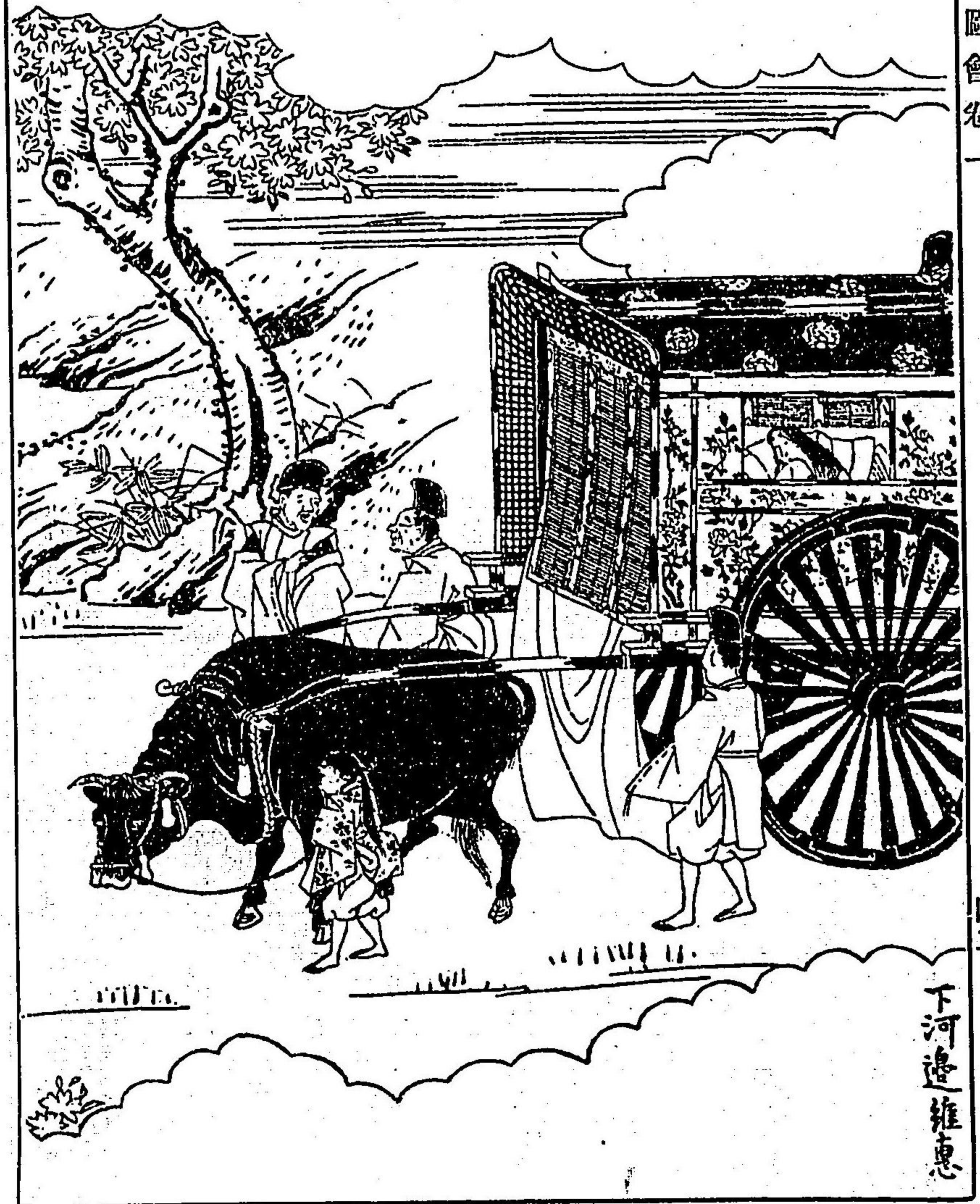
清和光孝陽成乃 三朝乃國師奈利

悉達太子乃蹤乎 追 十九出家志給飛天

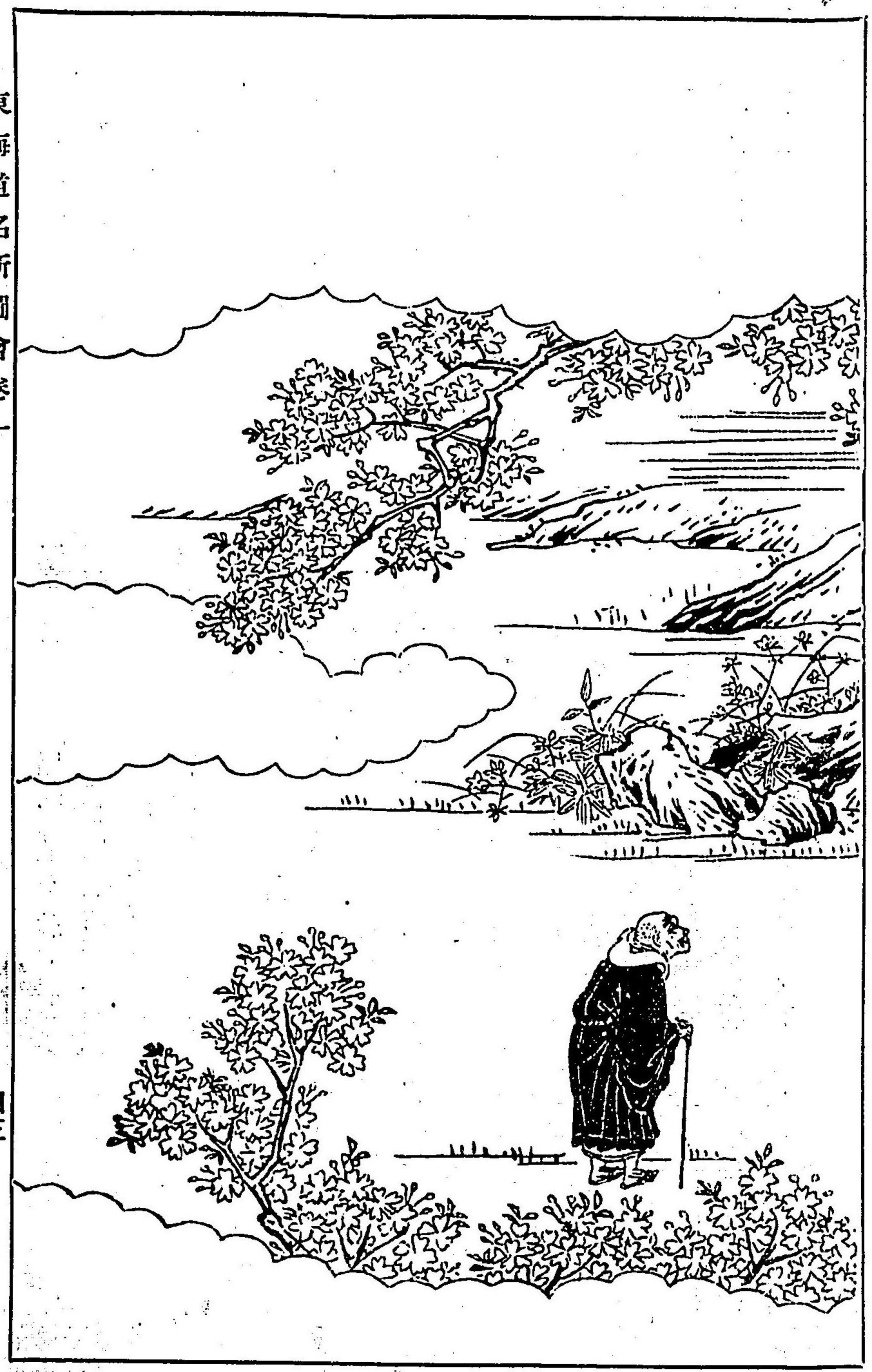
檀特山乃風傳邊 山林苦行十二年

承和五年冬乃月 大聖明王感見志

志賀上人の杖八にのりて湖を渡る御所
成極の御所へ花を
京極の御所へ花を
所極の御所へ花を
園極の御所へ花を
ら極の御所へ花を
妄極の御所へ花を
多極の御所へ花を
を極の御所へ花を
む極の御所へ花を
様極の御所へ花を
一極の御所へ花を
つ極の御所へ花を
ば極の御所へ花を
の極の御所へ花を
戒極の御所へ花を
珍極の御所へ花を
ぬ極の御所へ花を
ふ極の御所へ花を
修極の御所へ花を
き極の御所へ花を
へ極の御所へ花を
し極の御所へ花を
る極の御所へ花を



下河津



嘉祥三年春乃夢	山王渡唐平告給不	園城寺仁波勅仁依里	宗叡僧正灌頂志
文德天皇宣下志天	入唐求法被許幾	仁壽殿仁波詔平承氣	王臣入壇始利幾
唐乃大中七年爾	嶺南道甯着爾氣里	金光明乃齋會仁波	身子迦旃平拉志幾
天台山仁登天波	大師乃聖跡禮拜志	清涼殿乃決疑仁波	護法清辨物登勢須
清涼山仁望天波	文殊乃靈地乎巡禮志	熊野山乎攀志時	道路迷比天不知程登
長安洛陽廻津々	勝地名跡場乎踏美	八尺乃鳥飛來利	道乎示會奇特奈留
西天唐土乃師仁遇天	梵文漢語乎窮多利	權現三所乃寶前仁	一乘八講修世志加波
良謂和尙乃開元寺	一乘心蓮花開氣	松廬扉乎押披幾	神感實仁甚志
法全開梨乃青龍寺	五瓶智水雨灑久	財施乃幣帛乃妙乃色	醍醐乃妙味乃希乃聲
南嶽天台遺身塔	無畏不空影像院	和尙乃恩德不限瓦	門弟必寸憐波平
石象石橋見渡志天	銀地金地毛修行志幾	西山松尾大明神	詞平通志問答邊
顯教密教學東天	在唐凡廿六箇年	東門中心天王寺	最勝講於曾始免置久
自宗他宗昔無幾	經論章疏千餘軸	陽成天皇敬比天	法眼和尙仁令叙世
歸朝乃波仁波新羅國	權化乃善神影嚮須	亭子天子貴比天	權少僧都仁補任須
清和天皇元年仁	大師歸朝志給天	天台第五乃座主登志天	二十四年戒授氣
新渡乃法門千餘軸	勅宣下利天弘未利幾	園城第二乃貫主仁天	三十三年法弘平
爾時大師奏聞志	三井仁唐坊建給不	一切經論三箇遍	大乘小乘鏡美懸氣
百六十年行邊留	生身彌勒乃附屬得津	諸尊傳法二百人	三部三密珠璣久

五百餘人髮平剃利	三千餘人戒授氣	花頂步石 英聲振金 誠良謂滅 山瀛阻深
王臣道俗歸敬志天	德行天下仁充滿利	〔大友皇子傳〕懷風藻出此書天平勝寶三年淡海三船
千里萬里波掌呂	三世十方胸仁在里	所撰也三船者大友皇子曾孫葛野王之孫池邊王之子
門弟怪美問志加波	金剛薩埵乃告登演不	也
良謂乃遷化乎遠久見天	鐘乎鳴志天諷誦志氣	淡海朝大友皇子詩二首
元璋禪師加去志日波	聲乎舉天會悲泣須留	皇太子者淡海帝之長子也魁岸奇偉
圓載入海世志尅波	淚乎流志天悲比幾	風範弘深眼中精耀願盼燎燁唐使劉
時仁此等乎聞志人	驚幾怪美疑比幾	德高見而異曰此皇子風骨不似世間
後乃日宗人告志仁會	一事毛不違信乎取留	人實非此國之分昔夜夢天中洞啓朱
寬平三年冬乃天	生年七十八仁志天	衣老翁捧日而至擎授皇子忽有人從
十月二十九日仁會	大涅槃仁波入給不	腋底出來便奪將去覺而驚異其語膝
其時十方世界乃	菩薩聖衆室仁滿千	原內大臣歎曰恐聖朝萬歲之後有巨
天乃音樂雲響幾	定印結天滅仁入留	猾問覺然臣平生曰豈有如此事乎臣
圓寂乃後第二日	三夜乃枕乎替志加波	聞天道無親惟善是輔願大王勤修德
大師頭乎擡氣志仁	門弟淚乎流氣利	災異不足憂也臣有息女願納後庭以
延長五年冬乃季	靜觀僧正奏聞志	充箕帚之妾遂結姻戚以親愛之年甫
天皇勅宣志給天	大師號於被下氣	弱冠拜大政大臣總百揆以試之皇子
〔智證大師御影銘〕廟塔在四明嶽東		博學多通有文武材幹始親萬機群下
雙瞳遠瞻 奇骨欽崑 覺月現相 夢日繁陰		

良莫不肅然年二十三立爲皇太子廣延學士沙宅紹明答秋春初吉太尙許率母木素貴子等以爲賓客太子天性明悟雅愛博古下筆成章出言爲論時議者歎其洪學未幾文藻日新會壬申年之亂天命不遂時年二十五

五百侍宴一絶
皇明光日月 帝德載天地 三才並泰昌 萬國表臣義

五言述懷一絶
道徳承天訓 鹽梅寄眞宰 養無監撫術 安能臨四海

大友皇子の時漢に載る事は園城此皇子の古蹟によつてなり日本紀に大津の皇子詩賦を作る初めと書す既にもつて大友大津に魁じて風藻あり予按るに大津皇子より本朝詩賦の規則定るによつて初めと記せしものならん歟

志賀都 古跡志賀里西郡村に御所内といふ字して廣

さ貳町四方許上壇の地ありこれをいふ也とぞ又此地の中に竹林ありて清水涌出る事多し田畑の料とす極て清冷寒暑増減なし總じて舊都の跡又は神社佛閣古跡を考へ糺すにはまづ其地の水の美惡を見るべしこれ予が一勘なり

〔日本紀〕景行天皇五十八年春二月辛丑朔辛亥幸近江國居志賀三歲是謂高穴穗宮

六十年冬十一月乙酉朔辛卯天皇崩於高穴穗宮時年一百六歲葬天皇於倭國之山邊道上陵

〔前王廟陵記〕大和國山邊郡上總村東陵一箇所アリ然レドモ一決シ難シ

感傷近江舊都作歌
万葉 古人爾和禮有哉樂浪乃 高市古人 故京乎見者悲寸

志賀里 三井の北に四村あり字を西郡。正興寺。新在家。赤塚等也

玉葉 神よいに都の月に旅れして おもひや出るしかの古里 前大僧正忠源

夫木 橋の花やはしとの花ならん 光明寺開白 香こそむかしのしかのふる里

滋賀花園 志賀里新在家をいふなるべし

千載 さ、浪やしかの花園みる度に 祝部成仲 昔の人の心をそしる

新古 あすよりは志賀の花開稀にたに 攝政大政大臣 誰かは問ん春のふるさと

新千 宮木守なきさの霞たなひきて 定家 昔も道ししかの花園

志賀山越 滋賀赤塚より登り峠を越山中里。白川村を経て京師に出るこれを山中越といふ

志賀山越にて

古今 山河に風のかけたるしからみは 春道列樹 流もあへぬ紅葉なりけり

同 白雪の所もわかすふりしけは 紀秋峯 岩ほにも咲花とこそ見れ

後拾 櫻花道みえぬまで散にけり 橘成元 いか、はすへきしかの山へ

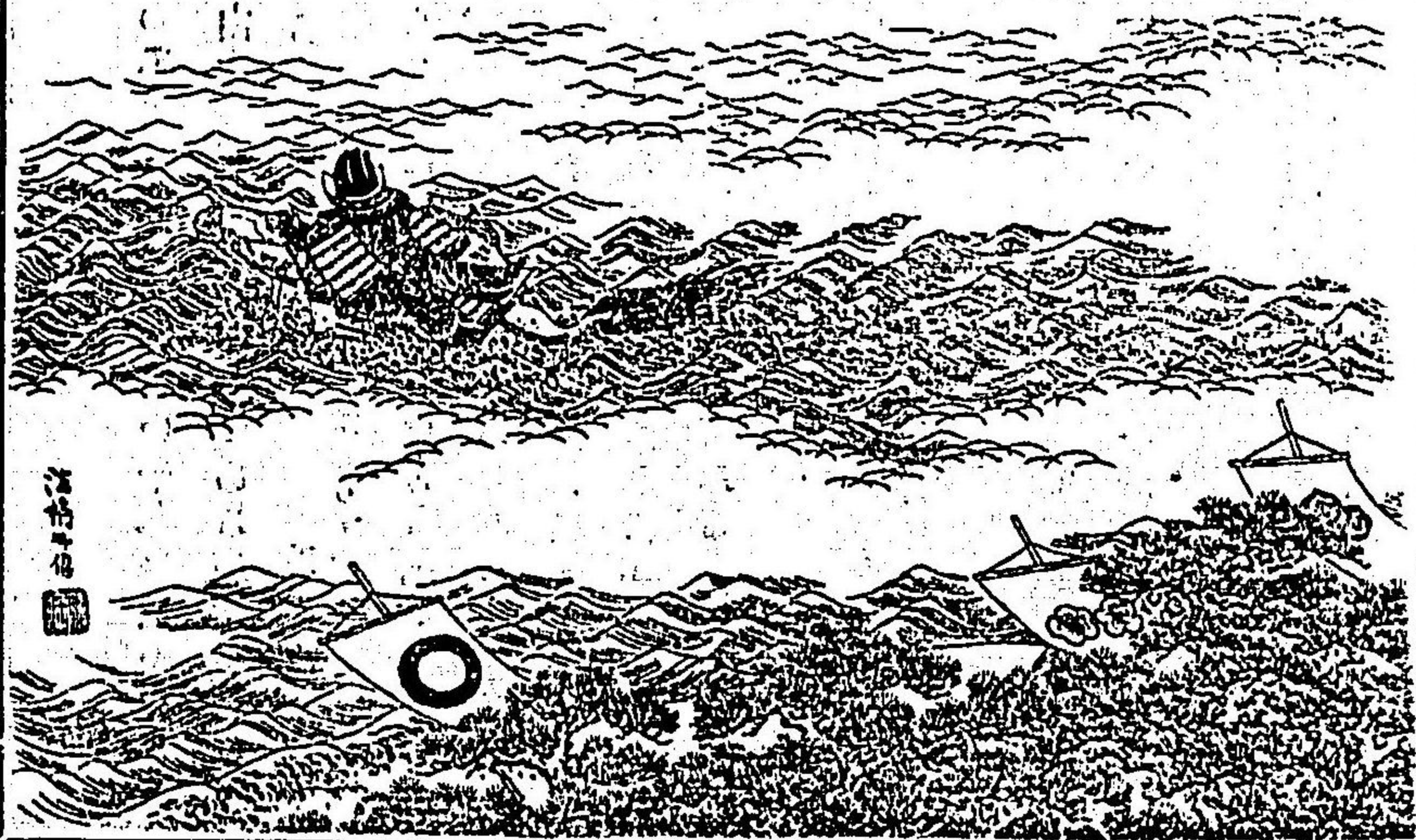
新千 匂ひ来る風の便を枝折にて 法印定爲 花に越行しかの山みち

滋賀浦 大津の浦より幸崎及び下坂本比叡辻の邊までの浦をいふ

拾遺 さ、波やしかの浦風いかはかり 右衛門督公任 右衛門のうちの涼しかるらん

後拾 みるめこそあふみの海はかたからめ 伊勢大輔 吹たにかよへしかのうら風

明智左馬助光俊は山崎合戦敗れて坂本城へ落ちて時大津にて羽柴方堀久太郎秀政に圍れ秀政は名高き駿馬に乗けり此湖水へさんぶと乗こみ狩野水鏡が香し雲龍の陣羽織に三ツ山の兜を著し威風凛々として湖上をわたり唐崎の松の汀に着しは古今の雄將魁の項玉の島江をわたりしおもかけにも比せんと秋味方これを見て賞嘆せずといふ事なし



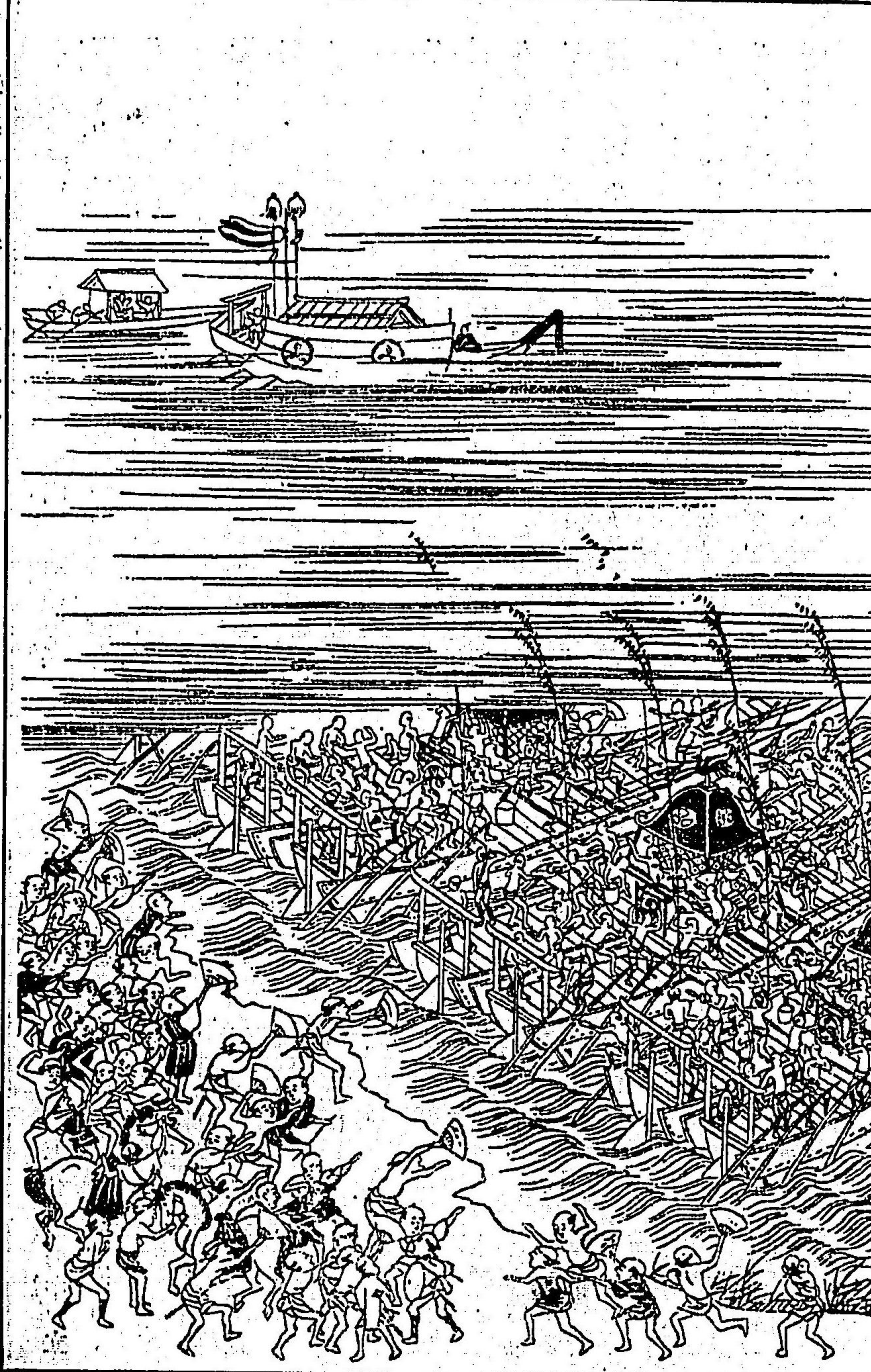
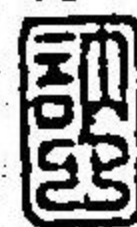
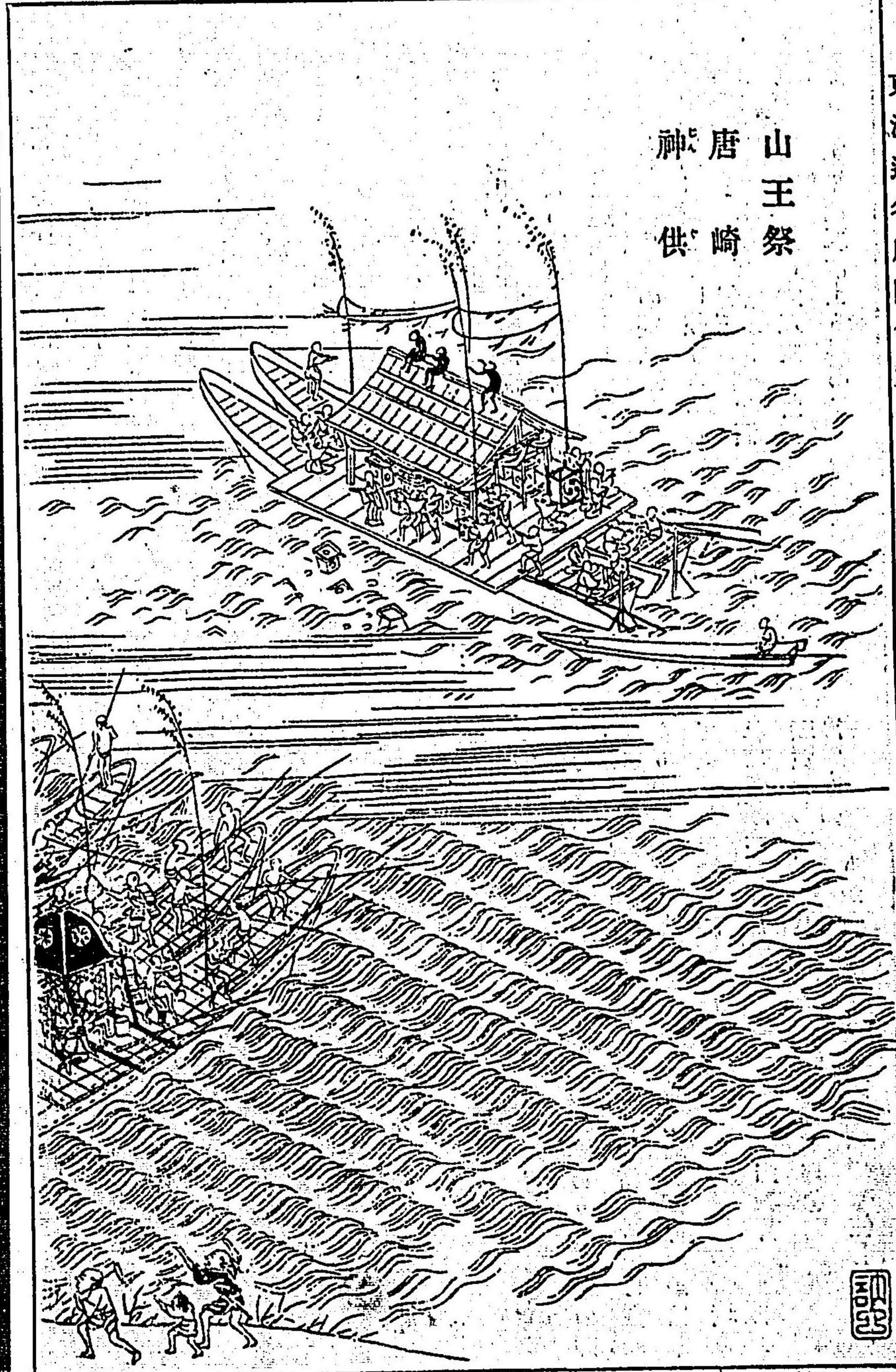
新古 しかの浦や遠きかり行波まより 家 隆
 新後 志賀の浦の松吹風のさひしさに 権中納言公實
 撰 夕波ちとり立あ啼なり
 玉葉 しかの浦や時雨て渡るうき雲に 歌人しらす
 三上の山を牛かくる、
 撰後 あふ坂の山越はて、なかむれば 後京極攝政
 霞につくしかのうら波
 新干 香なる沖の小島の旅れにも 法印定爲
 心にかゝるしかのうら浪
 新拾 志賀の海の白ゆふ花の波の上に 家 隆
 霞を分てうら風そ吹
 新續 志かの浦や湖てる沖は霧こめて 後鳥羽院
 秋もおほるの有明の月
 滋賀大輪田 今さだかならす 寂蓮法師
 撰古 ちち人の汀の水ふみならし 渡れとぬれるしかの大輪田
 志賀津 今さだかならす 洞院攝政右大臣
 撰後 見るめなきしか津のあまのいさり舟 君をはよそにこかれてそふる

序に曰
 おほともの黒ぬしはそのさまいやしはいはひたきい
 をおへる山人の花のかけにやすめるがごとし
 古今 思ひて、戀しき時ははつ鷹の 黒ぬし
 なきてわたると人はしらすや
 しかのからさきにてはらひしける人のしもつ
 かへにみるといふ侍り大伴くろぬしをこまで
 きてかのみるに心をつけていひたはふれけり
 はらへはてゝくるまよりくろぬしに物かいつ
 けり其ものこしにかきつけてみるにをくり
 侍ける
 後撰 なにせんにへたのみを思ひけん くるぬし
 おきつたましをかつく身にして
 無名抄云
 志賀のこほりに大道より少し入て山きはに黒ぬし
 の明神と申かみいますこれはむかしのくろぬしが
 神になれるなり
 傳云黒主は 光孝天皇の時の人にして大友皇子の苗
 裔也後改て大伴の字を用ゆと云々又志賀の莊頭が家

に一軸あり大伴黒主は志賀の地主にて大友與多麿の
 孫都堵麿の子也陰陽頭たりしが唐崎にてはらひして
 祿賜りし事後撰に見え又仁和のはじめ大伴會の和歌
 を奉りあるひは 宇多帝行幸の時も和歌を奉りけり
 しかあれば年の齡も百に餘り給ふなるべし此地其人
 の舊跡にして心静石といふは祠の東田の中にあり土
 人すゝみ石といふ明神此石に影向ありて山水を弄び
 枯藤の及ぶ所まで逍遙し給ふ又桑田といふあり田の
 字となりて神前にあり稻を神供に捧るとぞ予按るに
 大伴黒主は皇子大友の裔にして後に大友を改て大伴
 と書しとは謬也大伴は姓氏録に高皇產靈尊の五世天
 押日命の後なり既に 景行帝の御時大伴武日連あり
 て日本武尊に隨從して東夷征伐に赴く事日本紀に見
 えたりこれ道 臣命の後也即 景行帝志賀に都あり
 し時大伴武日連こゝに住する事必然たり然れば黒主
 は武日連の後にして歴代志賀を領するものならん又
 大友の姓は垂仁紀に大友主見えたり大伴大友の遠祖
 別姓たる事累朝及び出る事明なり後世混すべからず

貫之祠 志賀正興寺村にあり生土神とす勸請の鎮座
 の由縁定ならず歌仙黒主に對して祀るなるべし
 崇福廢寺 志賀里其舊蹟定ならず一名志賀寺又の名
 建福寺(拾芥抄)延喜十七年十大寺の其一にして
 天智天皇の御願三井寺の末云々又(寺門記) 天智帝
 七年春夢に一金人現じて長等山に靈區ありと告る
 天皇敬感あつて大友皇子に勅し給ひ精舎を創し金色
 丈六彌勒佛を安置す園城寺に一ヶ年魁じての建立也
 夫木 仙人の光たつれしあとやこれ 定 家
 み響さへたるしかの曙
 「名所考」此歌のこゝろはむかし 天智天皇志賀の都
 におはしませし時伽藍御建立の御志ありしに帝の御
 夢に一人の沙門奏して云乾のかたに當れる山に靈廟
 ありかしこをもとめ給へと告る是於勸使をつかはし
 て見せしめ給ふにあやしき光さしいろくの奇瑞あ
 れば帝臨幸ありしに仙人出て奏して曰我昔此湖畔を
 歴覽せしに五色の波湖上に浮べり其聲を聞ば五婆羅
 密を唱へたりかの浪のよする方を尋て來住して既に

山王祭
唐崎
神供

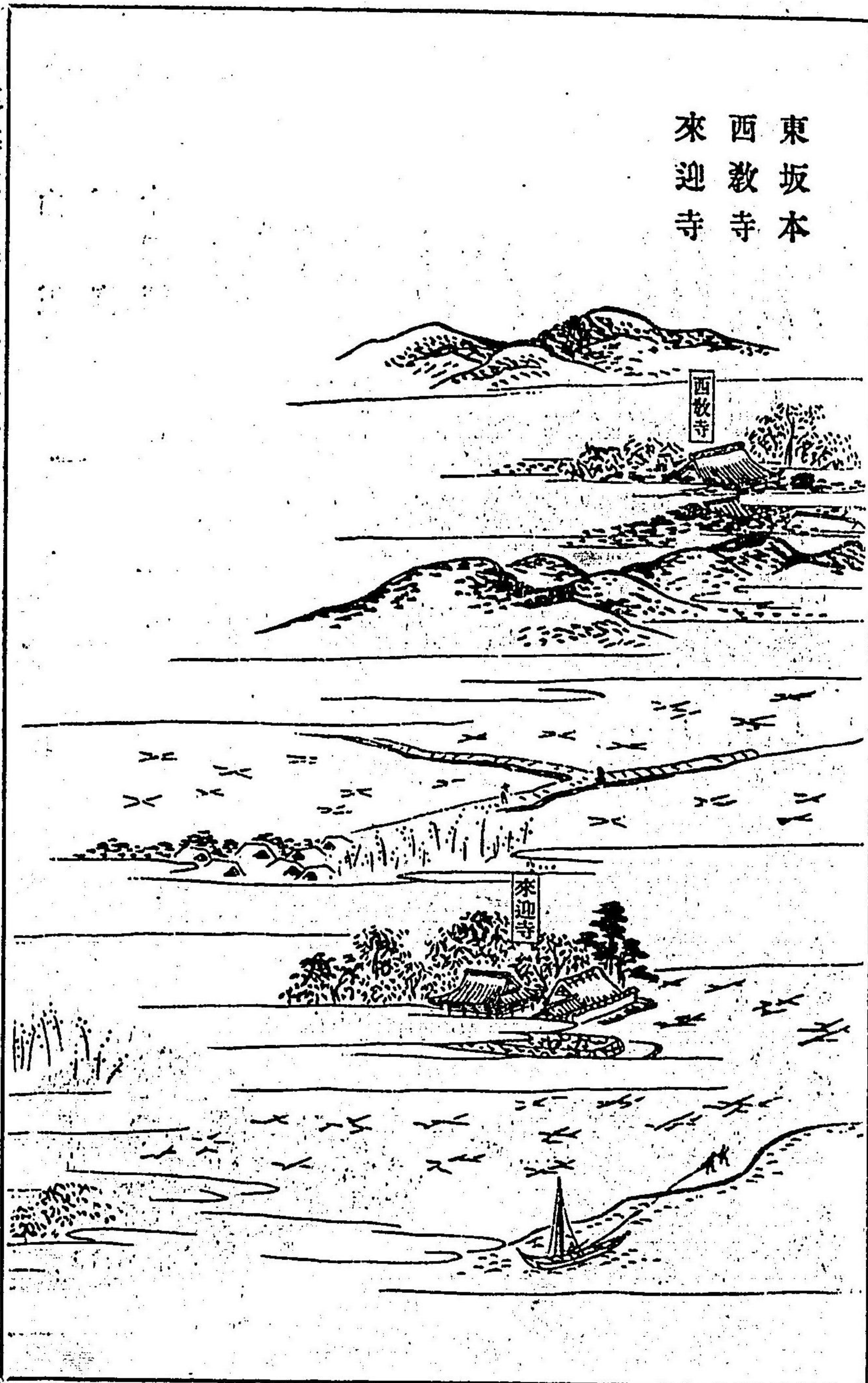


數百歲を歴たりとて又唱て曰古仙靈嘯伏藏地佐々名
實長等山として忽然として見えす仍てかの所に靈場を
建られて則崇福寺と號しけるそれより後湖水のめぐ
りを神波と詠るは此こゝろなるべし

〔續日本紀〕天平八年八月乙酉以近江國朝書法一百
卷施入崇福寺〔類聚國史〕弘仁六年正月崇福梵尺
二寺禪居之淨域伽藍之勝地也〔同史〕同年四月幸
近江國滋賀韓崎便過崇福寺大僧都永忠護命法師
等率衆僧奉迎於門外皇帝降輿升堂禮佛更
過梵釋寺停輿賦詩群臣奉和大僧都永忠自煎茶
奉御施御被即御船泛湖水國司奉風俗歌舞五位
已上並據以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差
〔延喜式〕崇福寺傳法會料一萬東修理料五千束
〔太平記〕むかし志賀寺の上人として行學勤修の聖才お
はしけり速に彼三界の火宅を出て永く九品の淨刹に
生れんと願ひしかば富貴の人を見ても夢中の快樂と
笑ひ容色の妙なるに逢ても迷ひの前の着想を憐む雲
を隣の柴の庵しばしばかりと住ほどに手づから植し

庭の松も秋風高く成にけりある時上人草庵の中を立
出て手に一尋の杖をさへ眉に八字の霜をたれつゝ
湖水波しづかなるに向て水想觀を成て心をすまして
たゞ一人立給ひたる所に京極の御息所志賀の花園の
春のけしきを御覽じて御歸りありけるが御車の物見
をあげられたるに此上人御目を見合せまいらせてお
ぼへす心迷ふてたましむかれにけり遙に御車のあ
とを見送りて立たれ共我思ひはややる方もなかりけ
れば柴の庵に立歸て本尊に向ひ奉りたれ共觀念の床
の上には妄想の化のみ立そひて稱名の聲の中にはた
へかねたる大息のみぞつかれる扱も若なくさむ事
もやと暮山の雲をながむればいと心もうき迷ひ閑
窓の月にうそふけば忘れぬ思ひなをふかし今生の妄
念つゝに離れずは後生の障と成ぬべければ我思ひの
ふかき色を御息所に一端申て心やすく臨終をもせば
やと思ひて上人狐裘に鳩の杖をつきなくく京極の
御息所の御所へ參て鞠のつぼのかゝりの本に一日一
夜ぞ立たりける餘の人はみないかなる修行者こつじ

東坂本
西教寺
來迎寺





日吉山王
大宮
聖真子
客人宮
八王子
三ノ宮



き人やらんとあやしむ事もなかりけるに御息所御簾の内よりはるかに御覽せられて是はいかさま志賀の花見のかへるさに目を見あはせたりしひじりにてやおはすらんわれゆへにまよはは後世のつみ誰が身の上にか留べきよそながら露ばかりの言の葉になさけをかけばなぐさむ心もこそあれと思召て上人これへとめされければわなくとふるひて中門の翠簾の前にひざまづいて申出たる事もなくさめんとぞなき給ひける御息所はいつはりならぬ氣色のほどあはれにも又おそろしくもおぼしめされれば雪のごとくなる御手を翠簾の内より少しさし出させ給ひたるに御手にとりつきて

新古 初はるのほつれのけふの玉は、き
手にとるからにゆらくたまの緒
とよまれければやがてみやす所とりあへず
こくらくの玉のうてなのほらす葉に
われをいさなへゆらくたまのを
と遊ばされて聖の心をぞなくさめ給ひけるかへる道
心堅固の聖人苦修練行の尊者だにもとげがたきは發

心修行の道なりけり』
今志賀赤塚村の建福寺の舊跡として大通寺といふ淨土宗の寺あり又南坂本に崇福寺の舊跡として盛安寺といふ天台宗の寺あり此寺の縁起に瑞應山崇福寺廢して後朝倉義景の家臣杉若盛安といふ者天文年中再興して盛安寺と改む此寺に恵心僧都の作り給ふ立像の阿彌陀如來ありて片袖を脱かけ給ふゆゑ片袖の彌陀と稱す又隣地に崇福寺の觀音あり都て廢寺の舊號をもつて新寺を創する事世に多し正しき古跡にはあらざるべし

梵釋廢寺 「寺門傳記補略」長等山東の麓其古蹟といふ今詳ならず〔續日本紀〕桓武天皇延暦五年春正月依勅於近江國滋賀郡一始造梵釋寺云々〔高僧記〕桓武天皇依御宿願一建立梵釋寺一安梵天帝釋各長五尺一 天皇等身之像也踐祚之初爲登極御祈也〔拾芥抄〕十五大寺其一寺也梵釋寺近江國志賀郡延暦五年正月建立之同十一年近江國水田百町勅施入
明智光秀城墟 志賀赤塚村の上方にあり舍弟明智

左馬助籠る天正十年六月に廢す盛安寺に明智が陣太鼓あり

唐崎

辛崎又韓崎とも書す大津より北二里にあり

物名からさき

古今 波の花沖からさきてちりくめり 伊 勢

千載 月かけは消ぬ氷とみへなから 藤 原 顯 家

新古 樂々波やしかの辛崎風吹て 法性寺入道前關白

新勅 からさきの濱の眞砂のつくるまで 元 輔

續後 からさきやにほてる沖に健晴て 後京極攝政

唐崎神廟 辛崎の松の下にあり日吉山王の御旅所也

唐崎神廟

日吉の社僧伊勢園守る「祭神海少童命」毎歲六月晦日夏越祓に遠近群參する事夥し世俗千日參といふ

御神 まい遊ふ聲すみやかにわたすみな

拾遺 御秘するけふからさきにおるす綱は 平 祐 舉

同 おく山にたてらましかは清く 惠 慶 法 師

「山王例祭」は四月中の申日申刻に至れば七社の神輿大宮より下り八柳(土俗七本柳といふは非也)より船にて一散に漕つれ辛崎の松の邊湖上に双ぶ膳所より來る神供船は音楽を奏し七人の童は猿の形を真似び社僧は誦經して神供(粟の飯を盛る)を湖上に散す大宮一社の神供は神輿へ奠へ社人白幣葉茶一袋を添て船より船へ贈り日吉の社人へ渡す於茲神式相調ふ神供船より相圖の太鼓を撃ば七社の神輿又一散に漕つれ若宮の濱へ還御なし奉る此神祭を觀んとて京師浪花及び遠近の貴賤こゝに聚り湖上には船を泛て家の紋の幕に宴をめぐらし陸には濱松風に颯々謳ふ聲今様の聲樂々浪の音櫓拍子の音あるは官司船諸侯廝の船湖上に見えて船印刷翻として淡海第一の賑ひなり千早振神のめぐみは色かへぬ松にたぐひ舊都の餘波今もありてむかしながらの風色なるべし

新後 から崎や清き浦わにこきかへる 祝 部 成 茂
風雅 久かたの天津日吉の神まつり 入道二品親王尊圓
月のかつらも光そへけり

唐崎一ツ松

辛崎の濱邊社頭にあり 諺云むかし吾孫君植置しとぞなを旨趣あり別記に書す此枝葉繁茂に及び長ずる時は湖水へ磯邊を築出す也此事古來より早三ヶ度に逮ぶ其岸石の趾松蔭に見えたり又一ツ松と稱する事は遠近より見えて他樹に秀で一株高くあらはなるゆゑとも又は松の葉の間々一葉なるものありて異なるゆゑ一ツ松とも呼ぶといふ

風雅 からさきやかすかに見ゆる眞砂地に 從二位爲千
新干 跡たれし神のひゆきのいにしへを 三品親王慈道
思へは道さからさきの松

それ辛崎の靈松は株の圍五尋高三丈餘數千の枝葉四方へ繁りてあるは社頭へ靡きあるは湖上へ秀遠く眺ば翠巒の如く近く視れば蟠龍に似たり四時蒼々として君子の操を顯し霜雪を凌で千歳を庸とす湖照る朝日かげは松の葉ごしにかいやくき浦ふく風の夕しぐれに秋しらぬ色をまし春は霞こめて麗々たるに沖の船ちいさく夏の月の涼しきに悠々たるさ波の音琴の音初あらしあられふる夜雪つもる曙みな此松の勝景

なるべしされば千歳を歴れば其精青牛と成その質を嚼へば長生を得る脂は地中に沈で茯苓と成又龍骨となる青州の貢丁固が夢始皇は五太夫に封じ玄非の歸路をしらしむ本朝にも住吉高砂會根武隈の名松ありといへども此古松第一にして又第二にならぶものなしかる靈樹の蔭にやどり千とせのみどりを得るも亦なきめでたきためしにやあらん

懷風藻 大納言直大二中臣朝臣
龍上孤松翠 凌雲心本明 餘根堅厚地
貞質指高天 羽枝異高艸 茂葉同柱榮
孫楚高貞節 隱居脫笠輕

内裏清涼殿色紙形 しかの浦や松をあらしの吹しほり 鳥丸新大納言光祖卿
さゝ浜とをく氷の水うみ

日吉山王神社

又日枝又神叡又比叡とも書す都て吉の字をえとよむ事は古人の例にて攝州の住吉もすみのえなるべし古事記日本紀萬葉及び舊書に例多しえとよみてもよき事にもなれり吉事をばえい事よい事といふに通ふなるべし日吉住吉とよむ事延喜已後

の事也延喜式神名帳云日吉の神社 又文德實錄三代實錄國史等に出たり鎮座滋賀郡坂本に在り

風雅 世々をへてあふく日吉の神かきに 爲 相
心のわさをかけぬ日吉なき

新拾 あひにあひて守る日吉の數々に 祝部 行規
七の道の國さかふらし

續後 行めくり照す日吉の影なれば 民部卿爲藤
眼もあらししきしまの道

『大宮』大比叡大明神都て山王權現と稱す『祭神大國主大神』又大黒天君と名づく日枝山嶺に神代より鎮座 天智天皇御宇大津宮遷都の後白鳳年中坂本に遷す大乘院産主慶命より七社俱に本地佛を立る大宮權

現は釋迦佛或は觀世音
『竹臺』左右にあり影向竹と稱す住吉八幡をこゝに勸請し君子の徳を表し大日枝大神の補佐とすなを神祕あり神前に樓門左右に朱玉垣あり

日吉によみて奉ける歌の中に大宮を
續後 いにしへの鶴の林に散花の 後京極攝政
匂ひをよするしかのうら風

『波止土濃』神前の溪川の流をいふ此流水五水落合て

五つの色の浪たつ天地開闢の初より一切衆生悉有佛性如來常住無有變易の波の響き止りて土濃なり權現其響を聞召て大乘流布の靈地なりと詔宣あり故に此地を波止土濃といふ又橋を通天橋となづく惠日山と同名也いにしへは此橋上廻廊の形にして廊あり都て朱塗にして金銅の銚也廊の内に九燈を照して九品の淨土を表すとぞ土俗は極樂橋といふ此橋をわたりて比叡山に登るは大宮より山路なり

日吉社乘跡のころをよみ侍ける
新勅 志賀の浦に五の色の波たて、 大僧正慈圓
天くたりけるいにしへの跡

『桓武帝石浮圖』波止土濃の東爪にあり石の多寶塔也
白河院の御願
『濯眼水』岩頭に清水あり眼疾を洗ば平癒す
『春日社』大宮の前の森をいふ中に靈石あり
『龍殿祠』大宮の傍にあり澳津姫を祭る
『猿戸』こゝに猿を飼ふ山王の使令なり
『咩字門』大宮坂路の口にあり朱の木柱上に咩の字の

日吉二の宮の拜殿に掲る

六々の句は

都鄙俳士の名句を撰み

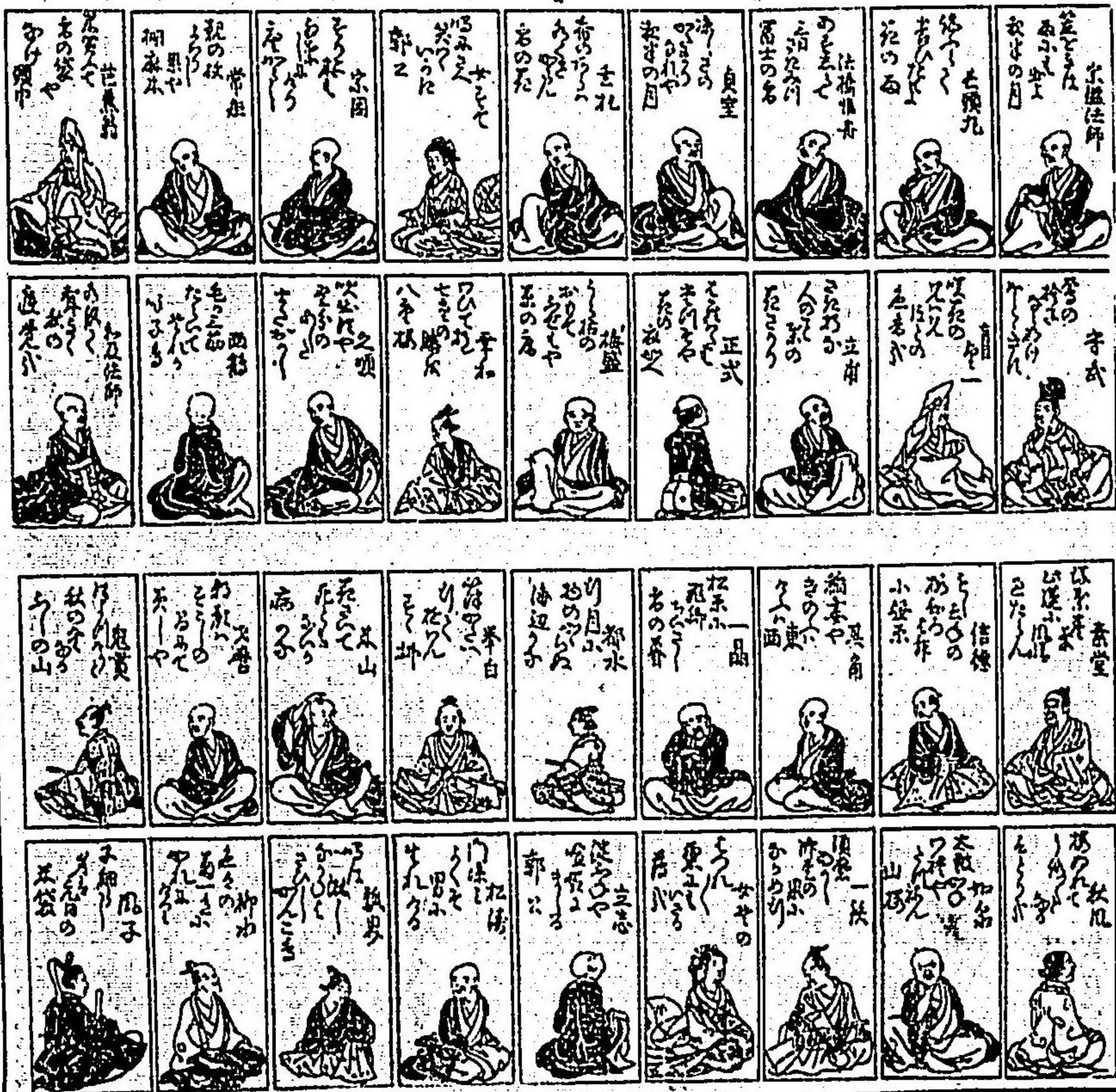
三十六歌仙を真似て

世に名高し

社頭官家より修理ある時も

亦此色紙も

補修ありとぞ聞ゆ



形あり神道胎金合體を表す依之惣合の鳥居と號す

『二の宮』神路山にあり小比叡大明神と稱す『祭神國常立尊』神代より小比叡の峰に鎮座す大宮と同時にこゝにうつす摩多羅神又金毘羅神にして十二神の中

の一神といふ本地は樂師如來也『攝社』寢殿新行事。大行事。稻荷

『龜井』二の宮の傍にあり傳教大師存在の時靈龜此井より現れしより名とす水極て清冽味甘輕茶を煪に可なり

『聖眞子宮』大宮の東にあり 天武帝元年坂本に鎮座『祭神天忍穗耳尊』本地阿彌陀如來

『本地堂』本尊阿彌陀佛慈惠大師の作洛東眞如堂の本尊と同作同佛なり『橋樹』二株神前にあり此神の紋を表す

『攝社』聖女祠此神は音樂を司り給ふにより其家の雲卿尊信厚し寢殿。氣比の祠共に傍にあり

『客人宮』聖眞子の次にあり白山明神と稱す『祭神伊弉諾尊』本地十一面觀世音なり北陸の高峰より此

山に來現し給ふゆゑ客人の宮といふ『影向石』延暦元年六月十八日雪降事三尺餘此時白山權現こゝに影向し給ふ故に雪尺石ともいふ『攝社』劔宮。杵春祠。祇園祠。北野祠

『十禪師宮』二の宮同所にあり延暦二年鎮座『祭神天瓊々杵尊』本地地藏菩薩『攝社』小禪師祠。内王子祠

『夢妙懂石』二の宮樓門の前にあり歡喜天を祭る『攝社』岩瀧祠。惡王子祠。山末祠。下八王子祠。俱に二の宮の馬場にあり『船石』二の宮の前林の中にあり下の

八王子影向石也『明星水』下八王子の東林中にあり

『八王子宮』八王子山にあり 崇神天皇即位元年坂本に鎮座『祭神國狹狹穗尊』垂跡。灌頂。大法王子也本地千手觀音『攝社』牛の御子祠。百太夫祠

『三の宮』八王子山にあり延暦二年坂本に鎮座『祭神惶根尊』本地普賢或記に云三貴女良嶽に降臨し給ふ故に三の宮といふ『攝社』美御前『金岩』八王子山にあり此神こゝに影向し給ふ

『中の七社』牛御子。大行事。早尾。氣比。下八王子。王

子宮。聖女

『下の七社』小禪師。惡王子。新行事。岩瀧。山末。劔宮。竈殿

已上山王二十一社なり本地は大乗院座主慶命神託によつて立る凡夫迷情の臆説にあらず日吉山王一實神道三諦即一の義山家によつてこれを曉すべし

『大権現御宮』眞葛原の上にある『讃佛堂』御宮の中段にあり本尊藥師如來『金鼓』寛永三年丙寅十二月と銘す銘文略す

『桓武天皇御廟』眞葛原の東にあり『慈眼大師廟』帝陵下壇の地にあり南光坊は台嶺戒壇堂の傍にあり

聖眞子宮にてよみて奉りける
續古 ヤはらくる光はへたてあらしかし 権少僧都 眞仙
西の雲井の秋のよの月

客人の宮に奉りける
同 爰に又光を分てやとすかな 後京極 攝政
越の白ねや雲のふる甲
客人の社にて花のちりけるをみてよめる

續拾 いにしへの越路おほへて山櫻 誠人しらサ

新千 分てなをたのむ心もふかき哉 前大僧正 道玄
客人の権現を 跡たれ初と雲のしら山

續後 鷲の山有明の月はめぐりきて 慈 四
我立袖のふしとにそすむ

夫當社山王七の御やしろの御神巍然として鎮座まします中にも大宮二の宮は日枝の嶺に神代より天降り六合の本柱とし天子本命の道場朝敵降伏の神威平天下の御護なり前にはさや波や丹穂てる湖に止觀をたへ後の峨々たる峰には一念三千の機を顯し陽に向ひ陰にそむけ社頭森々として山のすがたうるはしく溪の流いさぎよく神祠々々のたぐすまひ他に異にして廿一社玲瓏たり實に神秀の氣のあつまる所淡海一州の靈窟也一夏には回峰の山僧槍笠を巻あげてやしろをめぐり大廻の阿闍梨は洛中の神社までも巡拜してゆきの人々に結縁し日毎に多くの道路を苦

行し給ふ事尊くありがたくぞおぼえける抑神代には人のこゝろみな清淨にして正直を常とす此ゆゑに

もろくの罪咎なし地神の末にいたりて萬民黒きころに染て根の國にさまよふ囚茲神と現じ佛と顯れ三千界裡みな和光の塵を同じうし兩部習合し給ふも亦尊しむかしより本地を佛とし垂跡を神とする浮屠氏のならひ願くば本地を神にして垂跡を佛とせば我神國の本柱の動ざる驗なるべし

日吉神詠告傳教大師 (羅山子神社考出)
波母耶麻夜於比答乃寸幾乃比登里伊波
阿良之毛左志登布比登茂奈志

新古 しるらめやけふの子日の姫小松
おひん末までさかゆへしとは
此歌は日吉社司社頭ゆしころの山にまかりて子日として侍りける夜人の夢にみへけるとなん

拾遺 れきかくる日吉の社の水綿たすき 僧 正 實 因
夢のうきはしことやめてさけ
新後 あひにあひて日吉の空そさやかなる 祝 部 成 茂
撰 七の星の照す光に

玉葉 うつしなく法のみ山を守るとて 法 橋 春 誓
ふもとにやとる神とこそきけ

新古 我たのむ七の社のゆふたすき 前大僧正 慈 四
かけても六の道にかへすな
同 もろ人のねかひをみつゝの濱風に 同
心涼しきしての音かな
三津は月津志津今津也皆坂本にあり

『眞葛原』權現山の下横馬場をいふ慈鎮和尚の別院ここにありし舊跡也洛東の眞葛原は慈鎮吉水に在によりこの號を後世襲なるべし
拾玉 我戀は松をくれのそめかれて 慈 四
まくすか原に風さはくなり

『四ツ屋若宮』下坂本四ツ屋町にあり大將軍を祀る
『南若宮』上と同所にあり客人宮の一體なり
『登町若宮』下坂本兩側にあり客人宮の一體也

『同社』同所にあり八王子の一體にして河伯神也
『興成宮』下坂本多江間町にあり神體道祖神
『磯成宮』同宮崎町にあり天照太神を祭る
『比叡社』下坂本の北の端にあり
『若宮』比叡社にあり祭神二の宮一體
『石占井』上坂本岩神町にあり明神足を洗給ふ井也

山王祭は卯月中の申日
にて坂本法師公人など
古實を糺し馬場通の行
列莊觀也ことごとく圖
する事能
はずこゝ
には僅十
が一をあ
らはす
のみ



『同祠』石占井の傍にあり又社の後に靈石あり
 『大鳥居』朱木柱馬場先にあり太神門といふ
 『生源寺』馬場の北側にあり本尊千手觀音傳教大師出
 誕の地なり産湯池寺内にあり産湯の釜の跡は瓢箪の
 圖子にあり
 『妙見祠』生源寺に後にあり傳教大師の母公を祀る
 なり妙徳夫人といふ
 『大將軍祠』生源寺の上にあり祭神大山祇命傳教大師
 の生土神也
 『三津百枝祠』八條の上により大師の父君を祀る
 『小五月會岡』馬場北側にあり弘仁十年五月五日こ
 こに神輿をわたして神事を行ふ又競馬等あり近年中
 絶に違ふ
 『和産和汗塚』馬場先南側にあり
 傳云此塚は大師出誕の時臍の緒を收し所也
 『歡喜石』馬場先にあり又荒神岩ともいふ
 『大政所宿院』馬場より壹町斗北にあり五間毎歲四
 月中未日の神事に神輿入御京師室町山王社よりこゝ

にて神供を供ふこれを未の御供といふ獅子舞田樂法
 師來つて舞ふ夜初夜時相圖ありて前後を争ひ内の馬
 場より神輿四社を大宮の拜殿へ遷幸し七社を合せ祭
 るこれを宵宮落しといふ
 『王子宮』大政所の前にあり熊野若一王子を祀る
 『靈石』王子宮にあり若一王子獅子に乗てこゝに臨幸
 し給ふ獅子の足形石あり又三合石ともなづく
 『鼠祠』王子宮の西にあり祭神大黒天
 『彼岸所』大政所の北にあり慈覺大師の御房也
 『地藏堂』早尾社の下にあり傳教大師自作の石地藏を
 安す
 『早尾祠』早尾坂にあり尾を尾とよむ祭神猿田彦命
 『走井大師堂』早尾坂北側にあり元三大師を安す
 『走井宮』走井にあり祭神瀬織津媛命。本地辨天
 『猿塚』時字門鳥居の前にあり使令の猿屠時こゝに埋
 む窟あり唐崎へ通すといふ
 『塔下惣社』波止土濃にあり日本大小神祇を祭る平の
 將門調伏の時こゝにて祈る

『八柳』下坂本の濱にあり柳町といふ卯月の例祭に神
 輿出船所大津八柳にて權現初て出船の体を今こゝ
 に准祭るなり

御舟祭をよめる
 草庵 舟よせしませの御幸にからさきの 頓河法師
 集 むかしを神や思ひ出らん

『滋賀院』馬場の南にあり坂本御殿と稱す
 『神宮』滋賀院の御門前にあり
 『神路山』大宮より二の宮迄の杜をいふ
 『蛭子宮』神路山にあり土人豊笑姿といふ
 夫當宮の神靈浩々として庶人の計しる事能はず本宮
 の七社中の七社下の七社合て山王廿一社とし小社八
 十七社本末都て一百八社也〔公事根源〕日吉祭は中の
 申日神體は洛西松尾の社と同體にして大山昨神なり
 後朱雀帝長久四年六月八日にはじめて廿二社の内に
 くはゐる 後三條院御宇延久四年四月廿三日に祭を
 はじめらる云々〔日吉社傳〕を考ふるに白鳳二年 天武
 即位二年也社傳には 上巳日に大津宮八柳浦に山王神
 天智帝の御宇と記せり 幸ありし所に湖上に二艘の漁舟あり一人は田中恒世

一人は天晴光といふ其時山王權現示して曰汝等われ
 を幸崎松の下に誘ふべし二人の者これを承り則漁舟
 を漕つれて神幸し奉る又山王仰に曰我に齋忌の神供
 すべし恒世對て云漁舟に好物なし黄楊の小筒の中に
 粟飯あり汚穢あらず神供に献すべしとて覆盆子の葉
 に盛てこれを供ふ山王喜悅斜ならず恒世即漁舟に
 棹さして韓崎孤松の下に到る權現又示して曰乗船の
 神遊び粟飯の神供懸に思ふ汝等子孫永く毎歲四月中
 の申日此松蔭に神幸なさせ粟飯を神供すべしと云
 終て神路山波止土濃のかたへ還幸し給ふ是より神祭
 に恒例として故實を正し先づ申の前未の日には八王
 子三の宮二社の神輿を八王子山の拜殿より落すを神
 輿昇數十人市にて請取坂路を趨下る勢ひ猛にして死
 生を辨すこれを神輿落しといふそれより大政所に二
 の宮十禪師八王子三の宮の四つの神輿を遷し酉の刻
 に京師よりの神供を献る晚に入て獅子舞田樂あり初
 更の頃には相圖ありて四社の神輿の轡を一度に落し
 ければ一散に前後を争ふて走るこれを又宵宮落しと

いふ 鼠祠の前にて前後の勝負を極め大宮拜殿に入奉る申の當日には山門の大衆は横棧敷に罹り坂本の衆徒公人は甲冑を粧ひて社頭へ行列す其時大に猛威を震ひ神式拜人の非禮を糺す案るにこれむかし官幣の勅使來輿の遺風としらる棧敷の前にて獅子舞田樂あり榊わたし神主代の兒恒世童子鬼命餓子は束帯にて大津馬場村より出る七社の神輿は申の刻に神幸あり惣合下りに趨る事矢の如し漸石の鳥居にて前後の勝負を極む神輿はなをも飛が如くに走りて八柳の濱に到る諸人これを見んとて横町を抜て田圃の畔を走り又腰刀をかたげ飯笥を擔ふて走るもあり木の葉の風に誘はるゝが如し七社の神輿は八つ柳より乗船ありて幸崎御旅所に到りこゝにて恒例の神供を献る祭式畢れば又漕戻し比叡辻の若宮の濱へ着岸し給ふて本社へ還幸なし奉るこれを拜んとて遠近の貴賤馬場に群集す茶店は多く蕪を双て休所を設け商人は小店を出して種々を賣ふ酒賣餅賣飾賣引豆落し水甕入辻的祭禮行列の次第は群衆の中を賣ありく旅舎の泊人



は座敷の狭きを恨み笠を脱ざる者は磐固の棒を蒙る傳云山王祭は故實こゝかしこに多くして抑二月中の申日より始り近郷近在近江七浦みな此祭祀に預る該に七年観ざればことごとく見つくしがたし年歳累り久遠に及ぶといひながら加程の故實今の世まで残れる祭祀稀なれば邊土遠境の人も生涯一度は観ずんばあるべからずみなこれ治平安民の行事なり
千載 我たのむ日吉の影は奥山の
比叡山
四明嶽
柴の月まてしきこらめやは
七二

拾玉

しるともに賀茂と日吉とあふひ草

慈

四

比叡山

城江二州に跨る日枝又神叡又天台山又台嶺

又良嶽又北嶺又都富士とも稱す又和歌には我立袖と

詠す

〔神社考〕伊非諾伊非冊立_ニ于天浮橋上_ニ以_テ天瓊矛_ヲ探_シ滄海_ニ其矛鋒滴潮凝爲_ニ一島_ト名曰_ク磯取盧島_ニ是日枝山也

〔諸社根元記〕平安の帝都は天上の名跡をあらはせる國なり良にあたりて日得といふ山あり日の神の御光をねがへどもその光を得ざる所を諸神これを祈りて日を得べきといふ心にて日得の山と名づく

懷風藻

和藤江守詠神叡山先考之遊神處柳樹之作

近江惟帝里 神叡靈神山 山靜俗塵寂
谷間眞理等 於稔我先考 獨悟園芳絲
寶殿臨空構 梵鐘入風傳 烟雲萬古色
松柏九冬野 日月推將去 慈範爾依依 寂冥稽理處



俄爲積艸壙 古樹三秋落 寒草九月衰

唯餘兩楊樹 孝鳥朝夕悲

此二首の詩は天平勝寶三年十一月淡海三船の撰まれし懷風藻に出たり傳教大師より已前に宮舎ある事其證なり延曆寺根本中堂は延曆年中傳教大師の建立其外三塔及び横川飯室無動寺等は世々の高僧造立也都名所圖會に見えたらばこゝに略す

拾玉 我山は花の都のうしとらに 慈 鎮

四明嶽 比叡山の絶頂也山王社より登れば十町許に花摘社ありこゝは傳教大師の御母堂妙徳夫人を祭る

卯月八日花摘の日は女人を許して此社まで詣する也これより中堂まで二十町四明峰は中堂より八町許に石標ありこれより東南の方へ登る事八町峰に大巖三つ石佛十體斗これ日枝の頂上也樹木一株もなし根僅のみ敷たるが如し常に雲霧來往して風烈し頂上より東の方へ三四町行ば凹なる所あり是山城近江の國堺也こゝより五町斗ゆけば智證大師の廟塔あり四方

石の玉垣ありて嚴重也是より道廣くして三町ばかりゆけば無動寺と中堂の中間往還道へ出るなり夫四明峰は山州第一の高嶺にして山水清暉を含千里に目を極むまづ西南には帝城の巍然たる粧ひ鴨川大井の二流愛宕高雄の連峰雲端には淀川の流れ長し遠く眺わたせば難波津の金城其西には滄海洋々として帆かけ船は昆虫の蝨に似たり東南の眼下には唐崎の孤松大津浦粟津の城勢多の長橋北の方は琵琶湖の樂々波悠々として山水の美こゝにといまる逸に三上の翠巒比良膽吹の雙峰黛色深く湖上には沖の島竹生島も浪の上にもいさく今津海津の商船山田矢橋のわたし舟は水雲の中に鮮也會稽山の記に四明の高嶺雲に軼すと書しも同日の論此峰も四方明なれば四明の名あり秋の日雲消し天外蒼々たる時は駿河の富士山此峰より見ゆる也百富士といふ書に京師の愛宕山より富士峰見ゆるの圖あり日枝の山をおよびこしにておさく鮮ならず此良嶽は眼下に大抵二十里の湖水の低を湛て其より東方に美尾三遠四州の間に高山な

し遠の秋葉は長嶺にして高峰にあらず蒼天にこゝより見ゆるといふ事疑あるべからず傳開元弘建武の亂には此山に皇居ありて講堂の洪鐘を撞事度々也元龜には信長の暴逆時世は變れども煙霞は變らず人物は改れども風流改まらず抑峻の富士は三國の名山なれども頂嶺に登る時は朦朧として雲を歩み雲に入るが如し漸東北の方海陸のわいためありて只旭の出るを拜するより外なし我立柚は帝都の繁花琵琶湖の八景みな目中の客となりて城江二州の絶勝たるべし良嶽といふは良は根にして堅し又卦の名也丑寅の方則一陽來復の後丑は繁寅は演て東方孟陬の辰なり故に王城の鬼門を護り惡魔を祓ふとは此謂也世俗鬼門柱といふは此良嶽をいふなるべし

戒光山西教寺 坂本大窪にあり天台律宗の本寺念

佛三昧道場

『本尊阿彌陀佛』丈六毘首羯摩作開基元三慈惠大師中興眞盛上人諡號圓戒國師といふ

紫雲山來迎寺 下坂本比叡辻村にあり天台律宗の

本寺念佛三昧道場 『本尊彌陀釋迦藥師三尊』開基惠心僧都作開山堂に惠

心僧都の像を安す 苗鹿明神 苗鹿村にあり延喜式云那波加神社例祭

四月中西日此地の生土神とす 『祭神天太玉命』此神老翁と化して鹿に稻を負せ出

現し給ふ 天智天皇七年に造立苗鹿の神主に詔宣の 事嘗家傳記にあり

堅田浦 志賀郡にあり大津より三里領主堀田侯守る 湖水の船着也

續後 心引かひこそなけれあふ事は 祝部 成 賢

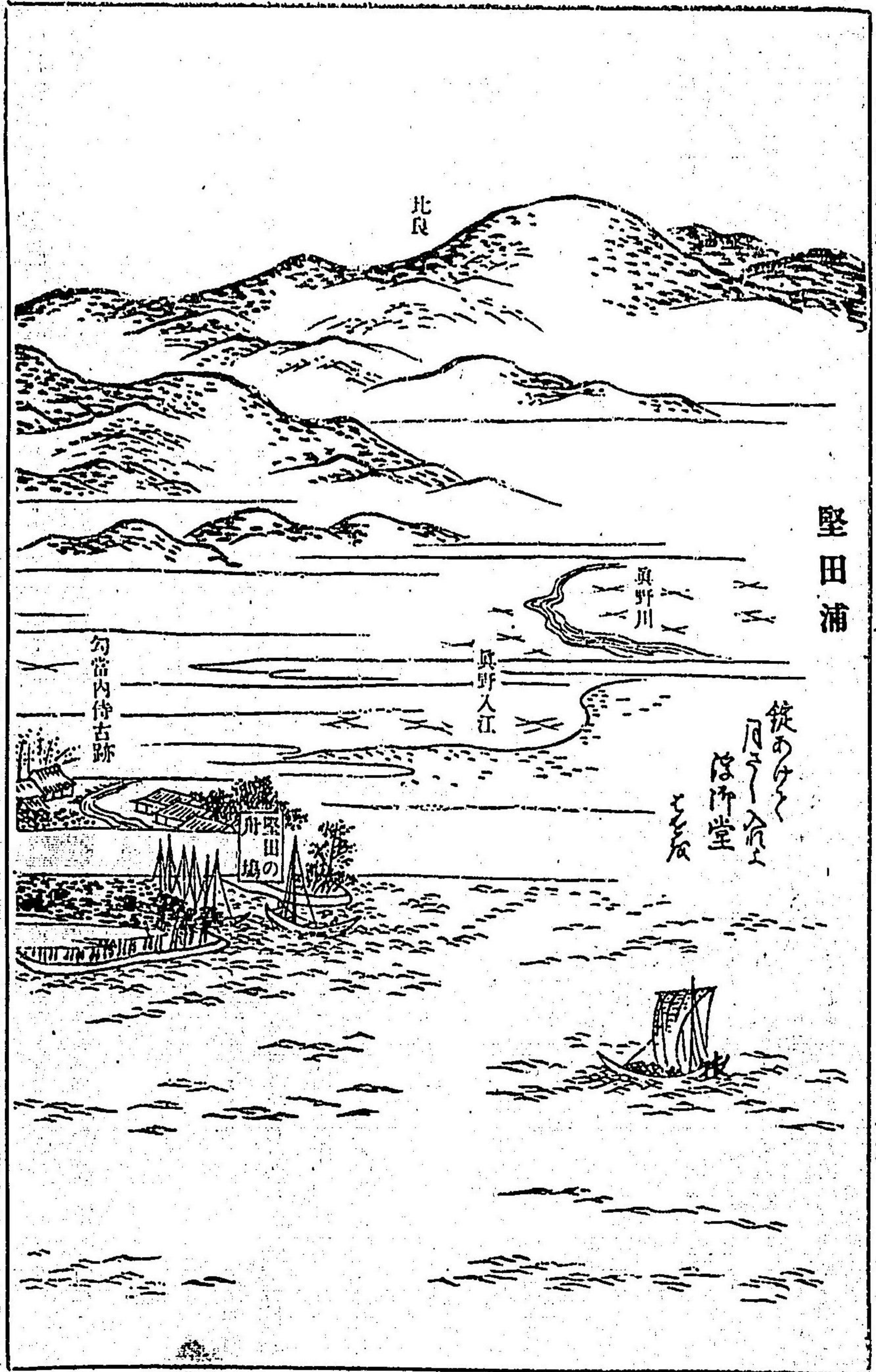
新干 春のくるかたの浦の朝なきに 前大政 大臣

新拾 あふことはかたの浦の沖津波 道 曉 法師

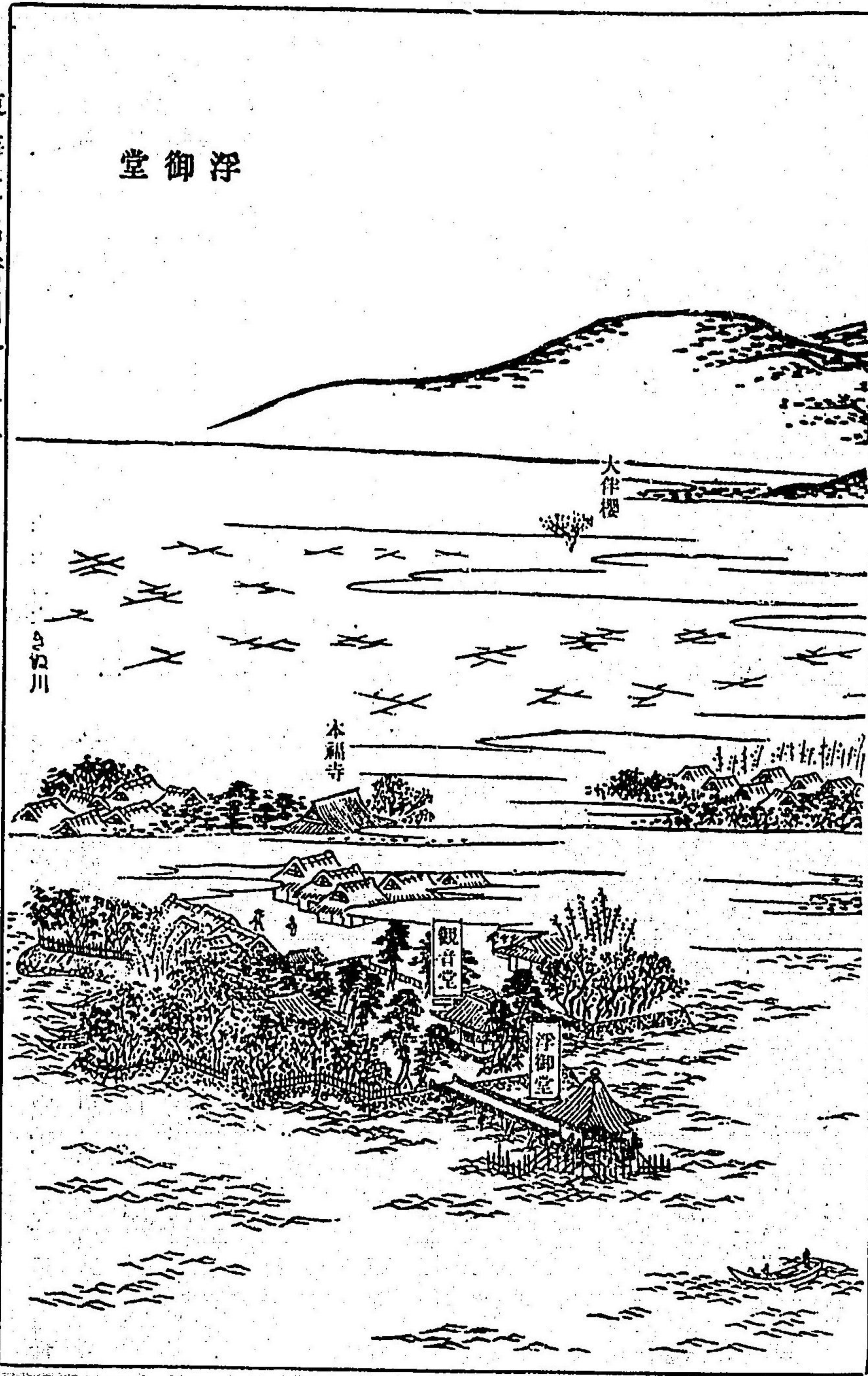
新續 さゝ波やよるへもしらす成にけり 前大僧正 道 玄

古 續拾 終に又うき名やたゝん逢事は 宗 成

堅田浦



浮御堂



新六 いにしへいとしかたつ鮎 衣笠内大臣
 つみやきなる中の玉章
 むかしより淡海の名産に源五郎鮎といふありこれは
 佐々木家一國を領せし時家來に錦織源五郎といふ者
 漁者を司る其漁する鮎の至つて善なるをえらんで官
 家に来る因是其支配司を魚の名に呼ぶならはしと
 はなりにけるとぞ聞し

相國寺林長老
 堅田 鴻鷹幾行更不孤 晚風帶月落東湖
 巖沙背水堅田浦 猶見孔明入陣圖
 落鳳 峯あまた越てこしらに先ちかき 近衛關白時照公
 かたになひさ落るかりかれ

淨御堂 志賀郡堅田にあり宗旨禪宗海門山満月寺と
 號す京師紫野大徳寺に屬す

『本尊阿彌陀佛』左右に化佛一千體を安す俱に惠心僧
 都の作『觀音堂』聖徳太子御作の觀音を安す又傳教大
 師の作の樂師佛弘法大師の作の石地藏等を安す當寺
 初は一條院御宇横川の源信僧都の開基藥師の草堂に
 て岸より橋かゝりありて湖上に御堂を創す傳に云
 むかし源信僧都横川の山岳より湖上を眺給ふに夜々

光明赫々たり此浦に來り漁者の網をおろすに黄金一
 寸八歩の彌陀の像を得たり此浦古來より漁人多し其
 鱗殺生供養の爲に黄金佛を腹内に籠て本尊并に一千
 體を安す今時より五十年前御堂類火に及ぶ 櫻町院
 詔を下して御能舞臺御寄附によつて今の御堂を再興
 に及ぶ又其殘木をもつて客殿をいとむ七月十五日
 より三日の間法會あり近郷群參す
 勾當内侍古蹟 今堅田の田の中に塚あり毎歲九月
 八日夜に入て祭事をつとむ今に怠る事なし此内侍は
 頭の太夫行房の娘にて左中將義貞に思はれ千束の文
 の中に
 わか袖のなみたにやとる影とたに
 してら雲井の月やすむらん

と詠てつかはしければ君きこしめして義貞に給はり
 けるうとん華の春待えたる心地してさんこの樹に陽
 たいの夢ながくさめ連理の枝のほとりに驪山の花
 濃也左中將坂本より北國へ落給ひし時路次の難を
 かへりみて此内侍をば今堅田といふ所にぞ留め置れ

ける其後義貞越路にて討れ給ふと聞て夢うつゝのや
 うになり胸ふさがり氣もきえて中々泪も落やらすそ
 れより都へ登り髪をおろし墨染のすがたとなりて嵯
 峨の往生院に入をはりをとげられし事太平記に見え
 たり

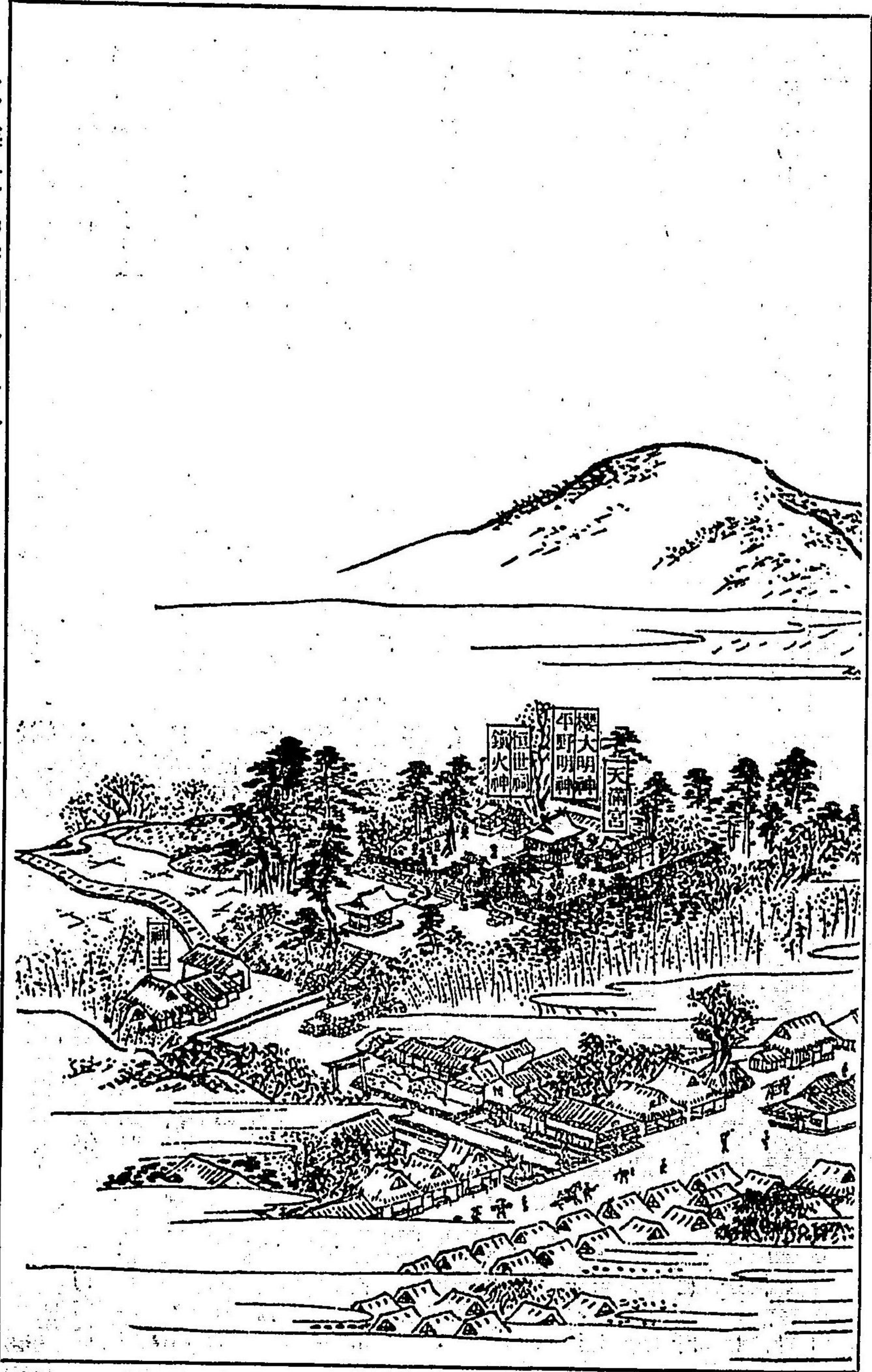
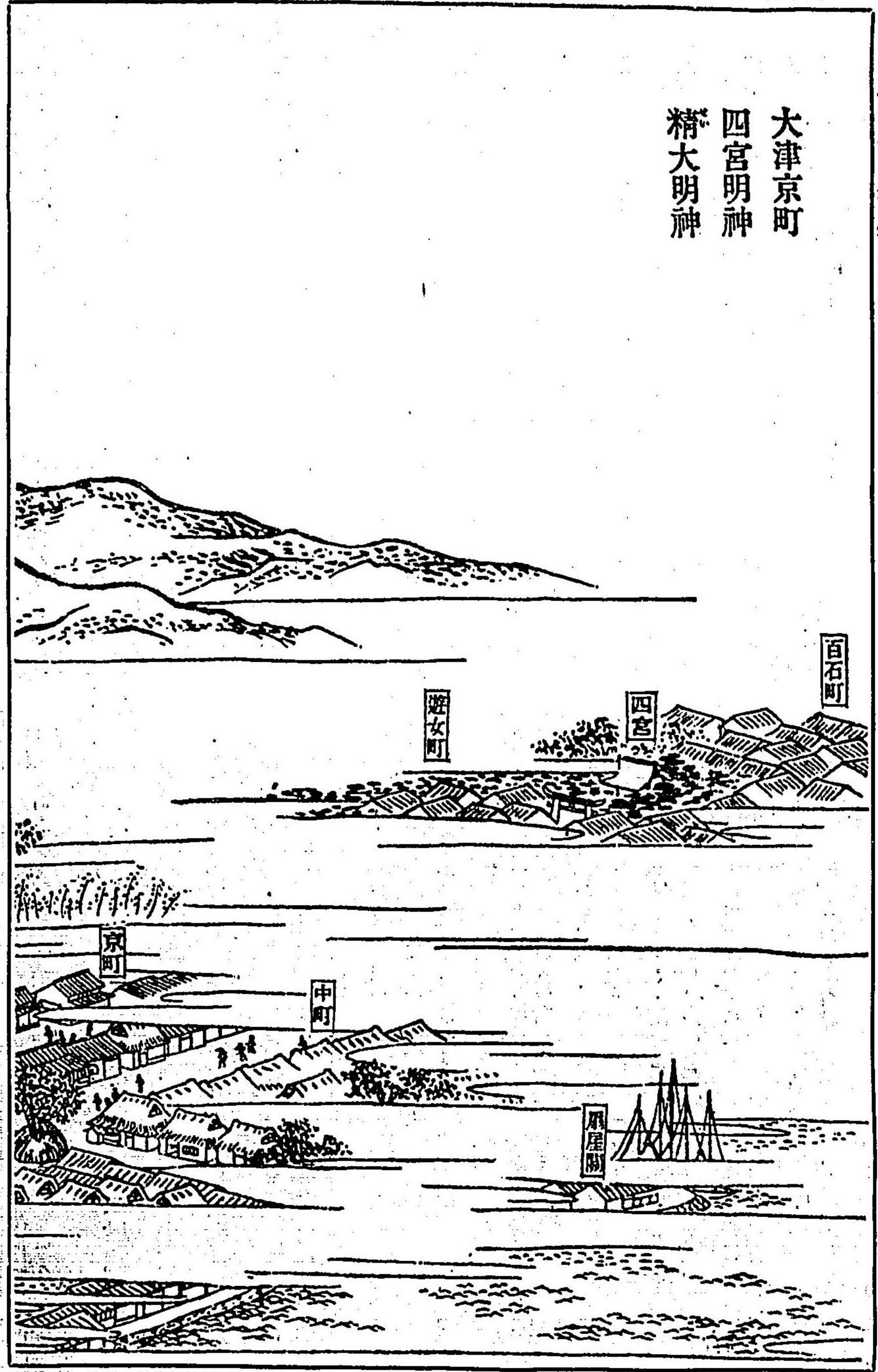
大伴櫻 堅田より西の方五六町山際田圃の中に塚あ
 りて其上に櫻あり大伴黒主の古跡にてみづから植置
 給ひしとぞ詳ならず

眞野入江 堅田の北にあり眞野村眞野川あり浦濱
 など古詠多し

金葉 鶉なくまの、入江の濱風に
 源俊賴朝臣
 後鳥羽院下野
 吹おろすひらの風や寒からん
 まの、浦人衣うつなり
 眞昭法師
 夜半に吹濱風寒みまの、浦
 入江の千とり今ぞ鳴なる
 眞昭法師
 眞野の浦よ舟こさいつる音更て
 入江の波に月そさやけき
 法眼源承
 冬かれのお花をしまみふる雪に
 入江し氷るまの、浦風
 藤原宗行
 亂蘆のほむけの風のかたよりに
 秋ふそよするまの、浦浪
 後京極攝政

新撰 あふみちやまの、濱へに駒とめて 頼政
 古 新撰 比良 大津より六里半北比良南比良の二村比良川あ
 り初冬の頃より春彌生まで高峰に雪たへす京師より
 鮮に見ゆる古詠多し比良神社といふは白髭明神をい
 ふなるべし
 千載 櫻咲ひらの山風吹まゝに 左近中將良經
 花になり行しかのうら波
 同 さ、波やひらの高れの山風 刑部卿範兼
 紅葉を海の物となしつる
 新古 花さそふひらの山風吹にけり 宮内卿
 こき舟の跡みゆるまで
 同 さ、なみやしかのから崎風さへて 法性寺入道
 ひらの高れに霞ふるなり
 前大政大臣
 新古 雲はらふひら山風に月さへて 經信
 氷かさねるまの、浦なみ
 新撰 近行は山風さへてさ、波の 宗尊親王
 ひらの濱に千鳥啼なり
 古 氷たにまた山水にむすはれと 後京極攝政良經
 比良の高根は雲降にけり
 新撰 吹渡すひらのふ、きは寒くさし 國宿
 こころの御持はてまつまはば

大津京町
四宮明神
精大明神



比良 吹入の雲兮飛入の波 比良嶺雪暮江寒
輕舟短棹與何盡 莫作剡溪一樣看
暮雪 雪はるゝ比良の高れの夕ぐれは
花のさかりにすぐるころかな

打出濱 京師より逢坂山を越て初て湖水へ打出る濱
をいふなるべし今の松本の渡口にはあらず
遠江國打出濱にて (上下巻)

新干 さくら浪ひまなく岸をあらふなり 大伴 黒主
源 兼 氏
後 鳥 羽 院
新 拾 駒なへて打出の濱を見渡せば 朝日にさばくしかのうら波
夫木 關越て打出の濱のこのゝめに 跡よりなぐる鳥の聲かな
同 白浪のうちての濱の秋暮に たへず物おもふ鳴鳥を啼

四宮大明神社 大津四宮町にあり

『祭神彦彦出見尊』地神第四の宮なるべし左は地主神
大國 主命右は土老翁三座を祀る例祭九月十日大
津濱邊の大祭なり生土子多し神輿二基奈山十四人形
及び錦織を鋳り造花をして祭禮の行粧とす美觀壯麗

主代として兒出る也松本馬場村の生土神にて例祭四
月朔日也

菊ヶ濱 松本村をいふ〔石山寺記〕むかし 宇多天皇

石山寺に行幸の時淡海の國司大伴翁といふ人此濱に
行宮を建て種々の菊花を植て御幸を饗應奉る故に菊
の濱の名あり此大伴の翁を黒主として新千載のさゝ
ら波の和歌を奉るよしを記せり 殆信用し難し和歌
は打出の濱の下に出せり又此所を玉造といふ舊號あ
りむかし大内裏造營の瓦を貢奉りしとぞ今に瓦師少
々あり

大嘗會稻穂貢 丹州桑田郡江州志賀郡舊例也龜卜

によつて丹江の遠あり當國の時は大略此松本村也
松本渡口 此所矢橋の舟わたしにて湖上壹里也濱邊
風景よく京師より關東上下の送り迎ひ多くこゝにて
宴を催す茶店多し右手には三上鏡山あるは八幡長命
寺膽吹の高峰見ゆる弓手には日枝比良の高根志賀唐
崎の松堅田の浦眞野の入江まで鮮に見えて風流の勝
地又双ぶ方なし

遠近群集す京師祇園會の輕きものなり
又坂本山王祭に此社より榊を献す毎歲三月下旬山に
入て榊を伐出し大宮より下山し此四の宮に移し申の
日神主代表冠にて行列し榊を大宮の社前に立て坂本
の宮仕へわたす舊例にて累年怠る事なし又元祿九年
十一月當社司大伴重堅古語拾遺を印板して跋を書す
世に行ふ

精大明神社 大津松本にあり初めは花浴桂宮(拾

芥抄云桂宮六條北西洞院西門前有桂木一故爲名)
承元年中詔によつて此地に遷す

『祭神』猿田彦命相殿 仁德天皇〔社傳〕當社精大明神
は蹴鞠の祖神にして 後鳥羽上皇此道に御心をよせ
られ厚く尊信し給ふそれより世々蹴鞠の家怠らず恭
敬淺からずむかしは境内廣くして社頭窺々たり舊地
を元宮と呼んで松柏繁茂して古跡となる此地に平野
といふ舊號あれば相殿に大熊鷹天皇を勧請す末社に
天滿宮鎮火神若恒世の神これは池田家の祖神にし
て山王へ神供を供ふ舊記日吉にあり故に山王祭に神

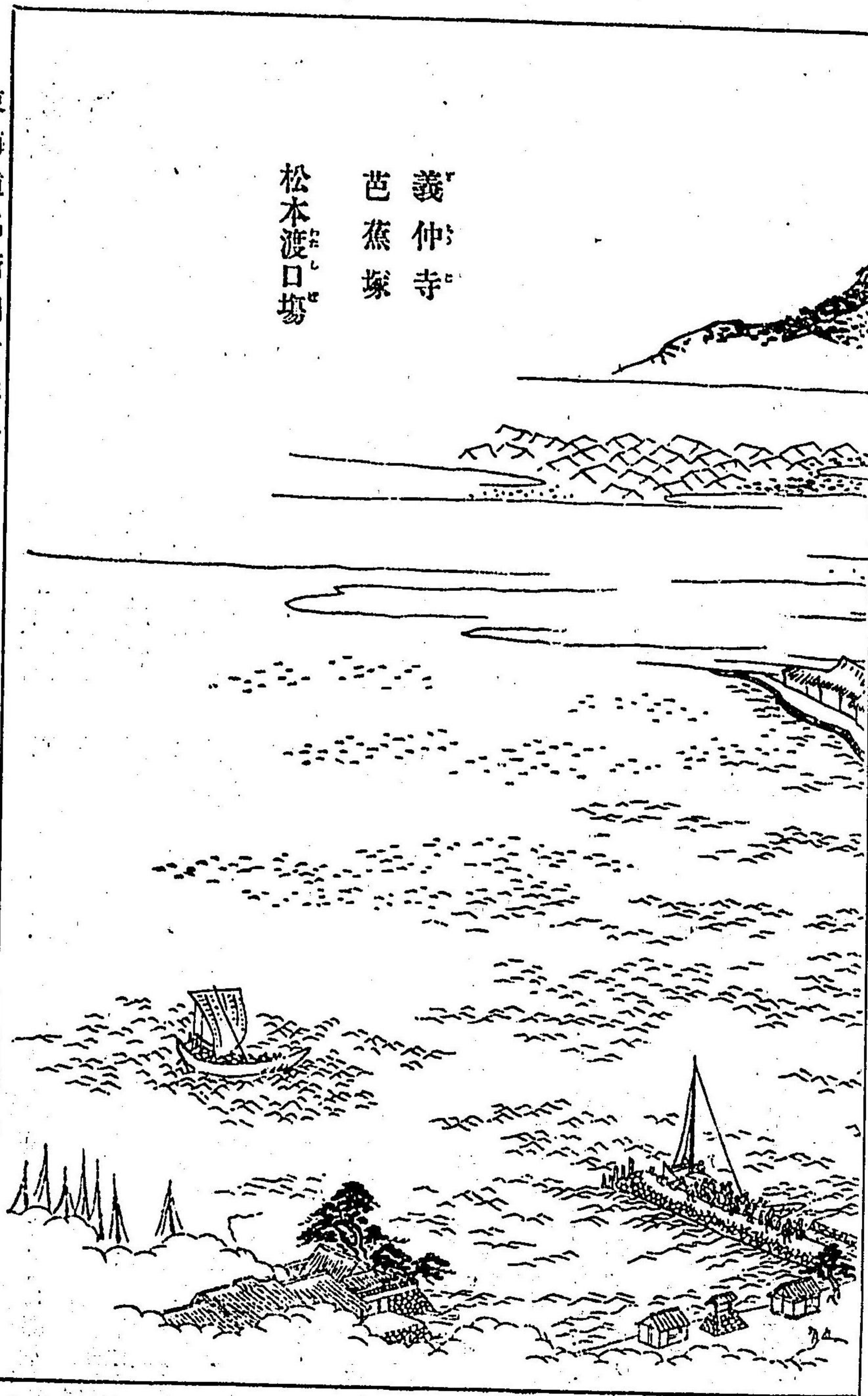
義仲寺 馬場村にあり此所木曾義仲戰死の地也佛堂
に牌あり又家臣兼平の牌も安す

『義仲墳』堂前にあり或る記に云天文廿二年近江國司
佐々木高頼石山寺參詣の歸るさ此古墳を拜し源家の
大將軍の古跡守戸なくてはあるべからずとて一字を
建て食田を寄附し堂守を付らる初めは石山の末院た
りしが今は寺門に屬す

木曾義仲姓は源氏六條判官爲義の孫帶刀先生義賢の
子也(義賢は久壽二年八月武州に於て源源太義平の
爲に討れて亡びたまひぬ)三歳にて孤と成乳夫の家
に依て信州岐祖の山中に塾す長成に逮んで英雄萬武
に超たり木曾冠者と號す頼朝は豆州より義兵を擧る
に及んで義仲も亦兵を發し信州を平げ上野に赴き越
後に入て城 長 茂を戮し威を北國に震ふ京師より平
經盛兵 十萬を帥て攻戰ふ義仲は羽丹生の八幡宮に
於て太夫坊覺明に願書を書せて收め砥浪俱利迦羅を
急に攻落しければ平軍死る者七萬餘人義仲勝に乗て



義仲寺
芭蕉塚
松本渡口場



都に攻登る平家は幼主を護奉りて西海に趨る義仲權を震ひ左馬頭に任せられて越後國を賜り朝日將軍と名乗る院宣を下されしがいまだ幾ならずして驕奢日に長じ公卿を闕官し士民を流毒し上皇を逐内裏を焚暴逆多かりしかば鎌倉より範頼義經討手として差寄せられ宇治勢多をさへへて戦ひしが義仲の軍敗れ勢田を堅し兼平に打出濱にて行あひ残兵を聚て又戦ひしが遂に主従一騎に討なされ粟津ヶ原の深田に馬を乗入猶豫ところに石田小太郎爲人が矢に中て戦死し給ふ事は平家物語に見えたり

『芭蕉翁墳』義仲寺境内義仲塚に隣る又茅室にはせを翁の木像を安す天下蕉門俳諧の祖たり

枯尾花出世世

旅に病てゆめは枯野をかけ廻る

はせを

此翁終焉の事は枯尾花の序に委し是其角が撰也其大意は一歳蕉翁西國行脚に赴かんとて大坂に下り船場御堂前花屋が家に旅寝して痢疾を病で終にこゝにて没す元祿七年甲戌十月十二日年五十一門人其角丈艸

正秀去來を初め十輩斗難波より棺を擔てこゝに葬る是兼ての遺詞也

近年寶曆十年の頃京師下岡崎五升庵蝶夢四方の俳士に觸て此草室を創し堂内に蕉翁の門下三十六人の秀句を聚めて其門弟子の血脉の輩孫弟の胤をたづねてこれに書しめ四方にかくる

什寶に蕉翁の櫛の杖筆の物かすくありこれを藏むるところを粟津文庫といふ近年此眞蹟集印板して世に行ふ

義仲寺に翁を葬りて

なきからを笠にかくすや枯尾花

其角

はせを翁かくれし翌年墳に詣て

志賀の花湖の水それなから

栗堂

芭蕉堂の隣に無名庵といふあり蕉翁東西ゆきゝの時此庵に止宿しける事多し寛保の頃尾州雲裡房石山の奥國分山の幻住庵の古跡にありし椎の木を一株こゝにうつし植て幻住庵と額をうちけるなり

義仲寺の二町許南に岡山といふあり蕉翁の上足丈艸こゝに庵を結んで佛幻庵と號し閉關す地名を龍岡

と改む丈艸は原尾州犬山の家臣なりしに出家し禪宗と成り風雅を専として詩を善し俳諧は正風の玄妙を得て秀句多し遂にこゝに終をとる

大原や蝶の出て舞ふ臘月

丈艸

我事と鱒のにげし根岸哉

同

膳所

城あり本田侯領せらる惣門より五ヶ庄あり城

下の町都て廿四町也西の口船町を過て宮の前町の右に八大龍王のやしろあり八の宮といふ祭は五月五日也左に泉水寺あり風景の地也新堀の橋を歴て木の下北追手に又八大龍神の社あり中大手に膳所明神あり左の方瓦の濱に陽炎清水吾孫君を祭る田畑の祠あり中の庄に牛頭天王稻荷祠あり宮町に若宮八幡宮新羅明神の社あり又別保の村中には蕉翁の棲給ひし國分の幻住庵を曲翠といふ門子こゝにうつし庵をいとなみし古跡又藥師堂あり國分寺といふ

膳所は原粟津野陪膳濱なるべし山王祭に神供を献ずる由縁なり例祭の前七日の間此所の頭人の家に猿の紋の幕を張ゆきゝの商人あるひは湖水交易の船荷み

なこれを征して其荷物に應じ寶錢をとり神供料とす

これを十分一といふ此起を原るにむかし此湖邊に二人の總甲あり名を近江粟津の佐藤陽焔といふ今壹人は日吉近江の佐粟津恒世とてありしが鎌倉頼朝卿の

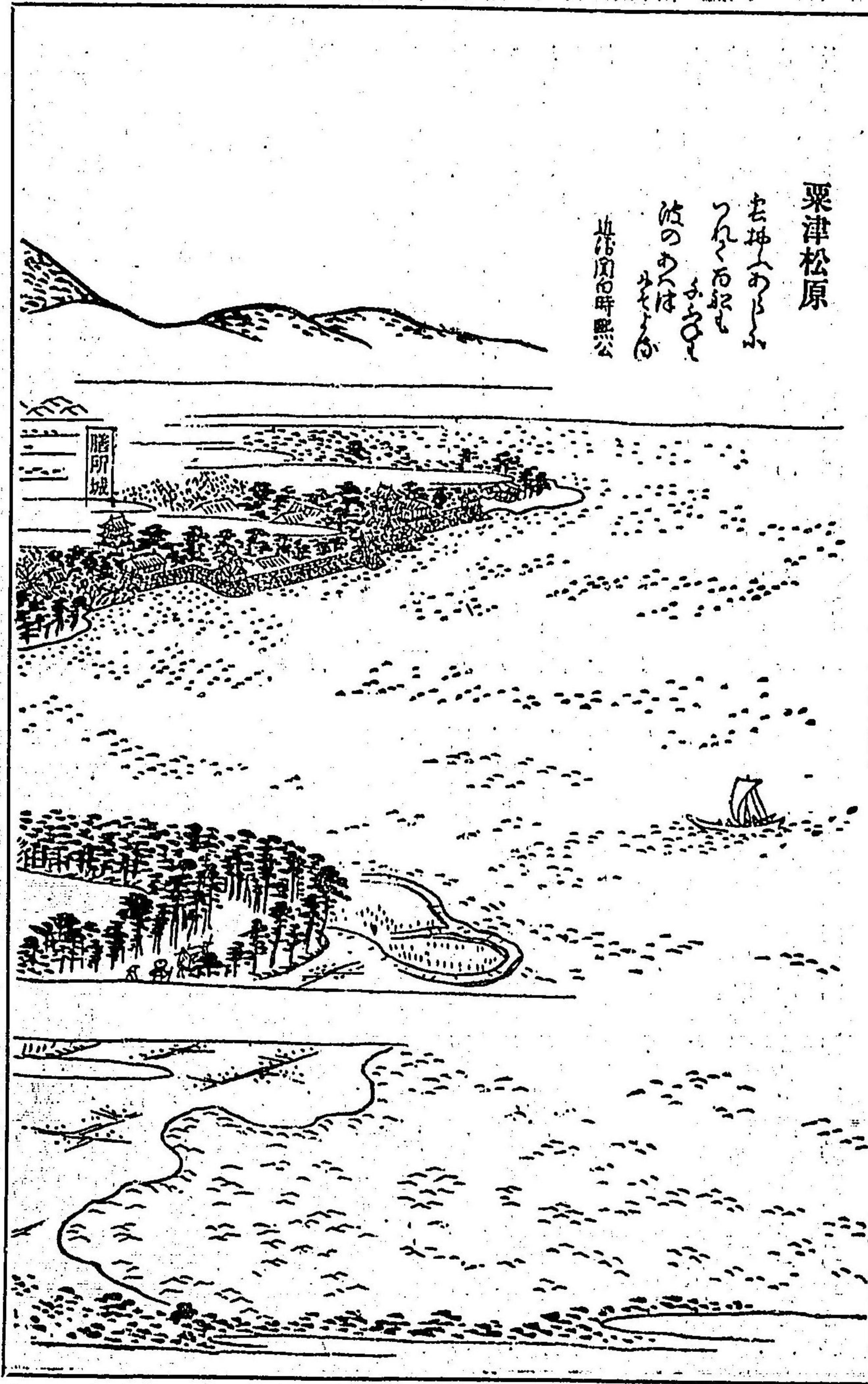
台命として近江國二十四在所はかの兩人の支配にて九十九浦の初穂十分一は近江佐粟津恒世が支配といふ(按に日吉の社記に恒世が大津八つ柳にて神供を奉りし事あり又松本精明神の末社に恒世の祠ありむかし此社の神職ならん歟又膳所に陽炎の清水あり此所に居住せしか兼平の謳曲に粟津の森やかげらふの石山寺と謠ふもこれらの名をこめて作れるものならん)申の祭日には縛船二艘に樓をしつらひ粟飯の神

供を鑄り船印など美々敷して辰の刻より湖上を漕出し音楽を奏して城邊をめぐる船の中には猿の面を被り毛衣を着童子七人ありそれより磯づたひに大津へ漕行領主よりは鞆固船も供に漕連れ陸地往來の者又は旅人など笠を被ながらこれを觀れば虚銃を打て劫

す漸午の刻に唐崎に到り沖に泛て神輿をまつ也これ

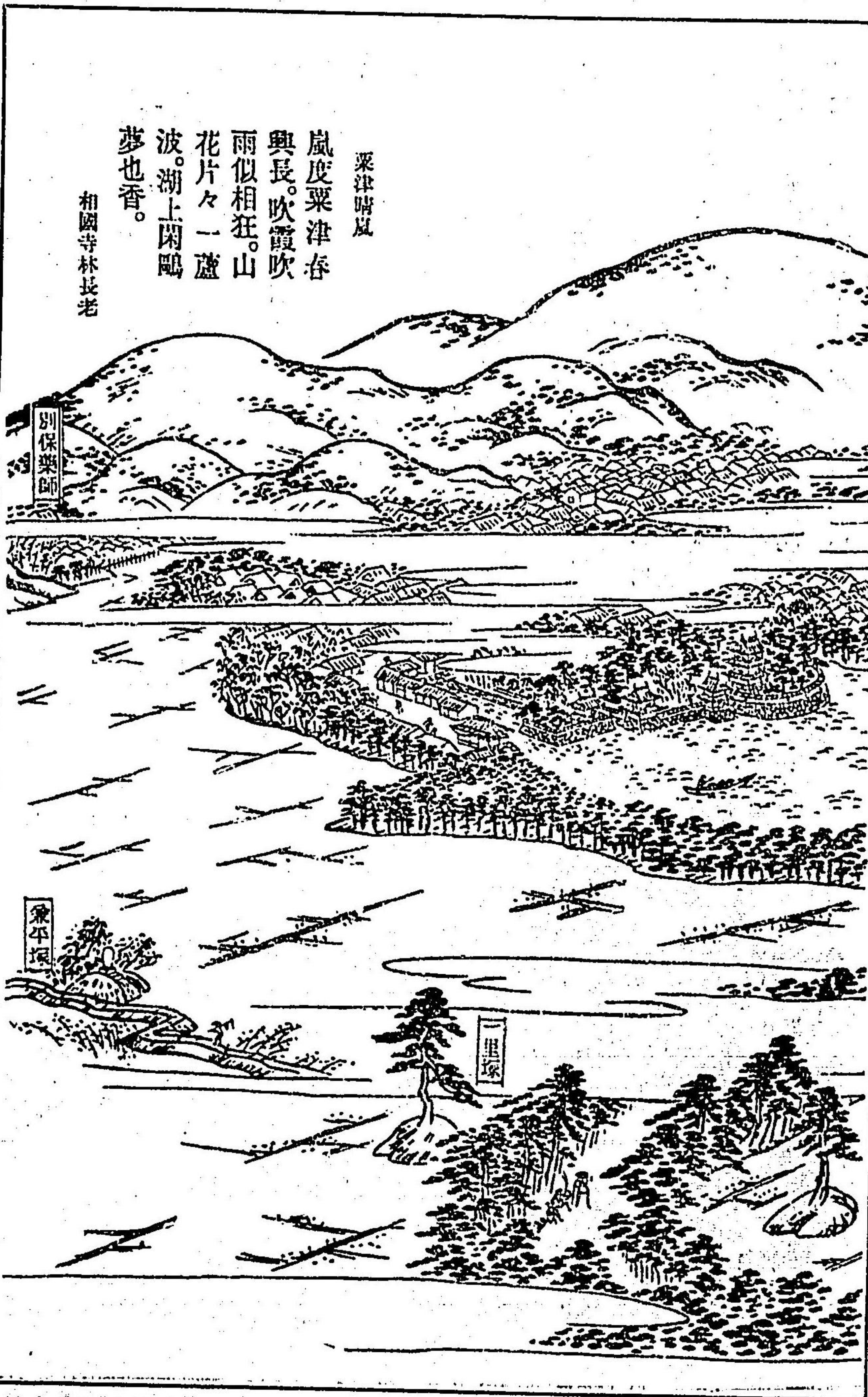
粟津松原

去坤のり
つれづれ
波のうきは
ゆきゆき
此所國の時照公



粟津晴嵐
嵐度粟津春
興長。吹霞吹
雨似相狂。山
花片々一蘆
波。湖上閑鷗
夢也香。

相國寺林長老



を膳所の神供といふ（これより中の刻の神式幸崎の下に見えたり）

陪膳濱 粟津の濱をいふなるべしむかしは禁裏へ鮮魚を日次に貢せしよしを古歌に詠る事多し

拾遺 さゝほる時あらしなふみなる 兼 盛

粟津野 又粟津小野又粟津野の原の古詠多し大津松本より勢田橋までの惣號也今は街道すじを粟津の松原といふなるべし

後拾 あはつのもすゝの薄つくめ 権僧正靜四

新千 いさけふは衣手ぬれて降雪の 爲 家

新織 あはつ野の葛のすゝはの歸るまで 左京大夫顯輔

新拾 あふ坂の鳥のれとなく成にけり 頼阿法師

拾玉 粟津のゝお花は風に散やうて 慧 四

粟津杜 膳所の城にならざる已前膳所明神の社をいふなるべし粟津の清水は陽炎の清水といふ歟



木曾四天王
一之軍將
今井四郎兼
平栗津原血

後撰 關へてあはつ杜のおはすさし 讀人しらす

粟津里 これも城下にならざるまへ膳所五ヶの庄の村里をいふなるべし

新勅 東路の野の草はの露しけみ 王叔子内親

夫木 關のあらし夜寒に吹やさ波の 基 氏

兼平墳 粟津松原より西北へ入事三町田圃の中に石塔あり高さ四尺許今井四郎兼平と鶴す

〔東鑑〕壽永三年正月廿日蒲冠者範頼源九郎義經等爲武衛御使一卒數萬騎入洛是爲追討義仲也今日範頼自勢多參洛義經入自宇治路木曾以三郎先生義廣今井四郎兼平已下軍士等於彼兩道雖防戰皆以敗北蒲冠者源九郎相具河越太郎重頼同小太郎重房佐々木四郎高綱山次郎重忠澁谷庄司重國梶原源太景季等馳參六條殿奉警衛仙洞此間一條次郎忠頼已下勇十競走于諸方途於近江國粟津邊令相摸國住人石田次郎誅戮義仲兼平其外錦織何

官等者遂電云々

今井四郎兼平姓は中原信州の産兼遠が子也義仲信州に流落の時兼遠撫育して忠肝義膽を專とす義仲遂に義兵を發し都に入兼平も從軍して勇威を震ふ義仲遠勅によつて範頼義經追討の院宣を蒙り東軍洛に入て攻戰ふ處に義仲の陣敗れ勢田の橋を固し兼平が死生を知らんが爲こゝに来る兼平も亦味方の存亡を聞んとて勢田を棄てこゝにて主君に遇ひ且喜び且哭て散兵を聚屢戰ふ事巖上の電の如し終に敗走して義仲も戰死し給へば兼平も防戰の術盡て太刀の切先を口に合み馬より逆に墮て自戮す禮記に曰人の臣として其身を殺して忠を露す左傳には忠は人の望也とぞ宋の文天祥は忠に死して顔色變せず韓成は身を殺して忠を厲む遂に祠を康山に建ることにも其忠死を賞して祠廟を建て後世英名を賞せざる事豈遺恨ならずや

東海道名所圖會卷一終

東海道名所圖會卷之二

目錄

石山寺	一
本堂	一
八葉巖	二
脇士	二
不動	二
阿彌陀	二
普賢	二
佛舍利	二
大師剃髮名號	二
源氏間	二
紫式部像	七
古祝圖	七
大般若經	八
三十八社	八
經藏	八

東海道名所圖會卷二

紫式部塔

多寶塔	八
賴朝墓	八
龜谷禪尼墓	八
觀月亭	八
鐘樓	八
御影堂	八
八重櫻	九
形向石	九
船繫石	九
倚子石	九
勝南院	九
食堂	九
蓮池古跡	〇
比良神影向石	〇
手水石	〇
不動尊	〇
龍藏權現	〇
卅三所觀音	〇
關伽井	〇
天狗杉	〇
谷川	〇
奧門跡跡	〇
龍穴	〇
尻掛石	〇
義平墓	一
小屋谷	一
片履岡	一
東大門	一
二金剛	一
石山寺額	一
僧院	一
坊舎	一
古詠	一
東寺崎	一
螢谷	一

浮橋	一三	琵琶湖	二六	梅木	四〇
荒筋樂師	一四	建部神社	三〇	是齋和中散	四〇
空明菴	一四	月輪池	三〇	三上山	四一
城墟	一四	野路玉川	三〇	御上神社	四一
毘沙門堂	一四	野路篠原	三〇	新善光寺	四二
新宮明神	一四	矢橋	三一	石部	四二
財川	一四	鞭崎八幡	三一	石部鹿鹽上神社	四三
岩間寺	一四	石津寺	三一	金勝寺	四三
陀羅尼谷	一五	山田石亭	三五	清水調頁	四三
御靈祠	一五	草津	三六	震岩	四三
幻住菴	一五	立木祠	三六	阿彌陀寺	四三
經塚	一五	常善寺	三六	西寺	四四
とくくの清水	一五	活入石銘	三七	東寺	四四
田上不動	二三	草津川	三七	大石塔	四四
谷上川	二三	灰冢山	三七	鬼備	四五
勢田橋	二三	目川	三七	權櫻	四五
秀郷祠	二六	鈎古城	四〇	平松村美松	四五
龍神祠	二六	小野寺	四〇	夏見	四六

日雲靈跡	四六	本堂	四九	山上庚申	五二
妙感寺	四六	大師堂	四九	辨慶背鏡石	五三
藤房卿終焉地	四六	辨財天祠	四九	景清力鏡石	五三
横田川	四六	大黒天	四九	義經腰掛石	五三
岩根善水寺	四六	山王祠	四九	義朝首洗水	五三
本堂	四六	白山祠	四九	山口重成碑	五三
大師堂	四六	藏王堂	四九	慈安寺	五三
鎮守	四七	末社十八前	四九	松尾川	五三
關伽井	四七	影向石	五二	土山	五三
百傳池	四七	護法石	五二	田村明神	五三
思川	四七	龍池	五二	田村川	五三
水口	四七	關伽井	五二	蟹阪	五七
水口神社	四八	鐘樓	五二	近勢國堺	五七
美濃部天満宮	四八	足跡石	五二	鈴鹿山	五七
蓮華寺	四八	石南華谷	五二	鈴鹿關	五七
大岡寺	四八	道標石	五二	鈴鹿神社	五七
飯道寺	四九	山伏落	五二	本社	六〇
本社	四九	笈渡の神事	五二	鈴鹿社	六〇

攝社	六〇	鏡頼祠	七六	西行庵趾	八一
順宮殿	六〇	石薬師	七六	名物揚蛤	八一
八十瀬川	六〇	椎武彦祠	七六	妓女せをの歌	八一
琴之橋	六一	山郎赤人古蹟	七七	町屋川	八二
坂下	六一	國分寺趾	七七	桑名	八二
笹拾山	六一	杖衝阪	七七	名産白魚	八二
關	六四	采女村	七七	矢田八幡	八二
惠蘇櫻	六五	追分	七八	天武天皇社	八三
地藏堂	六五	參宮道	七八	一本松	八三
參宮道	六九	日永	七八	長圓寺	八三
出羽森	七二	安國寺趾	七八	壽量寺	八三
古馬屋	七二	四日市	七八	願證寺	八三
布氣神社	七二	諏訪祠	七八	十念寺	八三
龜山	七二	三重川	七八	光德寺	八四
森下	七二	建福寺	七九	泡洲崎八幡	八四
庄野	七二	那古湊蜃樓	七九	桑名神社	八四
白鳥塚	七二	垂坂觀音	八一	攝社	八四
瑠璃光院	七三	志氏神社	八一	母山祠	八四

末社	八四	金堂	八七	西御前	九三
蟠龍瓦	八四	鼓樓	八七	岩名山	九三
本統寺	八四	最勝寺	八七	立石峯	九三
輪崇寺	八四	不動院	八七	長尾山	九三
大福田寺	八五	楊柳寺	八七	鷺倉	九三
本堂	八五	赤順賀地藏	八八	上愛宕	九三
寬平法皇宸影	八五	伊勢海	八八	獨鈷水	九三
聖天祠	八五	間遠渡口	八八	八堂溪	九四
觀音堂	八五	多度神社	八九	岩淵	九四
什寶	八五	本社	八九	佐屋	九四
御寶殿	八六	攝社一目蓮	八九	津島渡	九四
佐乃富神社	八六	末社	九二	津島天王	九四
中臣神社	八六	多度川	九二	本社	九四
佛眼院	八六	多度梅	九三	一王子	九四
大圓寺	八六	七色楠	九三	八王子	九四
法盛寺	八七	五石	九三	柏宮	九四
本堂	八七	龜尾山	九三	居森祠	九四
經藏	八七	朝拜峰	九三	彌五郎殿	九四

蛇毒神……………九四

津島祭……………九五

甚目寺……………一〇二

萱津里……………一〇二

阿波手浦……………一〇二

阿波手柱……………一〇三

阿波手祠……………一〇三

藪香物……………一〇三

反魂家……………一〇三

豊天閣御出誕古蹟……………一〇四

東海道名所圖會卷之二

石光山石山寺

志賀郡石山にあり真言宗仁和寺御

室に属す西國巡禮十三番札所

きしよりこゝろしめる石山の 實 隆 公
月もひかりをかすそえて照る

對月 萬 卷

香樓宴月明中 一片氷心滿香空
深夜秋風吹又起 雲邊桂子落珠宮

〔石山寺靈迹集大意〕天智天皇さゝなみ大津の宮に在
せし時慶雲の佳瑞をもつて往古の聖跡を示し給ふと
いへとも正しく荒穢をきり拂ふて伽藍の經營とさひ
また至らず故に縁起に云 天智帝の御宇此山にあた
りて紫雲常にかゝれり 天皇あやしみ給ひ勅使を遣
して見せられけるに山の半腹に八葉の巖石あり奇雲
そびきくたりて帯をなせり誠に大聖垂跡の勝地也と
ぞ又實隆内府勘進疏云樂々波大津の宮にあらかじめ
紫雲の瑞をあらはして地形の蓮座をしめしと云々爾

東海道名所圖會卷二

しより、一百の星霜を経て時機漸純熟して 聖武天皇
宸襟のしろしめす所早く良辨僧正をして伽藍を建立
せしめ給ふむかし上宮太子より歴代稟承の御持尊を
八葉の巖石に安置し百代の皇祚を守護し萬世の勅願
を禱らしめ給ふと也

『本堂』天平勝寶元己丑年良辨僧正肇て基趾をひらき
伽藍を造立し給ひしより以降祖師内供淳祐中興の志
を厲し給ひしにはからずも承暦二年二月二日回祿の
災に罹りぬ本尊は煙中より飛出させ給ふ建久の頃に
鎌倉武術頼朝公再興し給ひ既に舊觀に復しぬ又天正
の頃荒蕪にかゝりしを豊臣秀頼公の母堂淀殿安民治
世の爲に伽藍を修し庄園を復して修補の功なる今の
本堂これ也

『額』當寺諸伽藍者江州北郡淺井備前守息女亞相秀頼
卿御母堂爲二世安樂御再興也

『本尊二尊如意輪觀音』御腹内に籠る本尊長六寸の像は聖德太子の御持尊也良辨僧正靈佛を恐れて丈六の巨像をつくりて小像を藏給ふ常に百王の寶祚を祈り殊更に正五九月の上旬七ケ日には法會ありて嚴重なり故に御即位の初曆には舊例として開扉あるなり又卅三年目に延喜十七年亭子院の帝宇多天皇行幸初てあり其より代々の帝行幸數多し

『八葉巖石』本尊の御座にあり金輪際より涌出るといふ

『脇士』左執金剛神右金剛藏王二十八部衆これは觀世音の眷屬也作しれす

『不動明王』本堂の内陣に安す弘法大師の作

『阿彌陀佛』春日の作今暫く持寶院に請す

『普賢菩薩』内供淳祐の御住房普賢院の本尊なり今世尊院へ請す

『五色佛舍利』興正菩薩傳來の佛舍利なり

『弘法大師剃髮名號』内供淳祐師の觀賢僧正と俱に大師の廟窟に入て剃髮を得給ひ大師自筆の名號のう

へに縫つけ給ふ當寺第一の靈寶たるによつて後陽成院表相を莊嚴し給ふ大縁は大内桐小縁は古金襴なりこれを石山ざれとて世に名高し

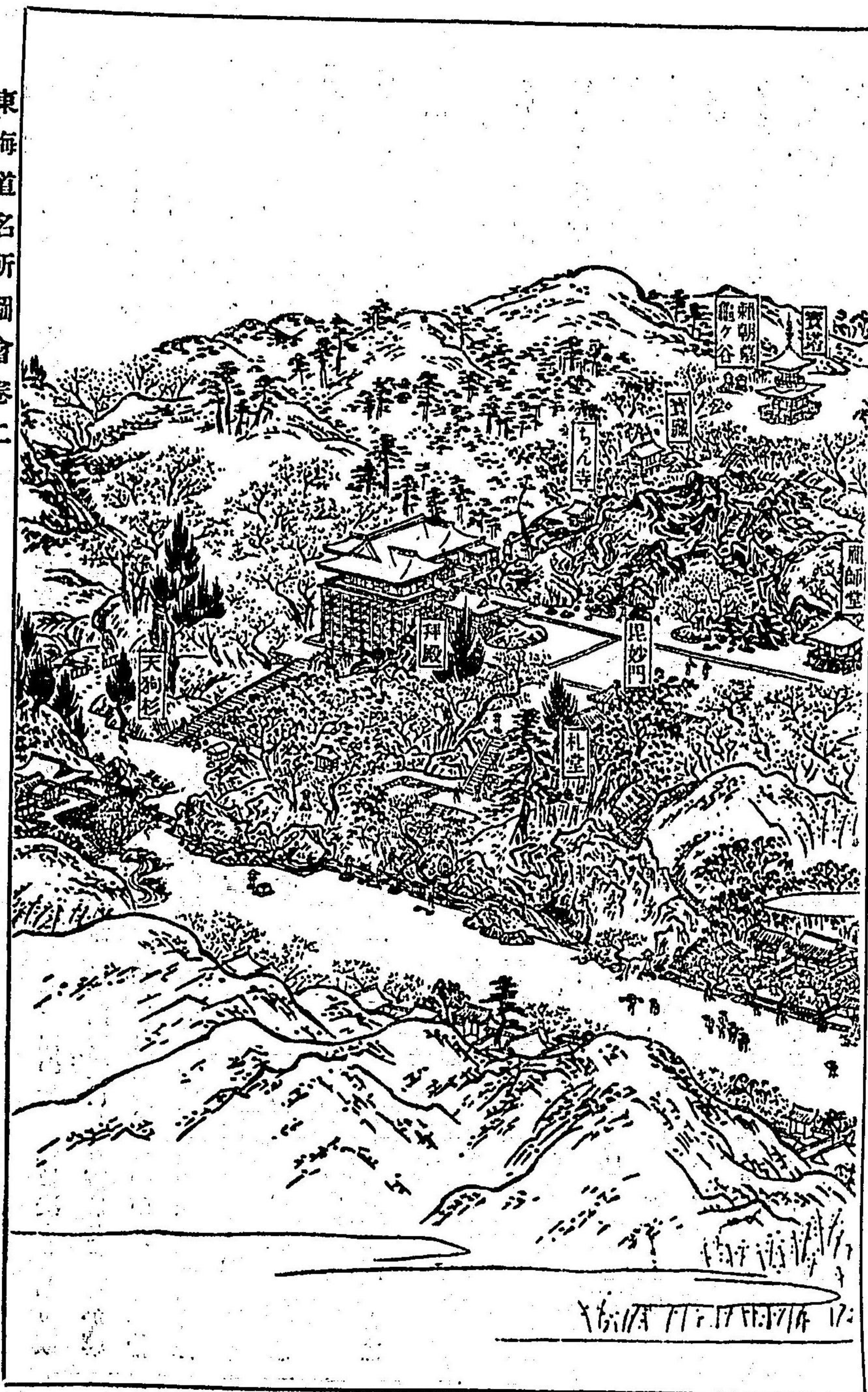
『源氏間』本堂の傍にありむかし寛弘の頃紫式部此寺に參籠して源氏物語を作りし所なり故に源氏の間といふ

〔石山記〕式部は右少辨藤原爲時朝臣の女上東門院の女房にて侍りたるに一條院の御伯母選子内親王よりめづらしからん物語やあると女院へ申させたりけるを式部に仰て作らせられければ此事を祈り申さんとて當山に七ケ日こもり侍けるに湖のかたはるくと見わたされて心すみてさまくの風情眼に遮り心に浮みけるを取あへず大般若の料紙の内陣にあるを本尊に申請て思ひあへぬ風情を書つけ給ふ此式部は日本紀にくはしければ日本紀局といひならはしける

〔順徳院御記〕源氏は第一詞つゝき非人間之所爲不可説之事也第二哥秀逸是又何人及之我朝之最上也

石山寺門前
東寺ヶ崎





〔又花鳥の序〕我國の至寶は源氏物語に過たるはなかるべしといへり

〔清輔袋草紙〕紫式部云名有二説一此物語紫卷作甚深之故得此名一者一條院之御母之子也而上東門院令奉テ吾ユカリノ者也アハレト思食ト令申給之故有此名武藏野ノ義也

〔河海抄〕八月十五日夜の月湖水にうつりて心の澄わたるまゝに此物語をわすれぬ先に佛前の大般若經に須磨明石の兩卷を書初しとそそれより次第に書くはへて權中納言行成卿清書し給ひ齋院へまいらせけるといふ天台六十卷をうかがひ一心三觀の妙理を悟り得るといひ傳ふ

〔長明無名抄〕扱も此源氏作り出たる事こそおもへば此世のひとつならずめづらかにおほゆれ誠に佛に申こひたるしにやとこそおほゆれ凡夫のしわざとはおほへぬ事なりと云々〔續無名抄〕源氏は和國の奇筆也細川玄旨法印の扨從に宮木孝庸と云ひし武士因州の牧に仕給ふ若年の時より隨ひて委

曲に傳授して承終りぬかたの如くの口決ともあり或時に孝庸玄旨法印に世間の便になる書はなにをか第一と仕るべきと尋させれば源氏ものがたりと答給ひし又歌學の博覽第一のものはと問給へは同じく源氏と答させ給ふとそ何もかも源氏にてすみぬる事と承りぬ源氏を百遍つふさに見たるものは歌學の成就也と宣ふよし孝庸はかたりき

源語秘決といふ一卷に源氏の大事を十五箇條あらはすその目錄には

- 一きりつほ 源氏の服有無の事
- 一ゆふかは 源氏のすけの事
- 一夕 顔 侍と童者指貫の事
- 一花のえん 翁もほととしまひ出ぬへき事
- 一あふひ 大將かりの隨身の事
- 一あふひ ねのこ三がひとつの事
- 一さか木 さるもじいませ給への事
- 一あかし とのゐのふくろの事
- まくなきの事

一うす雲 わか君のたすき引ゆひ給へる事

一をどめ をしかいものあるしの事

一玉かつら 水鳥のくかにまごへる事

一はつね 高巾子の事

一こてふ ひのよそひの事

一ふちのうら葉 ついたちころの月の事

このうち三ヶの大事は揚名の介。ねのこ三がひとつとのゐの袋也誠に源氏見さらむ歌よみはむげの事也とさすがの歌人もたまひ戀かせ給ふもの和國にもまれてよますしてはほむなし

『紫式部畫像』源氏の間に今かくる所の影像是狩野古右近識は近衛三義院信基公の筆なり

〔讚曰〕有門空門亦有亦空門非有非空門

こゝろたにいかなる身にかかならむ 近衛信基公

おもひしれともおもひしられず

誰か世になからへて見んかきとめし 同

あとはきへせんかたみなれとも

天台四句文 止觀第 一を讀となしける事物語につきふか

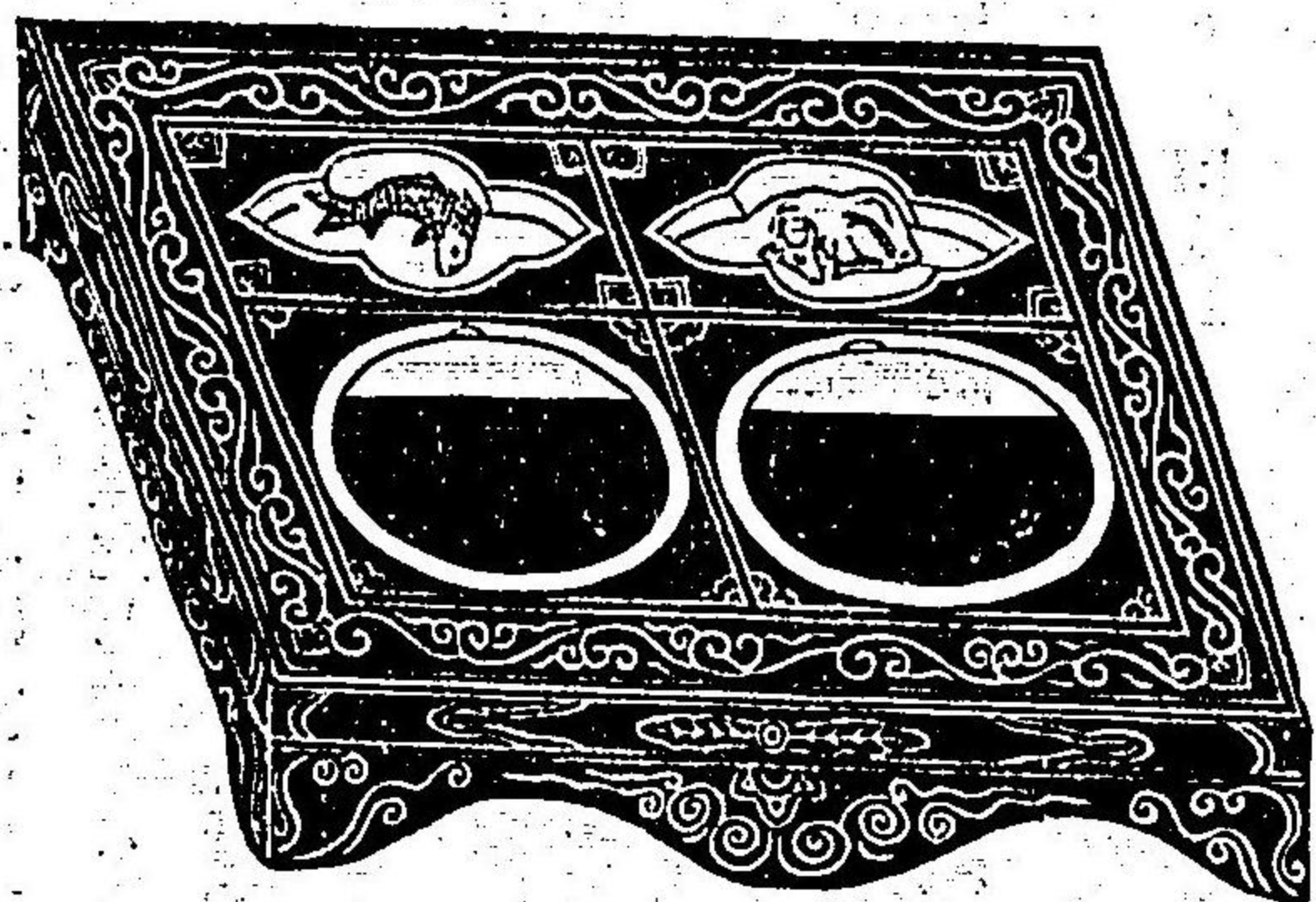
さゆゑある事にや

石山寺什寶
紫式部古硯
世謂石山形

竪 六寸二分
横 八寸四分
厚 寸三分

風藻空餘湖上秋
泓澄春月水悠々
濡毫紫女今何在
一片研池萬古留

鶴山畑維龍



〔河海抄〕式部は檀那院の贈僧正僧都の許可を蒙りて聖運天台一心三觀の血脉に入れりかねてより紫野雲林院の幽閑を思ひしめけるもかた／＼ゆゑあるにや

〔硯石〕源氏の間の靈寶とす式部が所持の硯にて源氏をかけるといふ此石は原石山の石にて紫色瑪瑙のよし又彫刻を石山形といふ都て一面の硯に海二つあり額に牛。鯉の形を彫て左右にわかつ海の二面あるは日月陰陽の象を現し鯉の方は濃し牛の方は淡也

〔大般若經〕式部が自筆也罪障懺悔の爲に此經を書て奉納しける今當寺の什寶なり

源氏の間式部影前に歴世の歌人源氏の卷々の和歌を詠して奉養する事古來より今に至るまで此事絶す故に古人の和歌のたんとく色紙など多し右靈佛靈寶はみな本堂の内陣に安置しける其餘は數／＼なればここに略しぬ

〔二十八社〕當寺の鎮守也祭神伊弉諾尊。伊弉册尊。神日本磐吾彦尊を祀る天地人の三才を表す又石山記云法華の十羅刹女に千手の二十八部衆を一社に勧請し

けるといふ

〔經藏〕當寺建立の後 孝謙帝勅して一切經を寫さしめこゝに藏給ふ

〔紫式部石塔〕此塔はいつの頃より建けるにやしらす

〔二層多寶塔〕建久の頃將軍頼朝卿の建立し給ふなり

本尊大日如來四隅の柱に三十七尊の畫像あり丹青妙殿なり

〔頼朝墓〕寶塔の西邊にあり

〔龜ヶ谷禪尼塚〕同所にあり此禪尼は頼朝の御臺政子前也鎌倉志に見ゆ

〔觀月亭〕多寶塔の北にあり或は大觀亭又は餘味亭となづく湖上の釣舟勢田橋の行人眼下にありて清爽たる山亭なり

〔鐘樓〕中壇の地にあり石山古説云此鐘はむかし龍宮よりあがりしといふ

〔御影堂〕又三昧堂或は法華堂ともいふ鐘樓の下の地にあり中央弘法大師左良辨僧正右内供淳祐後堂に八祖の畫像あり

〔當寺僧寶傳〕良辨淡海百濟氏子母喪失於桑樹下。有僧史已長而 聖武帝敬崇爲帝師。寶字四年勅爲僧正。帝創東大寺。鑄遮那銅像。聚金爲池。此時本邦未有黃金。乃勅使辨所。金峰山金剛藏王。以資銅像。池上山持念夢藏王示近州湖西之地。就彼持念必可得黃金。辨便尋至。縋慮安帝所。授如意輪像。此像蓋自聖德皇太子。歷世王者持尊即六寸金銅像也。已修念不幾。自與州始買黃金。辨欲收像。還像不。動巖。乃具狀奏。朝帝先于東大寺。勅。藍勅名石山寺。當夷基址。地中得五尺寶鐸。益以爲靈地。如詳載寺志。辨以寶龜四年閏十一月十六日。化云々

延喜の初年聖寶尊師もこゝに來りて眞言秘宗を弘演し給ひしより觀賢淳祐相ついで座主に任す良辨僧正は南都東大寺の傳記にも近州志賀郡の人とあり相州大山寺の縁起には相摸の國司染屋太郎太夫時忠の子にして出誕の後二月ばかりに乳母に懷かせ母の園に出て桑を取給ふ時雲中より金色の鶯飛來りて赤子を

抓むて空に昇りぬとあり故郷なれば大山寺を創す出處所相違ありなを末卷相州の下に辨す

〔八重櫻〕御影堂の西邊にあり開山僧正南都よりこゝに植させ給ふといふ古木は枯て世々植繼也

石山の堂のへに侍りける櫻の木に書付侍ける拾遺。うしろめていかて歸らん山櫻。よみ人知らず

〔影向石〕同所にあり觀音影向のいしといふ

〔船盤石〕比良明神船をつながせ給ふいしといふ

〔倚子石〕婦人の安産を祈るに靈驗ありといふ夫當山の石をもつて其瑞を現す事多し寺號誠に故ある事にや

〔勝南院毘沙門堂〕石壇の上にあり本尊立像毘沙門天脇士吉祥天女禪貳子童子建久の頃掃部頭親能此毘沙門の威力をもつて敵を滅しける敵城當寺より南に當れば南に勝といふ寺號せり此親能鎌倉殿の命を蒙りて京都の守護に上洛する事東鑑に見ゆ

〔食堂〕下壇の地にあり聖僧文殊を安す石像の作しれず又大黒天を安す長五尺傳教大師の作天台山破却に

遇とき湖水に浮み東寺ヶ崎に流れよるとなん

『逆池舊跡』むかし此邊にあり元政の草山集に出づ

『比良明神影向石』食堂の南にあり初め當寺草創の時

地主比良神此石上に安座して良辨僧正に觀音の聖跡

を示し山の半腹に入葉の巖むる事を指授し給ふとな

なり

『手水石』偈文は世尊院の一代惠命院權僧正宗盛の筆

なり

『不動明王』中むかし夢想によりて作るとなん

『龍藏權現』當山の鎮守也熊野權現の別社也本地將軍

地藏

『卅三所觀音堂』中頃信尼ありて新に建立したり

『關伽井』下壇の地にあり昔より觀音に供し奉る水源

は本尊の下の石より涌出す清冷甘味也中古地震の時

此水半里ばかり南の小河へ涌出て湖水へ流入る事兩

三度に及べり今に其河をあか川といふ

『天狗杉』山の入口にあり當寺の護法神此杉に棲給ふ

となん

『柳島』天狗杉の西南にあり承暦二年二月二日本堂炎

燒の時觀音こゝに飛出させ給ひ此島の柳の上によし

ます今島の形鮮ならず

『谷川』關伽井のほとりにあり

高丘相如

明林 泉飛雨洗聲聞夢葉落吹風色相秋

集 新拾 谷川のなかれは雨と聞ゆれと 孝 標 女

『奥門跡舊趾』あか井より龍穴の道にありいにしへの

當寺代々の寺務住房の舊跡也今田圃となりぬ天文の

頃には成就院と申けるが實隆公條座主尊海など唱歌

の會ありしと見ゆ又頼阿法師もこゝに來りて朝雪を

草庵 残りなくちさとのやまもみるばかり 頼 阿

山家の松を 同 住なれてとしそへにける山さとの 萬都をむかしのとしと見るまで

『龍穴』あか井より奥三町にありむかしの靈廟にして

幽谷の深達なり實に塵外の仙境ともいふべきは炎旱

といへども池水かれすむかし旱魃の時請雨の精祈を

いたすに靈應いちぢるし

『尻掛石』龍穴の側にありいにしへの大徳に歴海和尚

といふ人あり此石上に坐してつねに孔雀經をよみ給

ひけるに龍王壇に昇り諸龍池中より出現して和尚を

恭敬しけると云

明林 若波路遺堂千里 白霧山深島一聲 直 幹

『義平墓』龍穴より奥二町ばかりにあり

鎌倉の慈源太義平近江國石山寺の邊に忍び居けるを

難波三郎經房が郎等生捕て六波羅へ引て誅せられし

は永暦元年正月廿五日生年廿二才と平治物語に見え

たり義平京の軍に打まけて此所まで漸落のび給ひ當

寺岩本坊法印某に今の法輪院たよりて山中にしこのび

居たるを京へ註進の者ありて難波三郎經房馳向ひ遂

に捕れける其追善の爲に石碑を立てると云傳へり此

義平の首をかけし所は三條高倉也今に至つて祟あり

として家居もなく空地也都名所圖會拾遺に見えたり

『小屋谷』又かくれ谷といふ此邊の谷の惣名也義平が

餘黨しのび居たる所と申傳へり

『片履岡』當山の絶頂をいふ内供淳祐一の沓をこゝに

遺して昇天し給ふとなん

『東大門』東方二王門をいふ都て今の諸伽藍に於ては

大略建久年中鎌倉將軍頼朝公頼谷禪尼の勸進により

て中興の志願を起し給ふ此門も即其隨一といふ

『二金剛像』東大門に安す運慶湛慶父子の作なり

『石山寺額』藤原行能の筆也額の背面に仁治元年十月

十三日從三位藤原朝臣行能書之云々

右は門内の堂塔の名蹟也尚寺房の舊跡多し略之現

存の寺院門内の北には寶性院。明王院。吉祥院。南

には法輪院。密藏院。持寶院。世尊院。圓乘院。門

外の西には松中坊。中西坊。西本坊。東には岩本坊。

岸本坊。梅本坊。東池坊。多間坊。湖月坊等也

此院中に持寶院といふは天文の頃まで倉之坊とぞい

ひし也天文廿四年八月稱名院公條大覺寺御門跡准

后。紹巴。宗養などこゝに來り給ふて五日の會筵あ

りて千句の連歌ありこれを石山千句といふ

石山にまふて侍りて月を見て歌侍ける

新古 都にも人やまつらぬいしやまの 藤原長能

高階成順石山にこもりし時

後拾 見るめこそあふみのうみはかたからめ 伊勢大輔

能通朝臣女をおもひかけて石山にこもりてあは

ん事を祈り侍りけりあふよしの夢を見て女のし
とにかくなんしたるといひつかはし侍りければ
よみてつかはしける

同 いのりけむことはゆめにてかきりてよ 四條宰相

こころさし侍ける女ことさまになりて後石山に
こもりあひて侍れば歌侍ける

同 戀しさもわすれやはするなかくに 前大納言經輔

今 都にてまつへき人もおほはへす 權大納言行成

山よりふかくいりやしなまし

前大納言爲氏續拾遺をえらひて後石山寺にて人
々によませける

和歌の浦にまたしひろはいたまつしな 惟宗忠茂

おなし光の敷にもらすな

石山 秋月 いし山やにほてる月のさやけさは 關白政家公

もろこしまてもしくまなかるらん 相國寺 林長老

同 秋風蕭颯一天涯 霜滿四山不帶霞

古木回岩寒月影 吟殘葉々霧中花
いし山やにほてる月の影は 近衛關白時義公

明石もすまも外ならぬかは

夫石山寺は草創より年歳久遠にして延暦三井にも双
びて都て一千有餘歲に逃り僧正良辨勅を奉て之に
來り大悲の本尊を安じ持念せるに陸奥の金さく山よ
り初て黄金を貢る白髭明神は巖上に釣を垂て靈迹た
る事を示し紫式部は湖月を賞じて源氏を著し瑪瑙の
古硯をとひ本堂は巖上に建て其めぐりは崔嵬たる
巖石層々として精宇寶塔所々に見えたり後には連峰
峨々として岩間笠取醍醐についきて嵯峨たる中に靈
場あり前には湖水の流れ森茫として今古なく月を浴
して古來石山の秋月は八景の一勝也あるは漁舟つら
なりて供御の瀬へ下し卯月さつきの頃は笠見とて河
の面の船遊びに三弦の音今様の聲棹の歌につれて黄
昏をもちて大日山より飛出る笠幾千萬の數しらす名
産とて石山の笠は他所よりも極て大きく光も強して
れ風土の奇也西國巡禮もこゝに來つて長旅の爵を散

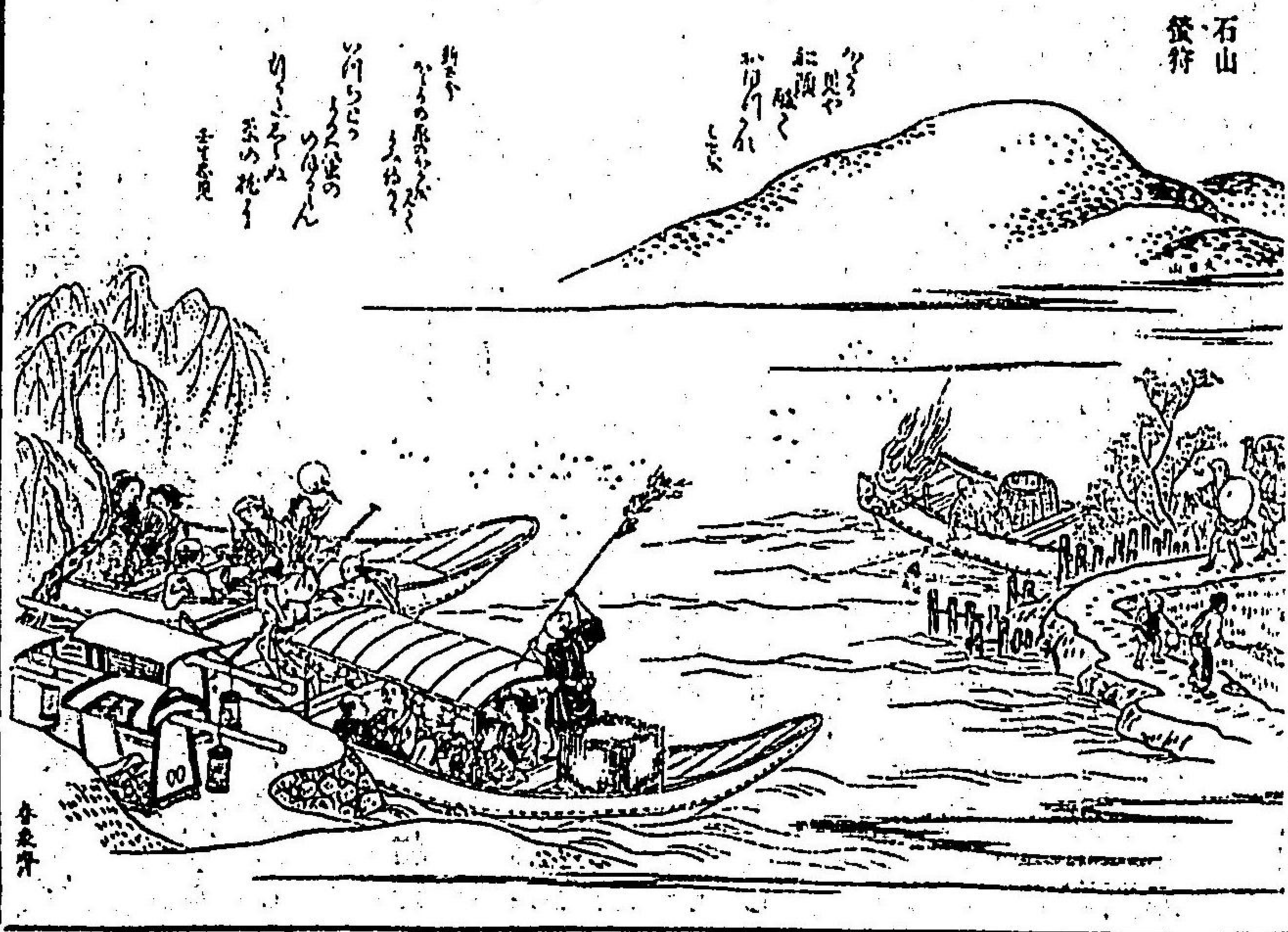
し參宮坂迎も共に打混じて宴を催すむかしより古人
の秀詠多く代々の勅撰にも多く出たり三尺の童子が
手習ふ初の草紙の表書に石山秋月と記せるも貴とな
く賤となく此名勝を賞するの専なるべし謝莊が月の
賦に清質の悠々たるを昇澄暉の滿々たるを降す列宿
縹なる事を掩ひ長河映を韜りとほ此わたりの事なる
へし

石山にて曉日くらしのななきをきいて(此寒蟬は
石山の名物となん聞ゆ)

新勅 是を茂みと山のかげやまかふらん 藤原實方
明るししらぬひくらしの聲

△是より已下石山寺門前の名所

『東寺ヶ崎』大門の濱をいふ石山寺境内湖水の間はむ
かしより殺生を禁じける事繪旨院宣武家の下知狀等
たびく及ぶ今に東寺ヶ崎は殊に漁を禁じける也
『笠谷』石山寺より勢田までの半にあり初夏の頃は此
谷より笠多く出て湖水にうかむけしき此所の奇觀也
『浮橋』或は愛橋又浮身橋ともいふ笠谷より流れ出る
溪川の橋也此橋は古より名所となん申ける



圓融院の石山におはしけるに九月晦日殿上人と
もうきばしといふ所へまいりて侍けるに
玉葉 我たにかへるみちにはものうきに 前大納言公任
いかにすきぬるあきけにありけん

〔縁起〕寛和元年八月廿九日 圓融院御かざりをおろ
させたまひて後十月一日石山寺に行幸なりて即御通
夜ありし日頃讀給ふにや

〔荒痛樂師〕勢田より石山の道の側にあり石山寺の別
所こゝは正應年中の開基也本尊石像樂師日光月光十
二神將の像あり〔縁起〕延寶四年石山寺開帳の時龍女
此堂に詣して其鬘髮を納けると也今什寶とす又荒痛
と稱する事は諺云むかし此石佛河岸にありて佛牀と
いふ事をしらす里の童草刈鎌を此石にて研に噫嘻痛
哉の聲聞ゆ因茲みれば佛像也驚てこゝに一字を
建て安置しけるとぞ享保年中住僧有昌といふ人當
寺を再建して梵鐘も鑄ける

〔空明菴〕深草元政法師の老母の古跡也石山門前寺邊
村にあり今田畑となりて土人訛りてヒメワンといふ
元政の母の出生の事又は石山寺のほとりにて佛像を

感得し深草瑞光寺に安置の事或は空明庵にて即事の
詩稿など草山集にのせられたり

〔城墟〕此はとりにあり天正の頃まで須佐美山城守と
いふ人居城せられしとなり今民間に子孫あり井上と
いふ

〔毘沙門堂〕城の守護神也長五尺斗の天像威靈の相好
也城跡の巽に小祠あり

〔新宮明神〕石山寺の鎮守也寺邊村にあり此所の生土
神とす例祭三月三日祭神は熊野新宮當社むかしは嚴
重にして例祭も壯觀たり遠近群詣しける事古き草子
などに見えたり今は神輿一基のみわたりて祭式久し
く絶ぬ又櫟杜といふあり新宮の御旅所なり

〔財川〕石山田圃の中にあり湖水へなかれ落る川也石
山寺の政所財川佐渡守居宅の古跡也故に名とす

△右已上はみな石山寺に屬す
岩間山正法寺 石山の奥岩間にあり真言宗西國巡
禮十二番札所本尊千手觀音長四寸三步金銅佛越泰
澄和尚の持念佛脇士左吉祥天女右葉相仙人

それ當山は 元正天皇御宇養老年中越泰澄斗蓋に身

を放す笈に安置し給ふ一搦手半の尊像を本尊とし一
宇を建立し坐禪苦行し給ふ事都て十二年に及へり又

伽藍の西南に桂樹ありこれを伐てみつから等身千手
の像を作り彼金銅の小像を籠ける也醍醐岩間石山の

間は山路にして老たる西國巡禮は歩しかねて足を脚
躡するも多かりき

陀羅尼谷 石山より醍醐へ出る山中の細道也古傳云

内供淨禪師の觀賢僧正の許へ日々かよひ給ふと云陀
羅尼を誦して往還し給ふと云石山より京都への近
道也

御靈祠 勢多橋西爪の南にあり鳥居川村北大路村の

生土神とす例祭三月三日「祭神大友皇子」相傳ふ此皇
子淨見原天皇と合戦し給ひ大友皇子遂に打まけ此勢

田橋にて亡び給ふと也又或が云三井寺の別所常在寺
の山中といへり勢田にあらざる事日本紀に見えたり

〔日本紀〕大友皇子左右大臣等僅身免以逃之男依等
即軍于粟津岡下是日羽田公矢國出雲臣狛合共攻三

尾城一降之壬子男依等斬近江將犬養連五十君及谷

直搦手於粟津市於是大友皇子走無所入乃還隱
山前以自縊焉

幻住庵舊跡 俳師芭蕉翁幽棲の蹟也勢田橋より石
山寺に至る中途に標石あり勢田の磯田雨橋建る是よ
り八町斗奥也國分山といふ

〔經墳〕舊跡の傍にありこれ雨橋表石を建る又幻住
菴の由縁は隣地八幡宮の拜殿の軒に板面に記してか
くる五升庵蝶夢寄附す

『とく』の清水』經塚より十歩許麓にあり幻住菴記
にとく』の清水ありこれによつてなづく

〔幻住菴記略〕石山の奥岩間のうしろに山あり國分山
と云そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし麓に細き流
をわたりて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮た
せ給ふ神体は彌陀の尊像とかや唯一の家には甚忌
なる事を兩部光をやはらげ利益の塵を同じうし給ふ

も又たふとし日頃人の詣ざりければいと神さび
物しづかなる傍に住捨し草の戸ありよもぎ根笹軒を

國分山
芭蕉翁
幻住庵
古蹟



國分村

中もつて
あつたや
右の
枯尾花
そとへか

岩間



笠取山

推木

八幡宮

住跡
幻庵

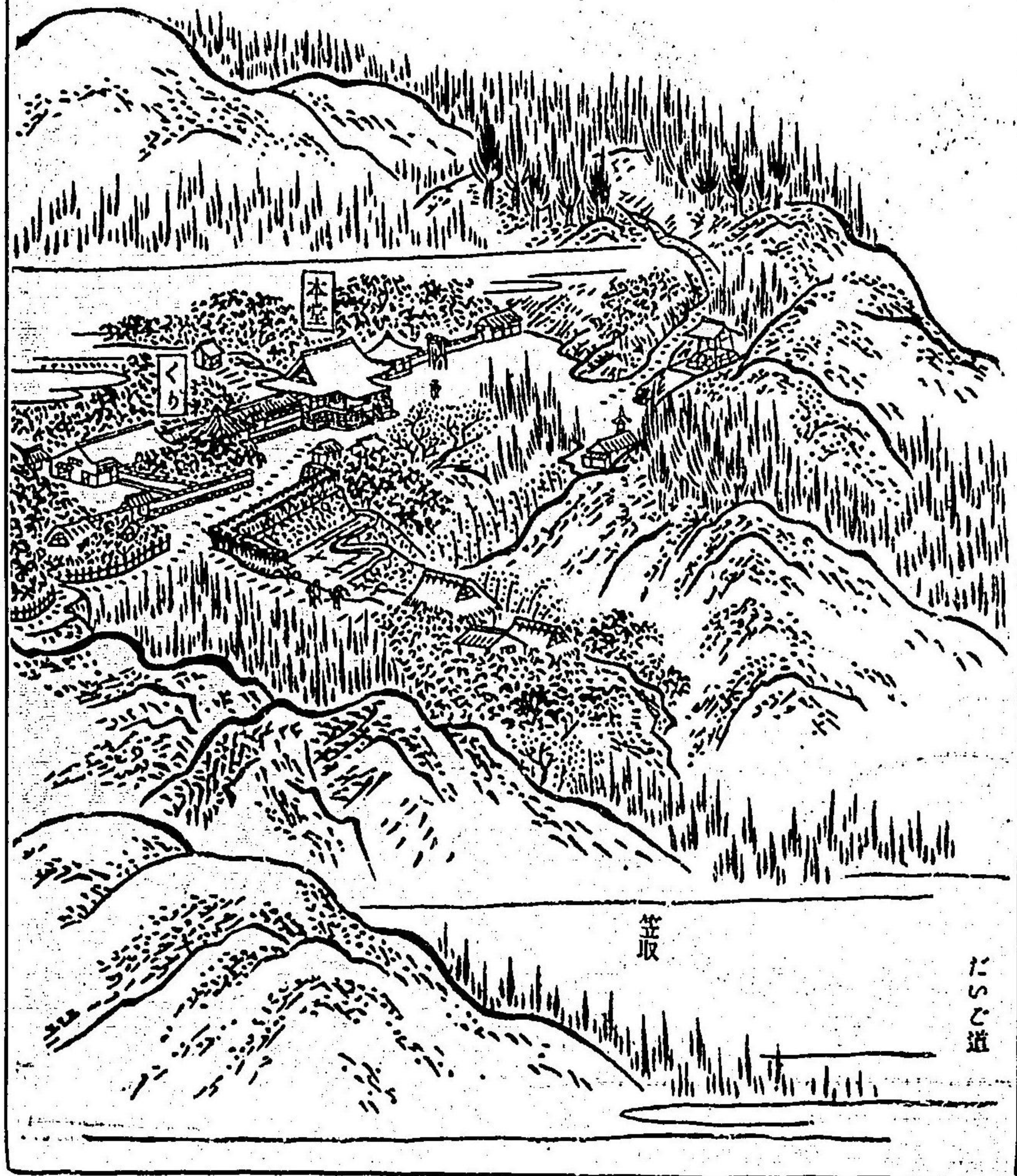
水の水

奥の
米を
そとへか

岩間寺

西國巡禮札所

第十二番



かこみやねもり壁落て狐狸ふしとを得たり幻住菴と
 云(中略)山は未申にそぼだち人家よきはせに隔り南
 蕪峰よりおろし北風海を浸して涼し日枝の山比良の
 高根より幸崎の松は霞こめて城あり橋あり釣たる、
 舟あり笠とりにかよふ木樵の聲麓の小田に早苗とる
 歌笠飛かふ夕暮の空に水鶏のたぐく音美景物として
 たらずといふ事なし中にも三上山は士峰の傍にかよ
 ひて武藏野のふるきすみかもおもひ出られ田上山に
 古人をかぞふさゝはが嶽千丈が峯袴腰といふ山あ
 り黒津の里はいとくろう茂りて細代守にそとよみけ
 む萬葉集の姿なりけり猶眺望くまなからんと後の峯
 に遺のぼり松の棚つくり藁の圓座を敷て猿の腰掛と
 名づけ彼海業に巢をいとなび主薄峰に菴を結へる王
 翁除佗が徒にはあらず唯睡辟山民となりて孱顔に足
 をなげ出し空山に風を捫て坐すたまゝ心まめなる
 時は谷の清水を汲て自炊くときくくの雫を佗て一爐
 の備いとかるしはたむかし住けむ人の殊に心高く住
 なし侍りてたくみおける物ずきもなし(下略)

蕪翁こゝに三とせの歳月を歴て長明の方丈記に倣て
 幻住菴の記を書れ一夏九句には一石に一字を染て法
 華二十八品を書寫し里のわらはへをあつめて磔をひ
 ろはせ其賃には糖菓をとのへ置これに換て其功を
 遂給ひぬ今折ふしには此經石土中より出ると也其記
 文の末に

先たのむ椎の木もあり夏木立

はせな

此一句を遺して閑素幽棲の風流に着し生涯名利を棄
 て月雪に戯れ給ふ記中の社は近津尾八幡宮とて國分
 村の生土神なり 聖武帝の御時營給ひし國分寺は廢
 して本尊藥師佛は村中の道場にあり又別保の藥師と
 もいふとくくの雫は汲はずまでもなき住居をあら
 はし椎の木は伯夷が炭に換たり城は膳所の城橋は勢
 多のはしさゝばか嶽は幻住菴より東の方谷上山のつ
 いき也千丈が嶽といふは坤の方にして此ほとりの高
 山北千丈南千丈の二峯あり袴腰は千丈が嶽より一里
 南にして勢田川より西也雨ふれを露ももらさしと詠
 けん笠取山は石山と醍醐の中にありされば宇治山の

勢田橋

一名
青柳橋



村川井島



喜撰ヶ嶽洛北の朗詠谷芳野の昔清水外山の方丈石な
どみな同日の論の山居にして耕雲釣月の隠逸なり

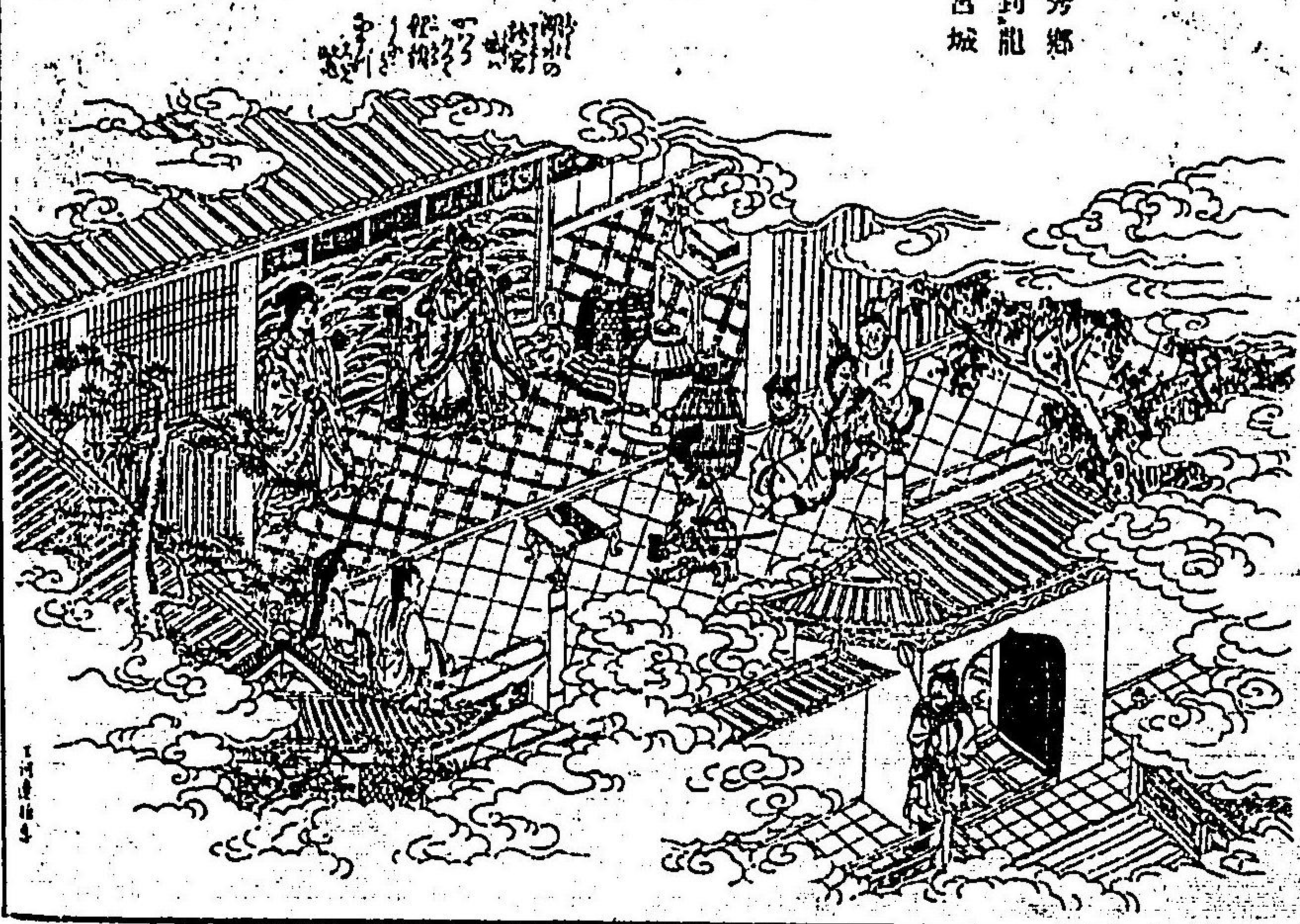
太神山不動寺 谷上山高峯にありて又田上とも書

す世人谷上不動と稱す詣人鹽苞を尊前に供す三井寺
の配下なり『本尊不動明王』智證大師の作長五尺當山
の草創は 清和帝の御宇靈瑞によつて三井より大師
茲に到り給へば不動尊の全軀八ッ峰ありて八大童子
を表し八ッの谷は八大龍王に表して一の老翁忽然と
して現れわれ此嶺に在て師を待事久しこゝに靈樹あ
りこれを以て不動尊を彫刻しこゝに安置せは國家擁
護の靈囀ならんこれを告るわれは神明太神也と云終
つて見えす大師感嘆して明王を彫刻し一字を造立し
て田上不動と稱す近年京師及び近國詣人月毎の縁日
には多し又毎歲正月八月は廿二日より七ヶ日の間開
扉ある也

田上川 勢田より谷上山へ登る麓に溪川あり古歌に

は勢田川の裾を詠る也又田上山田上里の古詠多し俊
頼卿の山居ありし由古詠に見えたり今さだかならず

秀郷 到龍 宮城



拾遺 月影の田上川に清ければ 清原元輔

あしるのひをのよるもみへけり

新古 旅れする芦の丸やの寒ければ

經 信

新後 かかり火の光しうすく成にけり

後光明寺寺前白

續後 よを寒か片しき作る衣手の

田上の河に千鳥啼なり 津守國助

〔長明方丈記〕粟津の原を分つ、蟬丸の翁が後をとふ
らひ田上川をわたりて猿丸太夫か暮を尋ぬ 城國なり都
名所圖會に
見えたり

勢田橋 志賀郡栗太郡の界也小橋長サ二十三間大橋

長サ九十六間中島あり高欄葱寶珠銘は造替毎の年號
を鐫す〔拾芥抄〕本朝大橋は勢田。宇治。山崎〔三代實
錄〕貞觀十一年十二月四日勢田橋燒ると云々一名青
柳橋和歌には勢田の長橋或はから橋といろさの橋と
も詠り

新古 眞木の板も葎生はかり成にけり

匡 房

新後 湖のうみや霞てくる、春の日に

幾世へわらんせたの長橋 爲 家

風雅 御調物絶すそなるあつまの 兼 盛

新拾 さい波やうち出てみれば白妙の 惟 賢 上 人

夫木 朝明空に三上の山みへて 長 雅

抑此橋は帝城の要港にして古來騷擾の時引事たびた
びなり保元平治治承元暦の戦ひ承久元弘應仁の亂み
な此橋を伐て黒津供御瀬に軍する事數くありむか
しこゝに勢田氏とて洪水を防ぐ術を得し武士あり
後堀川院安貞年中に賀茂川洪水して洛中溺死の者
多し其時勢田判官爲兼が代なりしが勅をうけて家法
をもつて河水を防ぎ治む天文永祿の記及び太閤記に
勢田掃部助と見えたり其後家廢衰してより信長公の
時甲賀武士山岡對馬守同美作守の一族勢田の城に籠
る明智光秀叛逆の時此橋を燒落して光秀に従はず其
後秀吉公の代に淺野彈正杉原伯耆守など城といふ
或記に曰唐人此橋を通る時外國にも又比類なし小國
には過分也と賞じて廣輿記に書記しけるといひ傳ふ

田上不動寺



勢田 沙島風帆帶夕陽夕陽人影與橋長
勢田 勢田磯網東山月一色江天兩景光
夕照 露しくれり山となくすき來つ

夕日のわたるせたの長はし

秀郷祠

勢田橋東爪にあり俵藤太秀郷の靈を祀る傳
云秀郷姓は藤原にて房前公より六代の孫村雄の子也
大和國田原といふ所の産なりしが其後轉じて俵の字
を用ゆ 朱雀院の朝平親王將門誅伐の時軍功有て鎮
守府將軍に任せらるこれより已前延喜八年勢田の湖
中に龍あり又三上山に蜈蚣あつてかの龍これが爲に
惱さる一日秀郷勢田橋を過るに龍出て橋上に蟠る少
しも怖れずして其上を跳超る龍其勇威を感じて忽然
として人に變じ己が愁ふる所を語り蜈蚣を亡し給は
れと願ふ秀郷許諾して蜈蚣の出るを窺ふてこれを射る
に一二の箭中てしるしなし第三の矢に唾を塗てこれ
を射て遂に滅す龍神大に喜び秀郷を湖中の龍宮に誘
引し厚く恩を酬し十種の寶器を贈る

太刀。鎧。旗。幕。卷絹。鍋。俵。庖刀。鐘。
心得童子壹人

秀郷はこれを得て還り釣鐘は三井寺に寄附し太刀
運來矢と 赤堀家の重寶となる 後世昔浦の城主佐々木
家傳來す又俵卷絹は共に取用て盡期なし後人謬て俵
の底を叩きしかば小蛇出て再び殺出すとなり此事古
來より人口に膾炙すれば茲に載る其證 詳ならず
龍神祠 同所西の方にあり兩祠俱に南湖院守る諺云
勢田の橋の下は龍宮城也橋の半の流れ山州宇治橋の
三の間になかれ出て比類なき名水とて秀吉公伏見御
在城の時三の間の水を汲しめ茶の湯に用ひ給しとい
ふ又近江の國主佐々木蒲生氏此橋を往來の度毎に金
の掃子を壹本つゝ龍神へ土産として投入られしとい
ひ傳ふ南湖院雲住寺は天文年中の開創淨土宗本尊阿
彌陀佛は慈覺大師の作也

湖水和歌の名所湖邊に七十餘所あり何れも古詠多
し
糠千 風渡るにはの海空晴て 前關白太政大臣
同 さい波やには照あまのぬれ衣 爲 氏
同 油かせさむくうたぬ夜しなし
同 にはの海や汀の千鳥聲立て 龜山院

風雅

にほの海霞てとなき朝明に

前中納言有家

新柳

月影もにほてる浦の秋なれば

爲 家

新古

湖の海や月の光のうつるへは

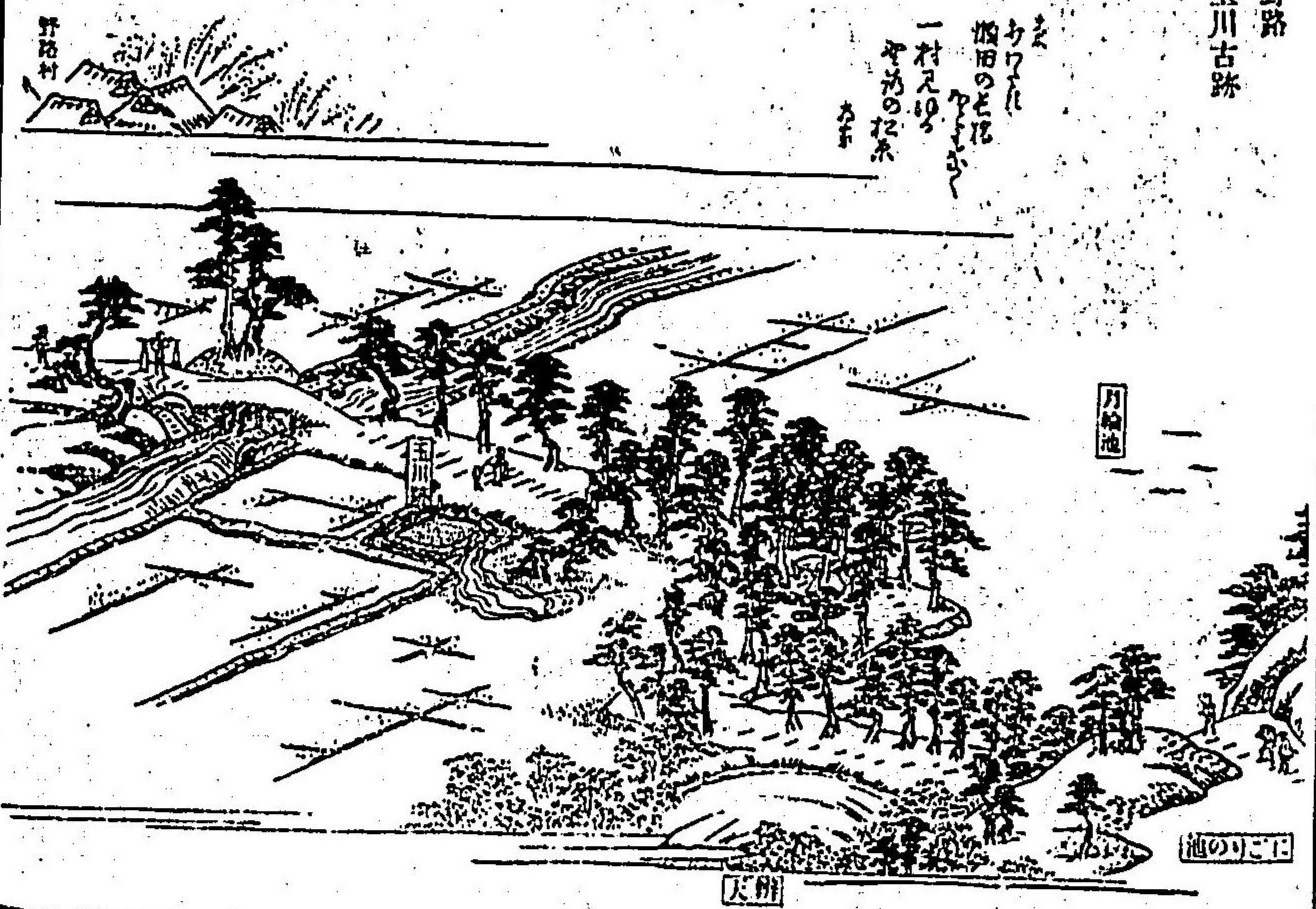
家 隆

家集

雲の浪烟の波や散花の

後 京 極

湖水の一名湖の海或は淡海大宮にちかき江として近江
といひ又は琵琶湖といふこれは形によつて號る也東
西十里南北二十里堅田より勢田に至つてせまく琵琶
の鹿首に似たり勢田より宇治に至つていよ／＼細け
れば海老尾にたとへたり柱には竹生島あり都て山谷
の瀧り八百八川勢田の下流は供御瀬黒津南郷を歴て
巖石高く登て兩岸の狭きを鹿飛といひ白浪漲り落る
所を米溜といふこれを過て宇治に至り淀川に入難波
より大洋に會す湖水の名産多き中に鯉鮒江鮭鱒鮎鮒
勢田鰻堅田鰻水魚は内膳式に出て供御と成其外鮓水
鮭蟹蛸泥鰍なを數／＼あり此湖水を圍む水郷五百餘



六玉川の中
野路ノ玉川



法橋中和
印

山石
江萩
紀毒
印花



村佐々木百萬石みな琵琶湖の潤ひ也ひかし孝靈五年一夜に地裂て湖と成同時に富士山現すされば不二禪定するに近江人を先達に勸しむ善積一郡は已に湖となりて今はなし古來より謠にいへども日本紀古事記にも見えされば慥ならず總じて河流の水源は細くして山谷の中より落る家語に孔子子路に謂て曰夫江は岷山に始て觴を濫ひはほとなり此勢田川はそれにはあらずして水源渺々として古來我朝たいみづらみと稱するものは此琵琶湖にして三國に又ならひなし

建部神社 勢田にあり〔延喜式〕名神大當國第一宮と稱す此地の生土神例祭四月中旬の日〔祭神大己貴命〕相殿妃宮 天武帝白鳳四年の鎮座也〔三代實錄〕貞觀九年七月十一日從四位下を授くと云々

月輪池 月輪新田にあり大龜川の東に池二ツあり左の方なる池の中島に辨天祠鎮座す

野路玉川 野路の里西の端にあり道の傍に長サ二間半許巾一間半の埋れし小池の跡ありこれなん玉川の古跡といふ六ツ玉川の其一なり

千載 明日もこむ野路の玉川菘越て 俊頼 朝臣 色ある波に月やとりけり

野路篠原 土人野路村といふ古來和歌の名所 安藤門院 四條 玉葉 打しけれ古郷思ふ袖ぬれて 行きき遠き野路の篠原は 式子内親王 續古 霞ふる野路のしのはらふし作て さらにも都を夢たにも見す

ひかし兵衛、佐頼朝卿伊豆國蛭小島を出て旗を上給ふ時佐々木四郎高綱都のひかし岡崎といふ所に住けるが今度吾妻へ下らんとて發足しけるが此篠原にて足を痛めつかれなんぎなる所に馬を引て來るものあり高綱ちかづきよりてそれがしは都のものにてまた初旅なれば足もつかれたり野洲川のむかひまで其馬かしてんやといへば馬主聞てさらばあの川のむかひまでかし申べし川をわたり給はらばおろさせ給へと約束し馬をわけてけり高綱心に思ふやうもはや此馬我もの也と嬉しく思ひ川をばやすくとわたりける馬主約束の所也早くおろさせ給へとて後に付て來る高綱鞭を打て逸足を出し駈ければ馬主大に腹を立てあれれ馬盗人よとて喚叫んで追かくる既に野洲堤に

して跡先は朝霧深くして人陰も見えずこゝにおり立て馬主殿に馬かへさんとて立寄引ふせさし殺して其馬に打騎關東へ下りこゝかしこの戦ひに勝利を得て遂に頼朝卿天下を取り勳功を賜はる時佐々木高綱は近江國を望て申うけ頼てかの馬主が後を尋ね其縁の者に多くの寶をやり又寺を立て懇に跡を弔ひ厚く作善して寺領あまた付にけり

矢橋 勢田より北一里にあり大津松本へ一里の渡口也初めは年歴久遠にしてしれず勢田の橋軍陣の時此渡口に關所ありし事舊記に見えたり今芝田氏渡船の

矢橋 釣竿手熟白頭翁 辛苦客船西又東 相國寺 林長老 幾度風帆歸去後 呂公榮達一盃中 近衛關白時熙公 近衛關白時熙公 打出の濱をわとのおひ風

此浦も淡海八景の其一にして風景斜ならず向ふに比良四明の高根日吉の神社戸津坂本の人家志賀浦唐崎の松打出の濱大津粟津の城粟津原まで残りなく鮮に見えわたりて風流の勝地也

鞭崎八幡宮 矢橋にあり此地の生土神なり例祭四月初卯日神主紀氏護る〔祭神應神天皇〕左神功皇后右武内大臣〔社傳〕天武天皇白鳳四年二月十一日大 中臣清麻呂 勳を奉てこゝに勸請す其後建久元年十二月三日右大將頼朝卿御上洛の時此矢橋に於て馬上より鞭をもつてあの神社はいかにと尋給ふ浦人答てこれこそ八幡大神也と申上る右大將即下馬有て再拜し給ふ故に鞭崎の號あり同四年八月頼朝公卜部兼藤に命して社壇再興の事神社啓蒙に見えたり〔攝社〕神明社。天満宮。子守勝手神。山王祠。蛭子祠社頭に古跡あり除難井。安堵松。勅使前。ノマへと云ふ白森齋殿 祀りてイモト、と云ふ

石津寺 矢橋の渡口より一町斗南にあり湖耀山と號す〔本尊藥師佛〕初めの本尊は傳教大師比叡山に於て根本中堂を建立のとき試として一木二株の本尊を作りたまふその一株なり後世元祿年中江府東叡山中堂を建營の時此本尊を公命によりて上野に遷す又初め延暦寺を草創の時大巖の絶頂より投落す其石此所に

矢橋 渡口場

ま

の波や

夫橋の舟は

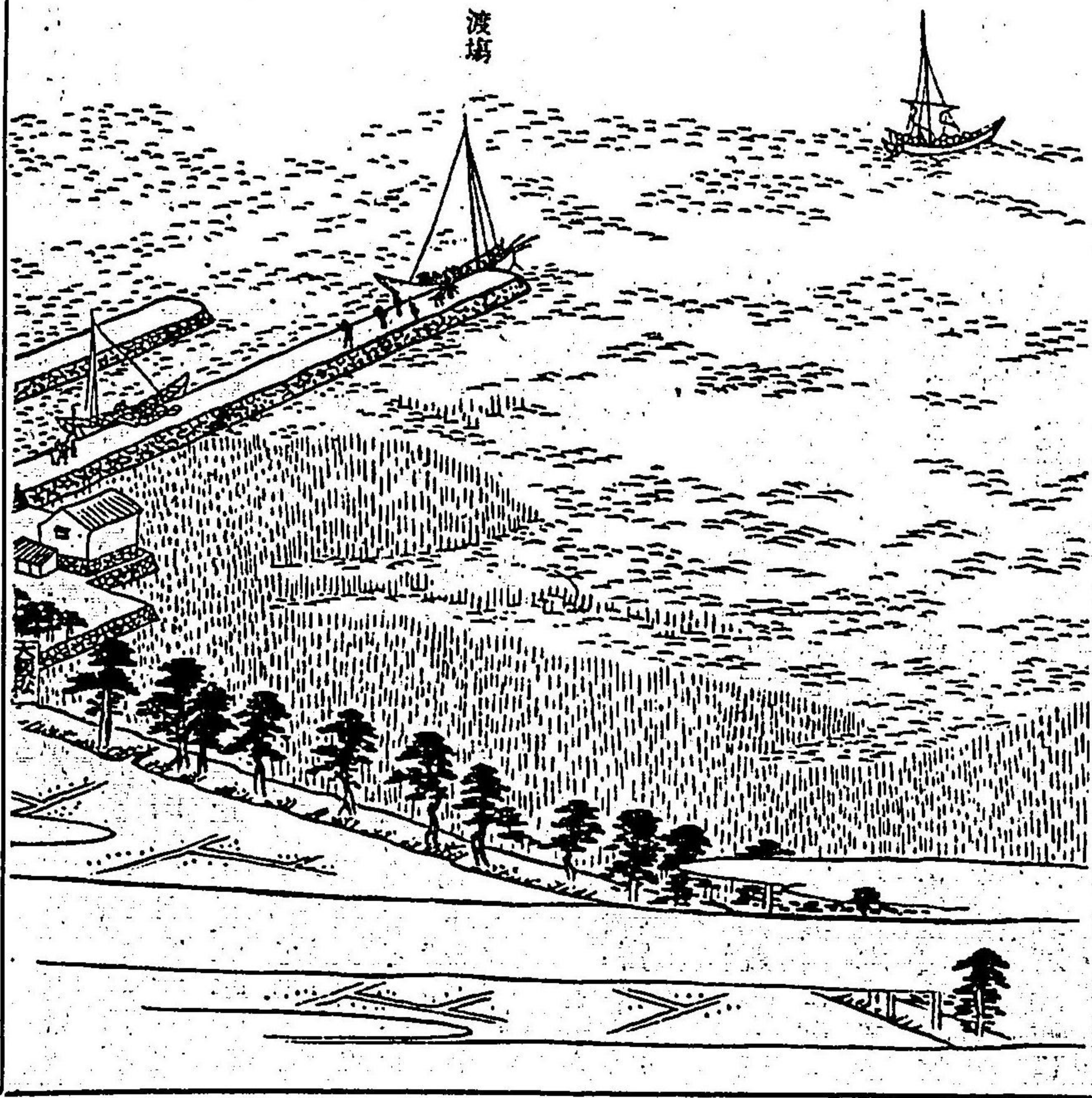
出の舟小

のまをなれど

いそく舟人

公朝

渡場



奇松

湖照や

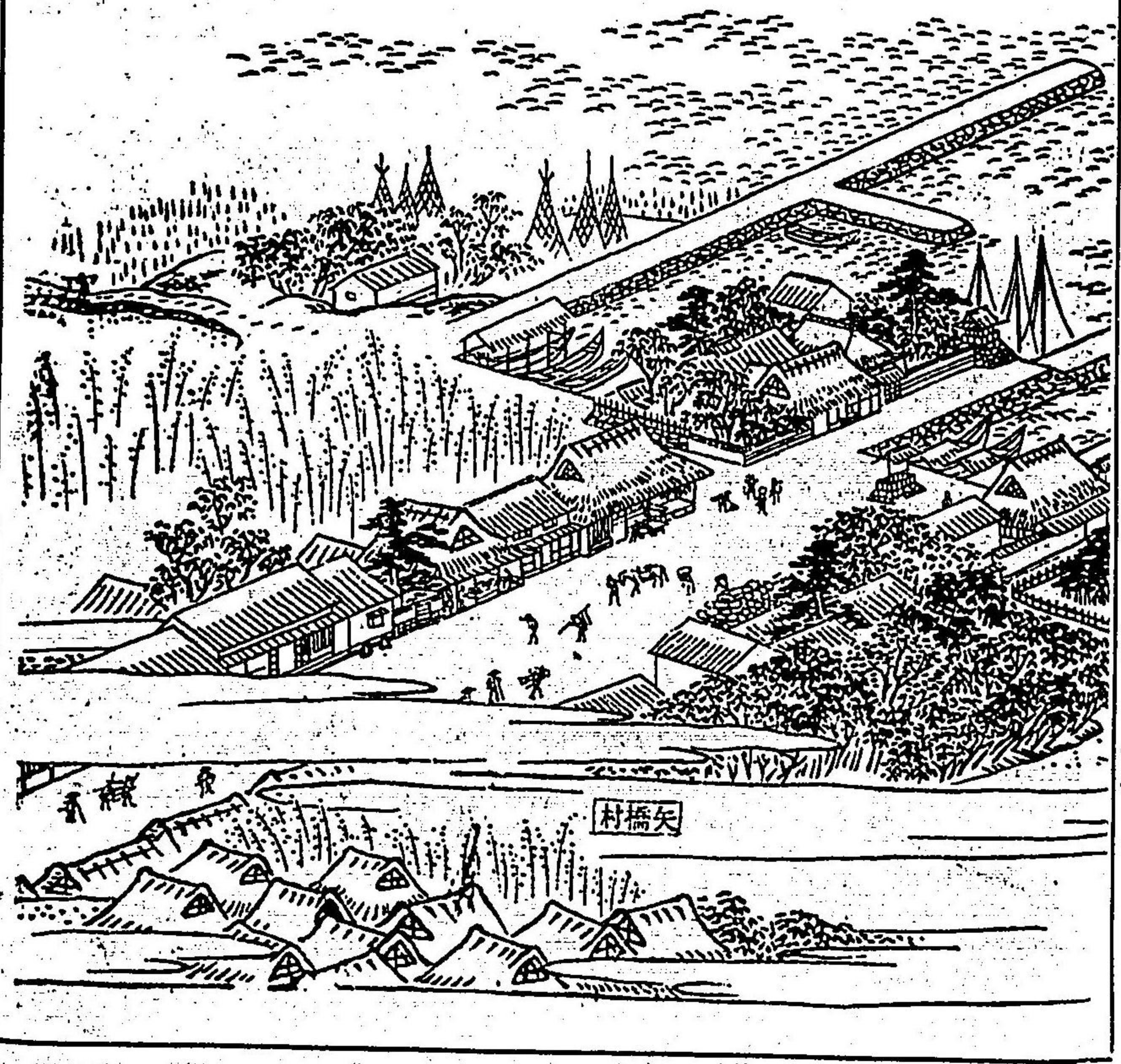
夫橋の波

とる舟と

いそく舟

すこの橋

兼昌



鞭崎
八幡宮



止るによつて石津寺と號す

石亭 栗太郡山田にあり矢橋より廿町許北草津驛札
場より三十町許西の方なり

山田渡口の村中に木内小繁とて家久しき村翁あり此
人生得若年より和漢の名石を好んで年歳諸國より聚
めこれを統ぶ事數十年に逮べり住屋の軒端風流にし
て庭に松櫻を樹いさゝめなる書院に石談より外雜話
を禁ず席上より遙に見わたせば湖水淼茫として日枝
の高根唐崎の松真野壁田志賀の都の跡湖てる沖には
山田矢橋のわたし船片々としてみな此亭をもてなす
かと思はる石は神代の勾璫をはじめ我國諸州の産人
の國の産奇石化石天狗の爪水入の紫水晶品まであるは
臺に飾り又は小筥に入れて錦を敷て塗籠に家藏する事
都て二千餘石ありとぞ所謂晋の石鼓を叩き陶潛が醉
石に臥李徳が醒石に起て月に日に朝に夕にこれを愛
す海内其名高く四方好事の輩費となく賤となくこゝ
に怨を枉て數の石を見る事多し予も巡行の序に立寄
て石を觀る人の員に入りぬ和漢の名石あまたにして

山田石亭翁は
古今の名石家にして
奇石怪石數品を藏て
都て二千餘種ありこゝ
には其千の二三を圖
するのみ也海内の好事
こゝによりてかれを觀
これを知し又他邦より
も持來りて互に論ずる
を樂しむとす左傳に師
曠が石能言は此石亭
の家寶なるこゝ



筆墨に盡難し故に見る所の二三をこゝに圖するのみ
石部まで二里半七町驛中に札の辻あり右へ曲れば東海道なり直に行は木曾海道中仙道名護屋道也矢倉草津馬上の鞭を名物とす

紀行 こよひかはる草津の黒の旅まくら 爲 村 痢
むすひしなれぬ露をいふせき

立木明神祠 宿中にあり草津矢倉の生土神とす例祭四月三日神人小野氏別當普賢院『祭神』和州春日明神に同じ社傳云神護景雲年中春日神鹿島より影向の時此地の立木の榊に姑く遷座ありて後和州へ移り給ふ

常善寺 同驛中にあり成菩提院と號す宗旨初は法相中古眞言今淨土宗京師知恩院に屬す『本尊阿彌陀佛』座像長三尺餘脇士觀音勢至御厨子の扉に四天王の像を圖す寛平年中巨勢金岡の筆なり又厨子の後の板面に阿彌陀來迎の相を畫く莊嚴微妙也〔寺説〕開基良辨僧正天平七年此地に止宿の時夢に白衣の神人來つて告て云こゝは佛法弘通の精舍也一梵刹をいとむべ

しと云終つて覺ぬ故に一字の淨刹を建立して道場とす其後春日神鹿島より來現して暫くこゝに鎮座し給ふ此時は神護景雲元年十一月十七日也 光仁帝寶龜八年天下大旱勅によつて請雨あり中興興正菩薩當寺に住して布薩戒を貴賤に授くこれより布薩の事世に廣くなりて後世布薩を訛て草津と呼ぶ延徳年中足利九代將軍義尚公當國釣村の館をこゝに移し當寺を再興ある其時の地藏尊今に安置す什寶に田村將軍の寄附し給ふ書寫の大般若經三十卷はかり有後世補寫したるか建仁又は天福の年號見ゆる立木の社内にも此經あり後に配分したるならん當寺書院名高く庭は細川三齋の好といふ

奇花は山田草津邊の名産にして漢名を唯阿草花を野薔花といふ六七月の頃に花を摘んで紙に染もやう染の下繪に用ゆ萬の花は朝日かけに咲を此花は月影に咲けは月神といふ又露草とも呼ぶ



し給ふ駒井氏一軸とし家藏とす
化石之證見琅耶代醉編湖東石亭所錄之雲根者品類有數屬者近江國栗本郡草津驛舍長駒井某者持栗樹化石來而丐其名且記之方今獲審觀之其高二餘尺斧削痕存而不煩瑣琢自然成懸崖層磴之形峭壁巖峰之勢尤足愛翫焉淵明栗里醉石之名何若栗本栗石之奇不啻悅目而適心而已不獨不崩永世寶傳應爲一郡之靈鎮矣今名之以活人之二字蓋粟子其功足以活人石文亦宜襲其德於無窮因書以還之云

寛政甲寅晚秋
前權大納言藤原愛親

近江國栗本郡くりの化石を
そのかみにさかへしくりのむれ木は 從一位實枝
いはとなりて世々にくちせし

活人石 驛中駒井氏の家により高サ二尺餘巾一尺五寸中にて巾少し廣し色は海松茶の如し近隣の弊屋の庭にありしを近き年これを得たり或が云此石栗の化石ならん風土記に上古栗の大樹あり栗太の郡名これより出る今に土中より木葉の朽たる如きの物出るこれをスクモといふ近年此化石の銘を中山亞相公染筆

これは日野家の御詠歌どなん
草津川 常には假橋霖雨洪水には歩わたり也水源は金勝谷より流て末は山田にて湖に入る
灰冢山 目川と梅木の間にありむかし此邊に大木の栗樹あり謠に朝日には湖南に影を横し夕日には伊勢

東海の
吹手
あはれ
さたうけ
うしろ
焼が
もろ
くら



歩倦驛亭退
茲休賣餅家
出門還跨馬
到處鼓吟牙

熊谷立閑



路にうつる耕作の災として焼拂ひてこゝに灰塚を築し
と也其證詳ならず今郡内粟太と書て太の字を本と
よむ恐らくは本の字の訛ならん順和名抄には栗本郡
と書たり

鈎古城 鈎村にあり足利將軍義尚公こゝに城を築て
籠り給ひし所也上洛の時病に臥目川村の西岡村にて
薨す

小野寺 小野村にあり石場山萬年寺と號す禪宗黃檗
派『本尊正觀音』長五尺聖德太子の御作開祖久遠にし
て知れず荒廢の後近世天和年中祐堂和尚再興す

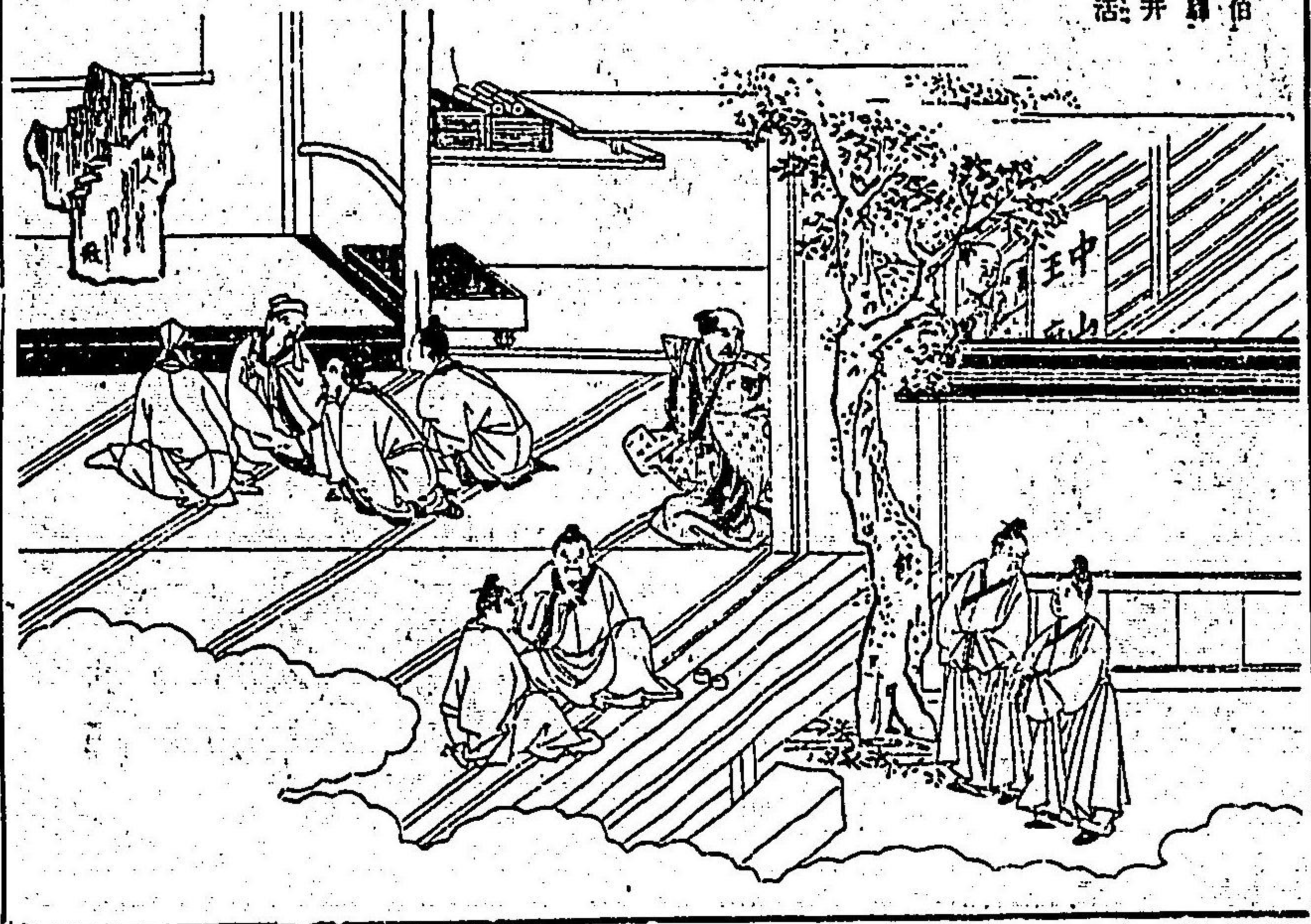
梅木 本名六地藏村也こゝに和中散の藥店三軒許あ
り是齋を本家といふ

粗行 さくらさへちりぬる後の春深み 爲 村 柳

しげき青葉の梅の木のこと

こゝに元和の頃梅の木ありて其木蔭にて和中散を製
し旅人に買ふ本家をせさいといふ其初は織田氏と號
して元和元年醫師半井ト養が女を娶て和中散小兒藥
の奇妙丸等の藥方を授り永く此家に商ふ店前に藥師

珠人伯
東津藤
觀瀨井
氏之活
人石



堂あり本尊は傳教大師の作にして長座像二尺許を安
置す鎮守に稻荷天満宮泉水の中に辨天のやしろあり
庭中に奇石奇樹玲瓏としてゆきゝの諸侯多くこゝに
駕をとゝむ參宮及び吾妻上下の旅客も足をといめさ
せて藥を立て散湯を惠む藥店の側に古松あり枝垂る
により梅木の下り松といふ

三上山 梅木の東北一里許にあり一名百足山といふ

山縁勢田橋に見えたり太平記には比良の高根とあり
山の形士峰に似たり淡海富士といふ

拾遺 ちばやふる三上の山のさか木は、 のふよし
さかへそまさる萬代までに

同 萬代をみかみの上のひくには 元 輔

千載 ときはなる三山の山の杉むらや 藤原季經朝臣
八百萬代のしるしなるらん

新勅 杏なる三上のたけなめにかけて 後京極攝政
いくせ渡りぬやすの川波

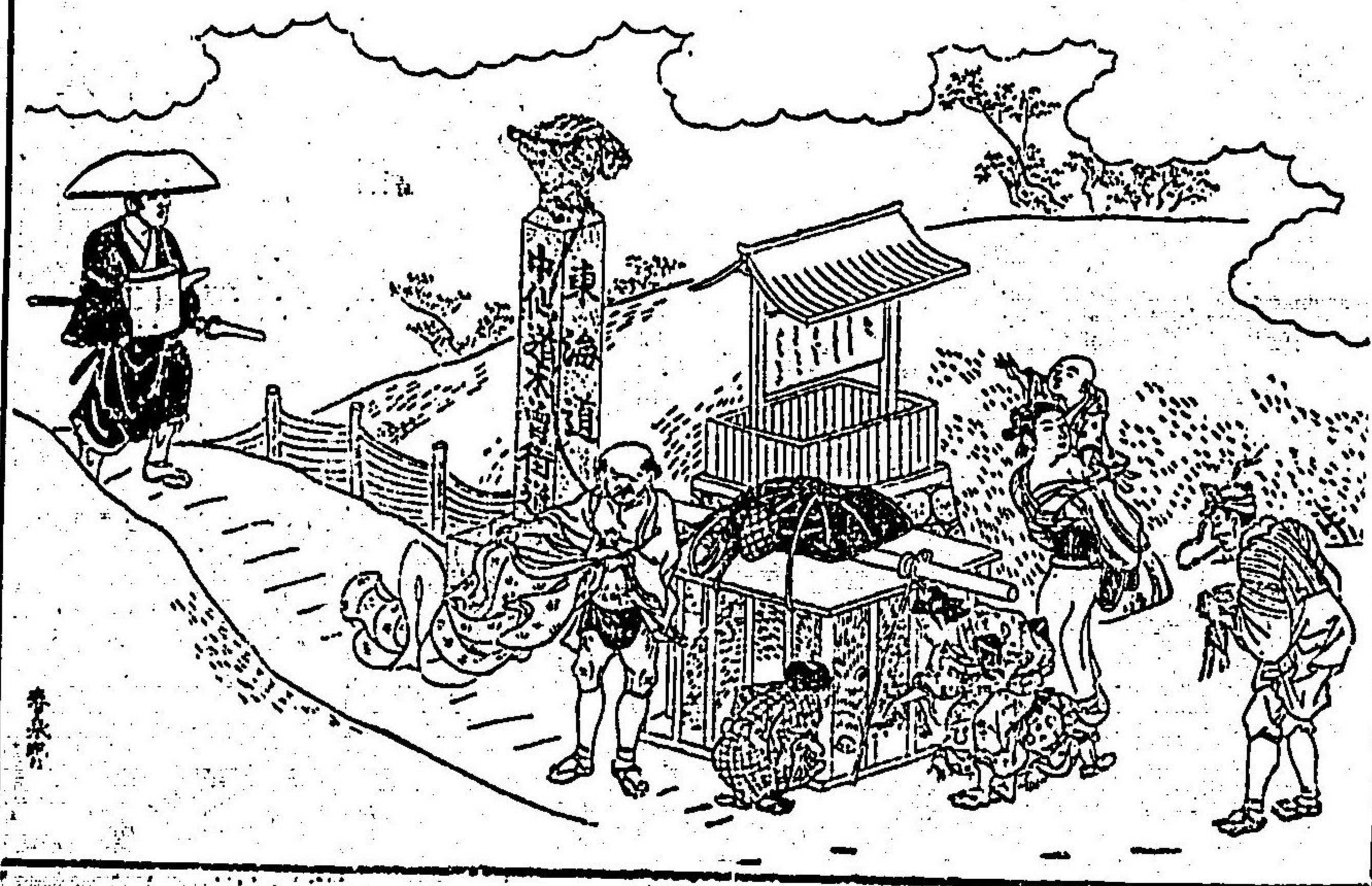
續拾 雲晴る三上の山の秋風に 淨助親王
さゝ波遠く出る月かけ

新後 玉椿かはらぬ色をやりよとて 民部卿經光
三上の山そときはなるへき

御上神社 いにしへは三上山の峰に鎮座す後世麓に

草津
追分

草津から
右へ
曲れば
東海道
直は
岐路に
名陸尾
中山



移す〔延喜式〕神名帳野洲郡九座の内名神大月次新嘗
〔類聚國史〕貞觀十七年授從三位〔祭神伊弉諾尊〕
〔古事記〕開化天皇娶近淡海之御上祝天之御影神
之女息長水依比賣生五柱皇子云々〔社説〕元正
天皇養老年中こゝに鎮座

新後 柳とるみかみの山にゆふかけて 前中納言兼仲
頼るひつきの猶やさかへん

承元年中親鸞聖人越後國に左遷の時鏡の宿に泊り給
ふに三上明神老翁と化して聖人の高德を仰き法名を
曉覺と授り給ふ事舊記にあり櫻山三上山の麓に南
櫻村北櫻村とてあり當時廣幡家の領也とぞ

名寄 さくら山花咲白ふかひありて 旅行人も立とまるなり
同 三上なるさくらの山は花盛 匡 房
ちるてふことばあらしとておしふ

新善光寺 高野郷林村にあり淨土宗鎮西派本尊三
尊彌陀佛長壹尺五寸二菩薩壹尺信州善光寺如來と
同林也〔寺説〕仁治年中此地に小松左衛門尉宗定とい
ふ武士あり無常を觀じ極樂往生をつねに願ひ信州善

八十年前開く所也下道はむかしの本海道にして左に
横田川の流あり
夫木 横田山いしへ河原の蓬生に 長 明
秋風さむみ都戀しも

石部鹿鹽上神社 驛中田間に鎮座す延喜式内也今
兩社として下の社を吉彦明神上の社を吉姫明神土人
虚空藏と稱す祭神倭姬世記に見えたり驛中兩側に分
て兩社を生土神とす例祭四月上巳日

金勝寺 金勝村の山頂にあり石部より南一里許にあ
り聖武帝の御願にして良辨僧正の開基也後世類廢し
て僧房一宇二王門あり

阿彌陀寺 金勝村にあり金勝山と號す淨土宗惣して
て押に安く動くなりこれ當山の奇異也
〔震巖〕當山にあり十人力にても動ざる岩たゞ一指に

光寺に四十八ヶ度詣しある時參籠しける夜の夢に生
身の三尊佛現れ右の手に施無畏の印左に刀劍の印二
菩薩も共に寶冠を戴き般若の印をむすび端嚴微妙に
して光明赫々たり是分身の如來也夢さめて歡喜し感
涙とすまらず寺僧も同夢を見しかば分身の佛像を宗
定に贈るそれより故郷にかへり一字を建て新善光寺
とぞ名づけたり

石部

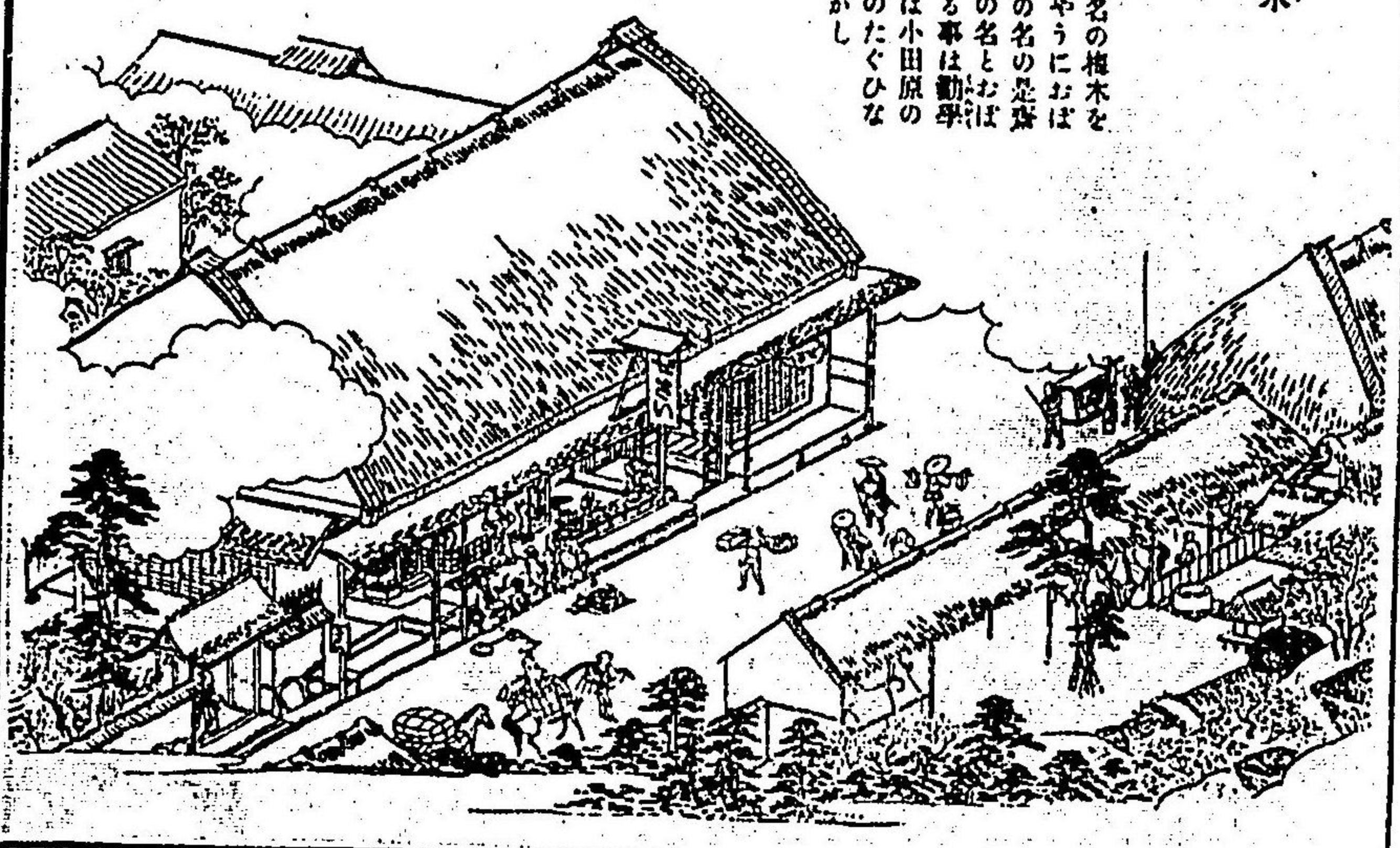
水口まで三里十二町驛の端に金山村あり中古銅
山として坑口あり石部の金山といふ今の上道は

目川とは村の名
なれど今は名物
の菜飯に田菜豆
の菜飯に田菜豆
何國にも目川の
店多し豆腐百珍
の一種さるも
かれが全盛せる
べし



梅木

所の名の梅木を
氏のやうにおぼ
え家の名のは
を源の名とおぼ
えぬる事は動學
撰成は小田原の
外郎のたぐひな
らんかし



此山中廣くして金勝七谷といふ幽谷閑寂の地也『本尊阿彌陀佛』文明十八年宗真上人の建立足利義尚公尊信ありて 後土御門院へ奏し勅額を賜ふ天正九年の兵亂に荒廢に及ぶ

西寺 甲賀郡西寺村にあり石部より十餘町南也阿星山常樂寺と號す坊舎の古礎多し『本尊如意輪觀音』鳥佛師の作 聖武帝の勅願良辨僧正の開基也佛殿三層塔樓門金剛力士を安す堂形佛像古代の作にして奇雅也

東寺 同郡東寺村にあり阿星山長壽寺と號す當寺の西南に阿星ヶ嶽といふ高嶺あり故に兩寺共に山號とす『本尊地藏尊』行基大士の作 聖武帝の勅願所にして古代の佛殿今に存在す什寶多し兩寺共にいにしへは伽藍魏々として僧房多し原 聖武帝信樂宮に遷都の時鬼門守護の寺也今信樂谷に宮城の古蹟あり古礎古瓦多し
『大石塔』堂前にあり高サ一丈五尺五輪の形にもあらず古雅也 聖武天皇の御骨を藏めし所といふ

金勝山

金勝守山の窟岩は數十人のちからをもつて動せざるに動ず身を淨めて僅に指頭をもつて押せば忽ち動くなり

探險録に曰宋の政和年中阿星縣より一巨石を致す高サ二丈餘千夫これを昇ぐも動ず成人の云これ神物也よろしく安んずべし故に關して慶長年間と號して金勝をもつて其上に拵て助すに須期にして苑中に至るこれらの類にや比せん



『鬼催』正月十五日前三夜が間村民佛殿の内に集り小童二人は一ヶ月潔齋して赤鬼黒鬼の面を被り鬼の舞といふ式あり佛前に於て大なる齧口を打ならして鬼を追ふ也近隣より群參する事多し
『權櫻』堂前にあり右大將頼朝より江州檜物庄を寄附せられし事寺記にあり又已前の古詠あり

新六 あふみなるひもの一里の傳さくら 衣笠内大臣
帖 花をはわきて折る人しなし

美松 街道筋平松村山中にあり又松尾明神祠あり仁壽年中藤原頼平に神託ありて山城松尾の神をこゝに勧請す平松の號これより初る美松と號する事は松の葉細く艶ありて四時變せず蒼々たる松の高々小大あり大樹は根より四五尺までは株常の雄松の如しそれより枝々數十にわかれ近く視れば蓋の如く遠く眺めば側柏に似たり始皇の封松李白が南軒の孤松など雲霄を凌の靈樹に異ならず葉は雌松株は雄松其雌雄分明ならず縁落て同姓生ず此山中に際て悉同木也隣山は常の松にして美松一株もなし又他所へ移し或は鉢

平松山美松

平松山美松の松は葉細く艶ありて四時變せず蒼々たる松の高々小大あり大樹は根より四五尺までは株常の雄松の如しそれより枝々數十にわかれ近く視れば蓋の如く遠く眺めば側柏に似たり始皇の封松李白が南軒の孤松など雲霄を凌の靈樹に異ならず葉は雌松株は雄松其雌雄分明ならず縁落て同姓生ず此山中に際て悉同木也隣山は常の松にして美松一株もなし又他所へ移し或は鉢

平松山美松の松は葉細く艶ありて四時變せず蒼々たる松の高々小大あり大樹は根より四五尺までは株常の雄松の如しそれより枝々數十にわかれ近く視れば蓋の如く遠く眺めば側柏に似たり始皇の封松李白が南軒の孤松など雲霄を凌の靈樹に異ならず葉は雌松株は雄松其雌雄分明ならず縁落て同姓生ず此山中に際て悉同木也隣山は常の松にして美松一株もなし又他所へ移し或は鉢



植などするに程なく枯て育せず和漢松の部類を考ふるに、いまだ此類を聞ず遠近こゝに來て初て視る人賞嘆せずといふ事なし是風土の奇也

夏見 村の名とす和名抄には夏身と書す平松の東にあり山水を窺にとり水車に唐操を仕かけ人形を働せて四時に旅人に心太を商ふ又名酒櫻川といふあり

日雲靈蹟 三雲村の神祠をいふ 垂仁天皇の時大和國より天照太神伊勢へ遷座の時こゝに四年か開鎮座し給ふ此地へ瑞雲緋の如くたなびきしより緋雲宮と稱し後に日雲とし又後世三雲村と訛れるなるべし

妙感寺 三雲村の南妙感寺村にあり禪宗開基勅諭神光寂照禪師俗姓は萬里小路中納言藤房卿當寺荒廢の後中興仙峰竺頂和尚本尊千手觀音長七寸佛師定朝の作 後醍醐天皇より藤房卿へ給ふ又什寶に藤房卿の和歌香合杖等あり

萬里小路藤房卿終焉地 當寺に古墳あり建武二年後醍醐帝に諫奏ありしかとも御許容なく終に遁世し給ひ所々遍歴の事太平記及び吉野拾遺に見えたり老

を祭る『關伽井』本堂の西北にあり 『百傳池』本堂の傍にあり『思川』岩根山の麓に東より西へ流るゝ川をいふ古詠あり

大友皇子身まかりけるとき 萬葉 百傳の岩根の池になく鴨を 夫木 くちなしにいかて匂はん百傳の 同 あしたつのさある岩根の池なれば 草庵 かくとたにいほれの池にせく水の 深きにつけてもらしかねつく

『岩根山』此山の最高を十二坊嵩といふむかし十二坊ありて其古礎あり山嶺より遠望は彦根の城。竹生島。多景島。沖の島。白石又は比良の峰。日枝の高根。唐崎の松。山田。矢橋。勢山橋。石山寺。谷上。甲賀山。飯道寺まで隈なく見えわたたりて風光いみじき佳境なり

詠藻 行末を思ふも久し君か代は 家 隆 岩根の山の峯の若松 後 成 吹出るいはれか峯の麻かつら 春は過れとくる人もなし

後此山へわけ入帝より賜りし大悲の像を本尊とし此寺をいとなみ一首の歌を詠給ふ

世のうさをよそに三雲の奥深く 藤 房 卿 てる月かけや山すみの友

かく詠してこゝに錫をとめ給ふ事數十年に逮り遂に康暦二年三月二十八日遷化し給ふ年八十五歳諡忌の時は今に萬里小路家より使者ありしとぞ聞へし

横田川 田川村の東にあり横田川村の畧語也水源は甲賀谷の諸流會し末は野洲川といひて湖水に入る 『獄門岩』川岸路傍にあり相傳ふ康平六年奥州征伐の時安部貞任同重任二人の首京都へ登る時役夫こゝに憩ふといふ

『梵字石』道より山上百歩許にあり相傳ふ傳教大師又『梵』の二字を自書して鐫給ふとなん 岩根山善水寺 横田川の北岩根山にあり天養宗本尊藥師佛 脇士日光月光十二神將四天王俱に傳教大師の作

『大師堂』境内にあり元三大師を安す『鎮守』六所樓現

夫木 久しきのしるし成へし色かへぬ 實 政 いはれの山の松のみとりは

〔寺記〕それ當山は 元明帝の勅願にして和銅寺と號す厥后延暦中傳教大師比叡山根本中堂を營給ふ時此山の良材を伐て横田川に筏して叡嶽に達せんとす其年早魃して河に水なし大師登山して見給ふに百傳池に梶葉涌出たり其葉に良藥金留の四文字あり大師即池中を採給へば開浮檀金一寸八歩の藥師佛を得たりこれを本尊として請雨の法を修し給ふ河水満々として良材みな坂本常麻浦に着せり大師こゝに梵刹を創し勅を奉て三尺の藥師佛を作り金像を體中に藏む台嶺の宗風にして醫王善近の靈水あればとて善水寺とは號たり

水口 土山まで二里半十一町驛内二十餘町裏町十五町名物は葛籠細工の店多し殊に釜敷をよしとす茶人紹剛利休などの好て作らせけるとも也むかし大岡山城に長東大藏少輔正家居城す故有て廢し寛永の初今の地に御再營ありて同十五年より御番城と成其後天

和二年加藤侯累世居城ある

水口神社 驛内西の方にあり延喜式に出城下の生土

神とす例祭四月上申日祭神日吉山王大宮勸請

美野部天満宮 城内にあり社傳云菅公筑紫御左遷

の時四人の公達も四所に謫遷し給ふ其一方秀才淳茂

卿をこゝに祭る此卿十六才の御時湖水に臨ませ程な

く此美濃部の郷に著せ給ふ此裔孫今關東に多し又湖

水を渡せし船人の子孫も今美濃部村にあり船頭の家

として傳れり

蓮華寺 驛中南の方にあり宗旨高田派水口山太子堂
と號す勢州高田専修寺の掛所とす初は台宗天正年中
高田堯惠上人に歸依し今宗となる「本尊阿彌陀佛」長
三尺聖德太子の御作寺記云皇太子巡視の時こゝに靈
水洋溢すこれ有縁の地也とて一字を創し太子南無佛
の像二軀を刻て安す靈水をかな池といひて水口の號
こゝに出たり其後神護景雲の頃惠美押勝退治御祈の
爲に三層塔を創し給ふ又足利義政公も當寺に入らせ
夢想國師の墨跡兆殿主の瀧見觀音或は將軍自筆歌書

を賜ふ今に傳りて什寶とす又小堀遠州こゝに來り庭
中を造る今廢して石のみ存せり

大岡寺 驛の東大岡山の半腹にあり天台宗龍王山と

號す「本尊十一面觀音」長三尺二寸行基の作胎中の像
一寸八歩堂上の金牌大岡寺は林丘寺緋宮の御筆也鎮
守は諏訪明神を祀る

〔寺説〕當寺は天武天皇白鳳年中の建立にして甲賀三
郎兼家の守本尊といふ此甲賀三郎勇猛にして山野に
獵し山神大蛇を斬殺し其怨念によつて蛇身となり久
しく苦惱せしが遂に大悲の功力によつて元の人間に
立歸り成佛せし由を記せり又門の標石に鴨長明舊跡
と鐫す

〔長明海道記〕夜景に大岳といふ所にとまる年頃う
ちかなはぬありさまに思ひとりて髪をそりければい
つしかかゝるたびねするも哀にて彼盧山の草庵の夜
曲は情ある事を樂ての詩に感じ此大岳の柴の宿の雨
には何事を貧道の歌にはつ

すみそめのころもかたしき旅れしつ

いつしか家をいつるしるしに

按るに此書のはじめに貞應二年とあり東鑑には建
暦元年鎌倉に下向し將軍實朝に謁すとあり然らば

十三年後也方丈記に建暦二年醍醐日野山の奥に山
居し方丈記をかゝれし事顯然たり且海道記の文章

の風調相違にして他人の作也其疑書を證にして長
明の舊跡と石を立る事は甚謂なし又按るに百練抄

に天仁二年二月二十五日爲義於近江甲可郡一尋
得義綱於大岡寺出家二十九日義綱配佐渡云

々此義綱は賀茂次郎也又〔前太平記〕賀茂次郎義綱
虚命を蒙りて江州甲賀山に籠る陸奥四郎爲義勅を

うけて討手とし其日は横田川に陣取軍の手合して
鴨長明と云傳へしものならんか又長明道の記とい

ふものありこれも偽書なり多田滿仲五代の孫伊賀
守從五位下源光行の紀行也惟中が〔續無名抄〕賀茂
長明道の記世舉て長明が作也とおもふはいふかし
き事也夫木集の中ふしの白雲の詠かれこれ數首み

な源光行が東行の詠とす後の歌人考へみるべしと
云々然らば長明の實記は無名抄方丈記此二書の外
正しきものなし

還齡山飯道寺 水口より南一里にあり三太寺村よ

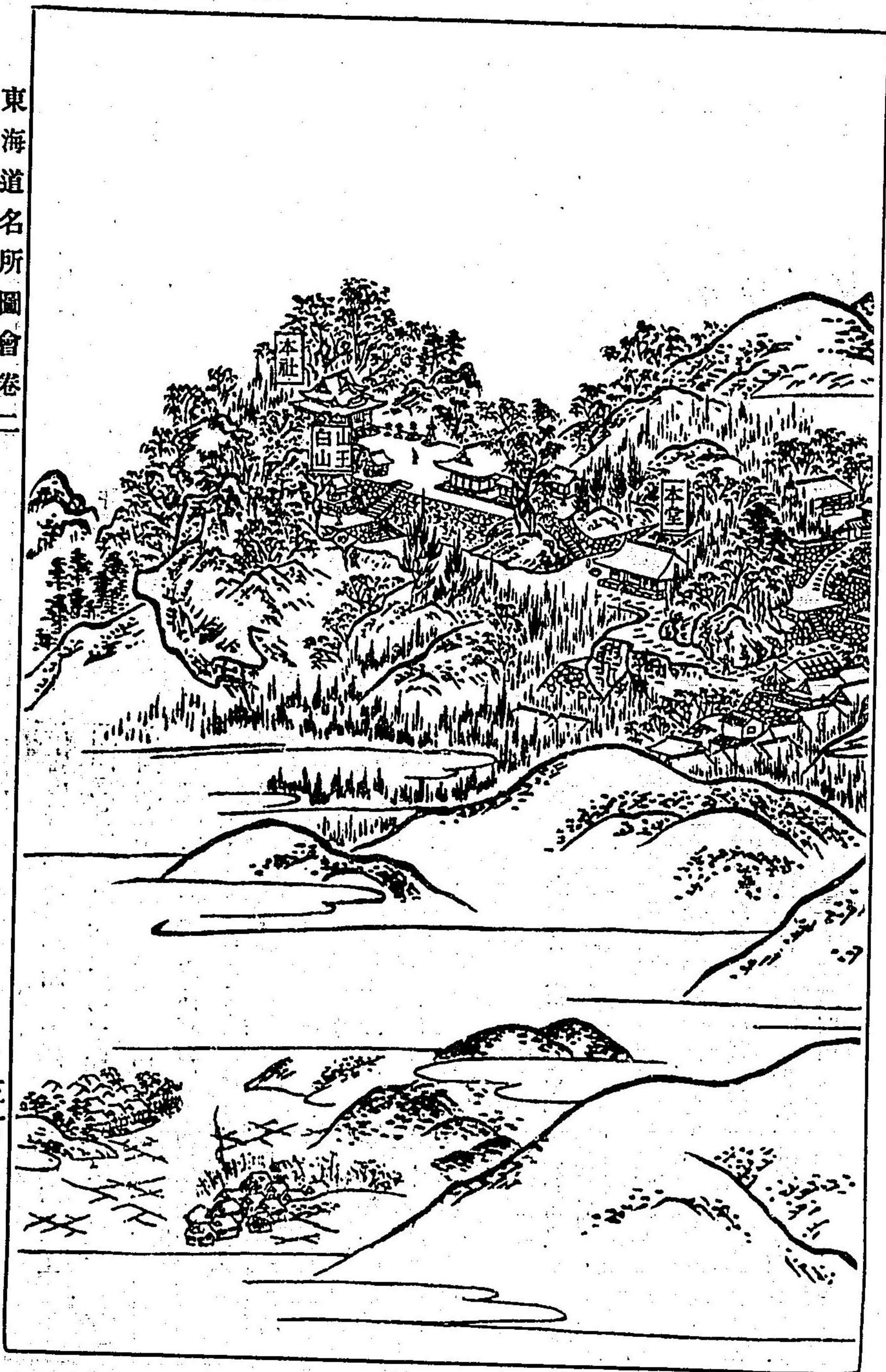
り登る事五十町天台宗日光御門跡に屬す「本社飯道
權現」延喜式神名帳云飯道神社神林熊野三所權現「本
堂」藥師彌陀釋迦十二神將を安す「大師堂」元三大師
を安す

「辨財天祠」當山金剛院に安す此尊像は伽羅木にして
織田信長の持尊也和州信貴山城主松永久秀を此山よ
り織田勢押寄討す其時當山の衆徒加勢して勝利あ
り其恩賞として此尊像を賜り山林の地を賜ふ故に地
主の神とす

「大黒天像」初めは蒲生郡粕長者の持尊なりしを當山
に納めて福祐を祈り諸堂建立に及ぶ此尊像月毎に院
中をめぐるて守護す「山王祠」本堂の傍にあり「白山
權現祠」山王の傍にあり

「藏王堂」山の半腹にあり「末社十八前」當山所々にあ

飯道寺



「影向石」本堂の上「護法石」本堂の北にあり
 「龍池」本社の下にあり「厨伽井」厨伽井谷にあり「鐘樓」南谷に白髭明神の祠あり昔此地より堀出せし鐘といふ「秋椿」水口道の傍にあり「足跡石」影向石の傍にあり「石南華谷」此谷に石南華の大樹多し満花には目を驚す他樹は希なるもの也「道標石」八百比丘の造立なり「山伏落」本社の後に嶮難の地あり當山に悪僧あれば逆に落すといふ
 抑當山の開闢は 元明帝和銅七年八月十五日天童妙相を現じて甲賀郡登嶽に靈雲變遷し影向すこゝに齋宮介といふ人あり熊野權現の靈告を蒙り登山す其告に云飯を盛たる形路傍に見ゆる也とぞかの齋宮介登山するに柳の花飯を盛たる形に見ゆるを道の標として登り影向石の側に熊野三所權現を勧請す故に飯道神社と號す厥后 聖武帝信樂宮に遷都し給ふ時王城の鬼門守護として天平十五年八月南都興福寺の安岐法師登山し伽藍を造立して兩部の靈場とす 文德帝の御宇には飯道神社に位官を授け醍醐の聖寶齋師徒

弟當山岩本坊梅本坊和州大峰に隨身供奉して中興す
 此時九月五日也今に至つて此日笈を負て社前へ渡るを例式とすこれを笈渡しといふ當山の開基は良辨僧正安岐安峯三世相續て住職たり中興は光定大師也
 大師の 近衛院久安年中飯道權現の勅額を賜ふにあり此時甲賀の總社と成織田信長は祈願尊信ありて登山し鳥井坊に寄宿し給ひて神領を寄附ある事古記に見えたりされば此山大峰葛城にならひて山勢崢嶸として老杉鬱鬱たり梵宇寂寥として昔蘇蒼く丹書は霧の籠に空しく見れども神徳はむかしも今も變らずとしられける
 山上庚申 水口より南一里に山上村ありこれより登る事十八町山頂に一字あり瑞應山廣徳寺といふ「青面金剛童子」傳教大師の作岩面に鑄す延暦年中大師比叡山根末中堂を造立せんとて甲賀谷に入て良材を求む其時これを鑄給ふ甲賀谷の一名杣谷といふ又磯之尾といふ民村に大師初て伽藍を建給ふ古跡あり又杣川といふあり末は横田川へ會す

「辨慶背觀石」水口の東一里小里村の左の方山手にあり

「景清力戒石」同所にあり

「義經腰掛石」同所にあり

義朝洗首水

稻川の側にあり參宮の輩忌てこれを吞す右の三石此清水共に後人の云風俗にして取に足らず

「山口重成碑」右の首あらひ水の傍にあり山口志兵衛

重成の墓也慶長中の碑文苦朽して鮮ならず延寶年中に建る所也

「慈安寺」前野村にあり禪宗宇治黃蘗山の末派也後水

尾院御像或は聖德王四十二歳の御像あり林丘寺宮より種々の寶器を賜ふ什物とす

松尾川 松尾村の端にあり一名内白川といふ土山の

田村川を外白川と號く末は横田川へ會す

曙記 君が代の子とせの色に出にけり

松の小川の水の春まで

光 廣 柳

土山

坂の下まで二里半西立場に多賀神社へ參詣道の標石ありこれより行程十一里也宿中に牛頭天皇社あり名物は指櫛又田村川といふ名酒を買ふ家あり 土山や歌にも謡ふはつくれ 附 更

田村明神祠

土山の驛の東にあり驛中東の方の生

土神とす例祭正月十八日鈴鹿祭四月八日「祭神」中央將軍田村麿相殿東の方嵯峨天皇西の方鈴鹿御前「本地堂」千手觀音を安す「末社」稻荷辨天照太神遙拜所「神興塚」西北三町にあり「神寶」田村將軍像左右に二鬼を從給ふ又鈴鹿御前像俱に畫影にして彩色端嚴表補美麗也又玉簾一垂ありこれを慶長の頃國初將軍家より賜はる玲瓏たる名品なり

夫當社鎮座の年歴舊記に所見なし往昔延曆年中奥州安部高丸王命に叛しかば田村將軍追討として駿州清見關まで赴きしがこゝに合戦の時清水觀音靈驗の事あり又一休和尚此邊をゆきゝの時強盜に遇給ふ事勢陽雜記にせるせり又田村の謠曲に田村九鈴鹿の鬼神退治の事を作れりこれらを附會して神祠を建ると見えたり（或が云天正の頃當國安土山に織田信長在城

土山
田村明神社



の時田村川の向ひ今の往還の北に古道ありて双木の松なご少々遣れりこれより田村の社前へむかひ往還なるよし今に里人安土街道といふかの鈴鹿山の鬼神田村丸退治の事年久しく世に云ならはしけるゆる此邊鈴鹿の近郷なれば路傍に祠を建しと見えたり抑田村將軍の傳は續日本紀王代一覽元亨釋書等に見えれば詳に記するに逮はず田村磨は桓武帝の外戚にして忠肝義膽の人也且勇威にして一たび眼を張て怒給へば猛獸も身を縮め四足を蹙む一たび笑給へば幼兒も親みて慈母の如くす面貌赤くして豈美しく關羽の如しされば鬼を従しといふ人古に多しまづ天智帝の御時逆臣藤原千方は金鬼風鬼水鬼隱形鬼の四鬼を従て伊賀伊勢の間に在て王命に背く紀友雄に詔あつて千方を討しむ友雄一首の歌を詠て敵軍へ贈る

草も木も我大君の國なれば
いつつか鬼のすみかなるへき

鬼等これを喰じ感動してみなちりく去にける千方勢盡て友雄に討れぬ役小角は咒縛して前鬼後鬼を

田村將軍
鈴鹿の鬼神
退治の事は
實記あら
されども
久しく世の
人口に膾炙
する事
これ觀音
の佛力
なり
觀音の千の
矢ささか
雨さ成
酒さも
なりて
鬼殺し也



從へ源頼光は四天王を連れて大江山の鬼神を戮し渡邊綱は羅城門に鬼の腕を斬平維茂は戸隠山の鬼を誅す此田村磨は延暦十六年十一月從四位下征夷大將軍に叙し弘仁二年五月大納言右大將と成て逝去す年五十四 天子三日涼閑に入せ給ふ唐魏徵に比して爪牙の臣也古墳は山州山科の南栗栖野にあり音羽山清水寺には坂上田村堂と稱じこは原舊名を高座山又は高座野ともいふ故に高座明神の宣命あり神威靈驗日々に新にして參宮の輩關東關西の旅人立寄てこゝに詣せずといふ事なし

田村川 水源勢州古茂野の山中より流て松尾横田に會し末は野洲川といふ

蟹阪 或説にむかし此坂の嶮岨をたのんで山賊出で旅人に暴逆せしより此名をよぶ姦賊の横行より蟹坂といふ歟又蟹が塔はかの山賊を亡しこゝに埋るならん名物として丸き飴を賣家多し

狂歌 行つかん道を頼むかにやしろ 光 廣 痴
岩の上なは横はひにして

近勢國堺澤村立塲入口に近江伊勢二州の封示あり
鈴鹿山 阪路八町廿七曲一名多津加美阪といふ

拾遺 世にふれば又も越けり鈴鹿山 齋宮 女御
新古 すいか山うきよなよそにふり捨て 西行法師
風雅 下紅葉いろくになるすいか山 能宣 初臣
時雨のいたくふればなるべし

鈴鹿關 むかしはすいか山に關所ありし也時代によりて山崩れ道あれしにより所く變る今の關驛も此關の蹟といふ

千載 ふるまゝに跡たえぬればすいか山 内 大 臣
雪こそ關の戸さし成けり

新拾 ぶり捨てたればこへんすいか山 荒木田氏忠
關やはよほの月も守けり

〔曙記〕今宵はすいかの驛路に御輿をといめらる木の下の雫にぬれくすして假寐の夢路餘寒の嵐にさそはれ曉月の影さえて春の物ともみえず

鈴鹿神社 勢州鈴鹿郡鈴鹿山にあり延喜式神名帳に

片山神社坂下驛中の生土神例祭三月八日

撰後 鈴鹿川ふりさけ見れば神路山 柳葉分けて出る月かけ

五七

鈴鹿社



僕千
 とも
 明方
 ちのた
 天の戸と
 あり出て写
 ぼくとも
 武
 若狭権者



「祭神三座」中央瀬織津媛命。左右に黄吹戸命。瀬織津媛命。相殿倭姫命

「鈴鹿社」祭神内外太神宮天神地祇八百萬神を祀る
「攝社」大山祇命。稻荷。愛宕。頓宮殿。石壇の右の方にあり

齋宮郡行のすゝかの頓宮にて旅の歌よみ侍ける
新勅 いそくともしふはとまらん旅れする 權中納言通俊
廬のかりほに紅葉散けり

〔羅山子神社考〕當社の傳記はむかし 天智天皇御位を皇弟淨見原親王に禪らせ給ふ然るに皇子大友軍を催して清見原宮を襲給ふ皇弟吉野に遁隠れ其より伊賀國を越て此すゝか山に到り給ふこゝに柴の庵を結で翁と姥あり皇弟これに宿し給ふ翁つくづくと見奉り君は王位龍顏に顯れましますわれにひとりの娘を保持りこれも君に相倣て其相貴しとて皇弟に奉る。則最愛有て我こそは先帝の皇弟淨見原親王也大友の亂を避てこゝに到ると宣ふ翁敬禮し跪て云皇祖 天照太神五十鈴川の上によまします君は其後裔なればかしこに往て禱給ふべし即翁供奉して詣し給ふに大雨頻

にして鈴鹿川の水漲出で渉る事かなはず時に鹿一頭來つて首をうなたれければこれに乗て安くとわたり給ふこれより會鹿河といふ此翁は今の明神なるべし厥后皇弟美濃國に入給ひ白鳳元年東國の兵を起し大友皇子を滅し天位に即給ふこれを 天武天皇とぞ申ける

八十瀬川 一名鈴鹿川海道の左にながれ又右に流れて幾瀬もあつるゆる八十瀬の名あり

新勅 ふり初ていくかになりぬすゝか河 俊 成
八十瀬もしらぬ五月雨の頃
調花 五月雨の日をふるまゝに鈴鹿川 治 部 卿
八十瀬の派を立まさりける

野宮より出給とて
玉葉 すゝか河八十瀬の波はわけもせて 樊子内親王
わたらの袖のゆるゝ頃かな
新勅 すゝか川水やせきと成ぬらん 讀人しらす
八十瀬の浪も行やらぬまで

〔略記〕八日天晴卯の時はかりにすゝかを立川瀬の波霧にむすばれ朝日長閑に春をうかべり
すゝか河とくる水ものこりなく 光 廣 卿
八十瀬うち出る波のゆふ花

琴之橋

鈴鹿社より一町許東の方の石橋をいふ又坂の下驛中東の入口の橋をもいふ又關驛中にも同名の橋あり

夫木 すゝか山橋の古木の丸木橋 俊 成
これしや琴の音にかよふらん

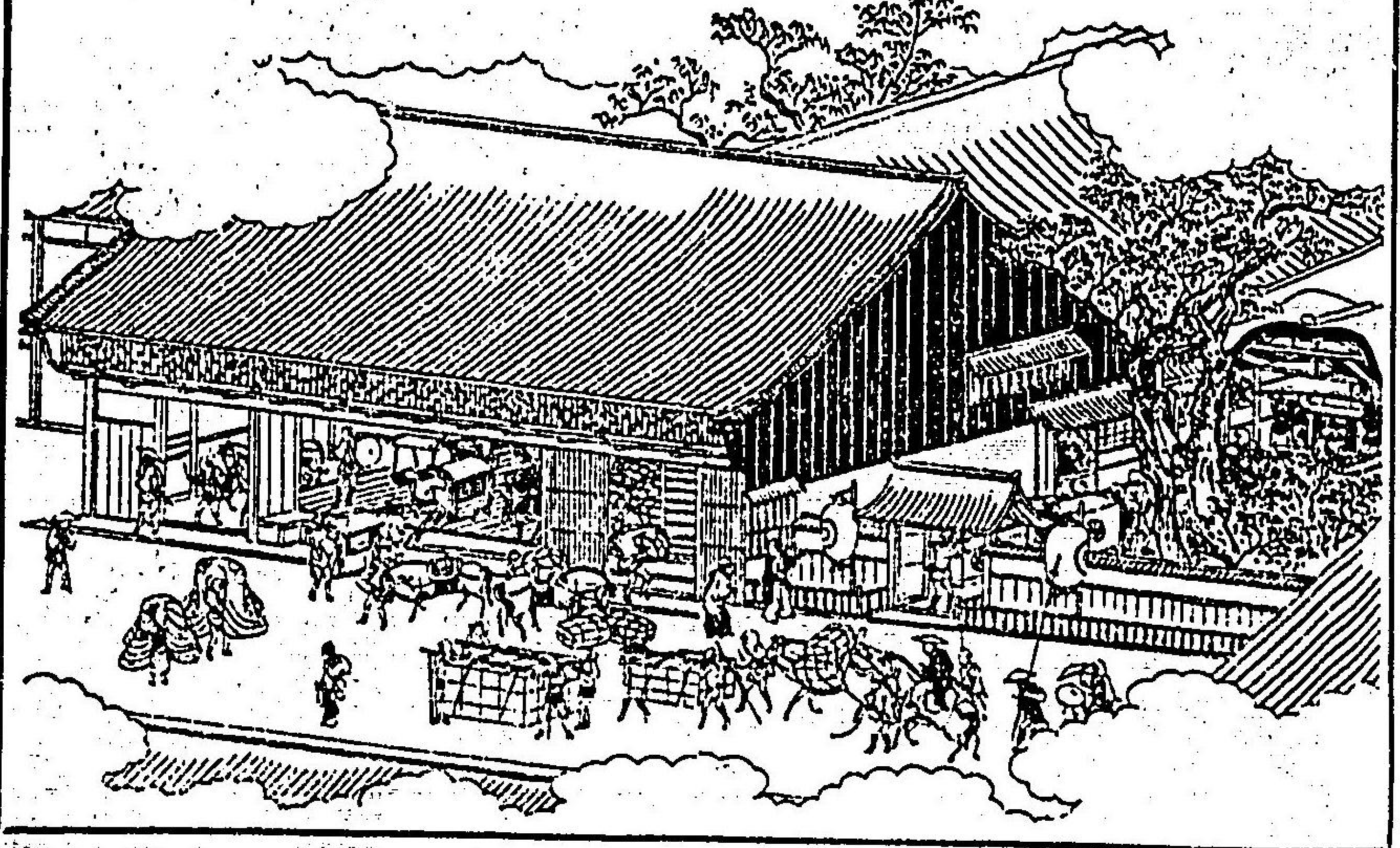
坂下

鈴鹿坂下也關まで一里半此驛にしへは鈴鹿社の下にありしが慶安の頃水難により今の地に移す此宿の本陣の家廣くして世に名高し天正年中よりこゝに住して北津田六郎といひ其後若松孫太郎跡を繼て慶長年中より今の高屋氏尾州よりこゝに來つて相續す此宿の西の方に岩窟ありて中に三體の石佛を安すこれは此驛中法安寺六世密丹和尚元祿年中の造立なり

筆捨山

一ノ瀬川の邊にあり海道の左の方は麓に入十瀬川を帶て山頭まで所々に巖あり其間々みな古松にして枝葉屈曲にして作り松の如し本名は岩根山といふ里諺云狩野古法眼東國通行の時此山の風景を畫にうつしてんやと筆をとるにこゝろに速ばす山間に

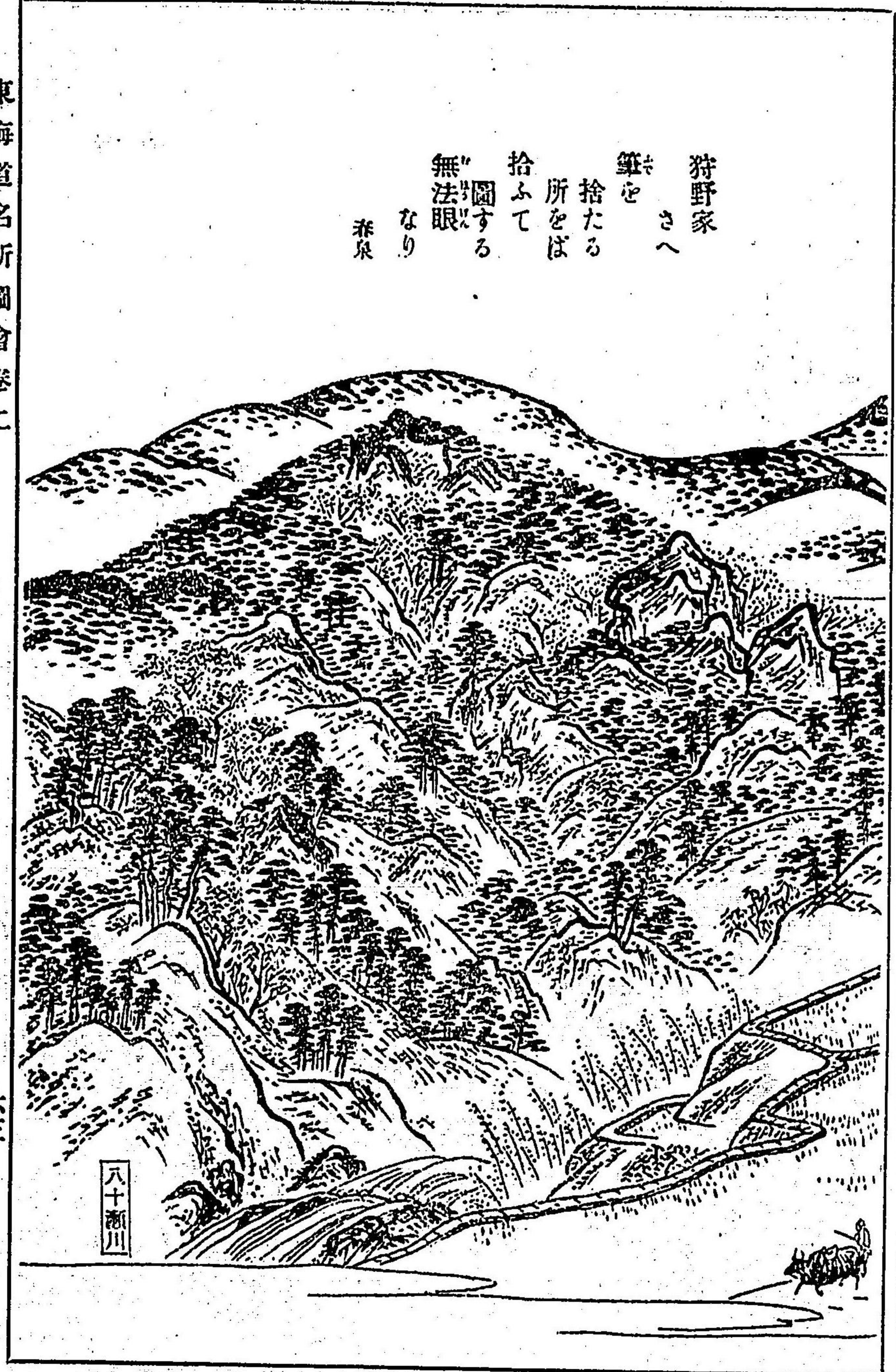
坂の下の驛には大竹小竹とて大きなる旅舎ありこれを俗本陣屋本陣をいふ
五考井 許六が
旅の賦に 上段に書 院殿創設のすかし火のなき火燈にやぐらかけて門口の入り湯桶受は隔くまでと、かず疎障子は油にきはつきなど書つらねて又法荷が旅人や 眺かたの蚊の 行橋



筆捨山



狩野家
筆を
捨たる
所をば
拾ふて
圖する
無法眼
なり
春泉



筆を捨しとぞ

それ此山は麓に八十瀬川を帯て蒼松の黛色濃にして奇岩所々にならびて松根これが爲に曲り撓られて作り樹の如し朝あらしに琴瑟の聲静夜の雨凄々たり月のかげに龍蛇の形をあらはし鶴の聲に君子の徳を表す葉は秦帝の雨を凌がせ花は宓妃の春に老たり此山脈つゞきて岩根の東方に大黒石。蛭子石。觀音岩。女夫岩など形をもつて名に呼ふみな山腹にあり轉石は街道の左にありむかし山峰よりこゝに轉び落けるとぞ又向ふに中て錫杖嶽峨々と聳て風色斜ならず吾妻の通行參宮の貴賤まつこゝに憩ふて時をうつすの勝地也

伊勢 龜山へ一里半驛の入口に古城あり關氏築しとぞいにしへ此所に鈴鹿關あり山頂に關守第の古跡あり又右の方に伊賀大和の街道ありこれを加太越といふ元弘の頃 後醍醐天皇笠置城に籠給ふ時東軍陶山小見山此道より忍で皇居の裏より夜討せし道也宿の左に觀音堂あり此宿は引火奴の名物なり

新續

すいか山むまや併ひに關越て

祥月法師

紀行

あふさかはいつしか嶺くへたてつゝ

爲村 卿

關といふ里にけふはきにけり

惠蘇櫻

宿中民家の前栽にありむかしの街道筋にして岨を通りし也此近隣井口氏の家に蝦夷櫻といふ名酒を商ふ蝦夷は謬ならん

新後

えそ過ぬこれやすいかの關ならん

定家

ふり捨てかたき花の陰哉

九關山寶藏寺地藏院

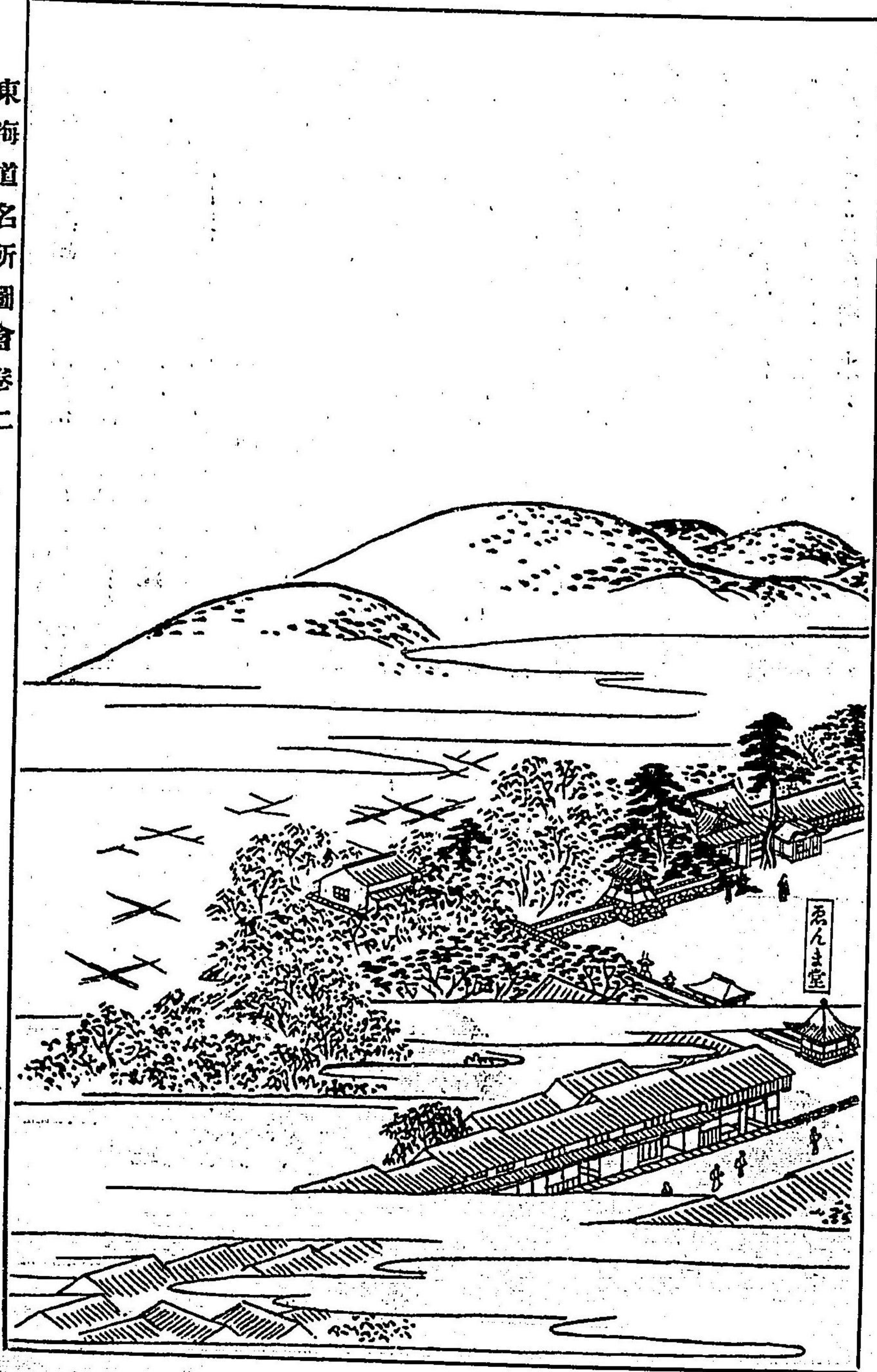
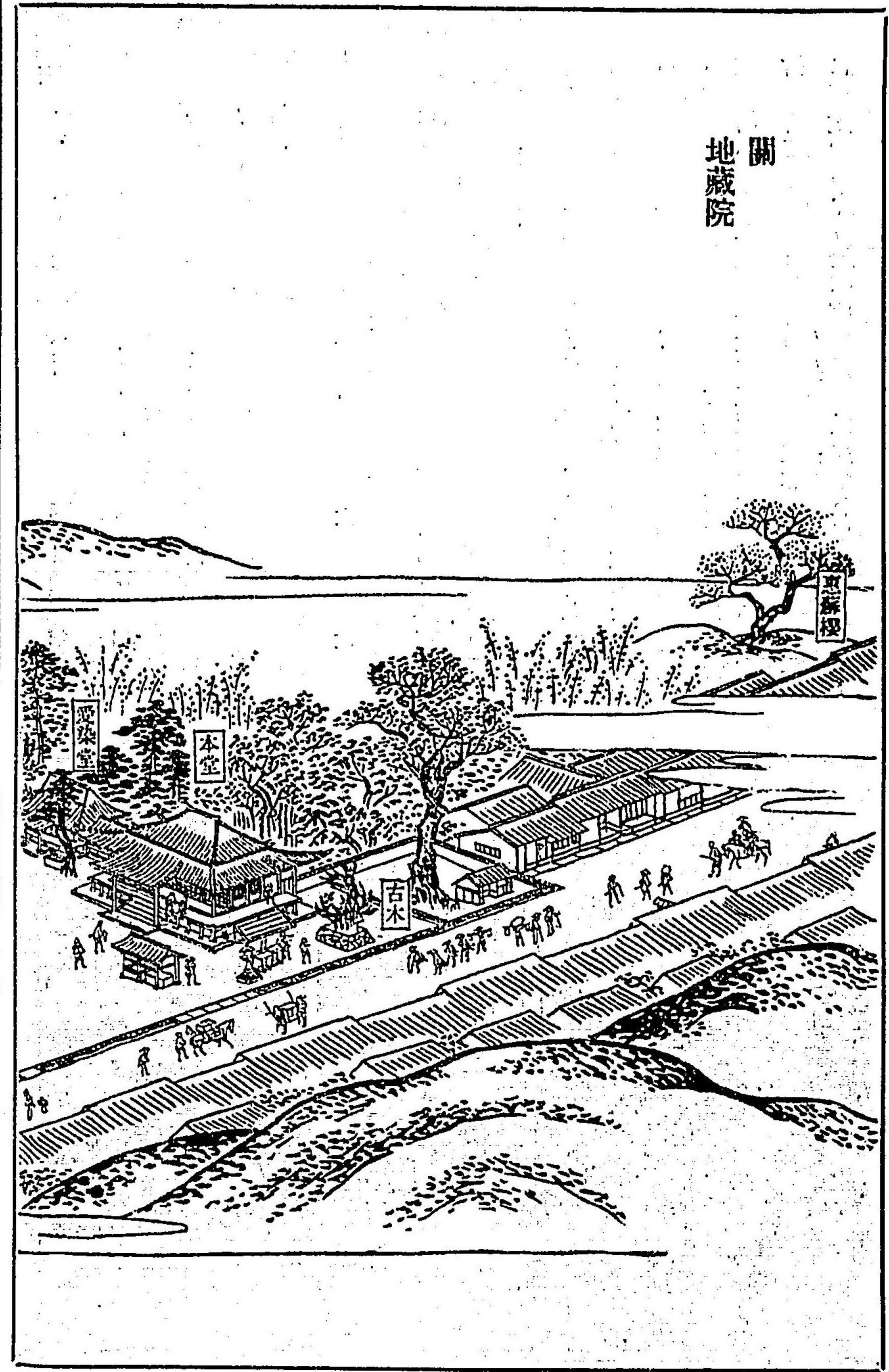
關驛の中間にあり眞言宗

『本尊地藏尊』長三尺六寸僧正行基の作座像也境内に愛染堂。娑羅堂あり

〔寺記〕聖武天皇天平十三年の頃海内に痘流行して人民これに勞む行基に詔ありて速に病難を救ふべしとあれば地藏尊を手刻して病惱除滅の加持一七ヶ日及び貴賤に地藏の名號を唱させ護法の印を彫刻して普施し給へば病患忽に平癒す又天長元年の頃ほひ應宣僧都とて德行厚き行者あり此地地藏尊の靈告を蒙り夢に冥途をめぐり給へば地獄の猛火變じて青蓮華と現



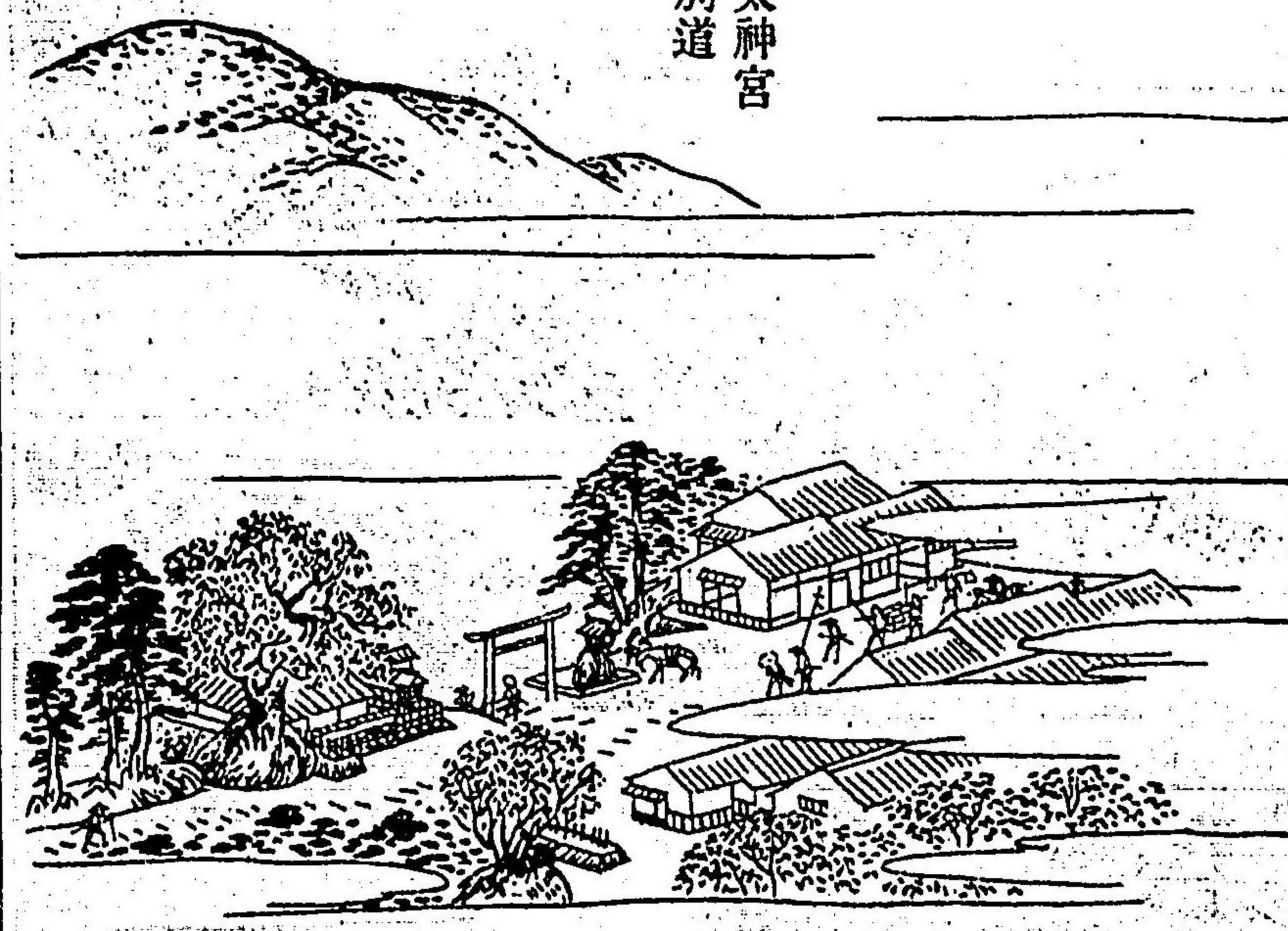
關
地藏院



れ無量の罪障悉滅し則一印を授るこれ光明眞言の正印也應宣夢覺て感涙衣の袖を浸すこれより靈告に任て有縁の衆生に與ふ今の六道の手判これ也延長五年には別當阿闍梨有應に示現ありて曰我闍提救世の悲願を發し六道能化と成て在惡の衆生を友とす故に往來の阡陌に遷すべしとす於是鈴鹿の關屋の側に堂を營て安置す中頃洪水して山崩れし時關驛も所々に改る事都て九ヶ度に迷ふ故に九關山の號あり中古此尊像盜賊の爲に行方しれず其頃の別當職殺を斷て本座に還しめ給ふ事を頻に憐る忽示現ありて當國白子の浦にあり早く迎かへせと靈應あり然るに其曙かの浦の漁人來つて云近頃海上に夜々光明耀々たり其光を慕ふて網を下すに地藏尊を得たり貴賤聚りて守護し本座へ還し奉る靈驗古今に變らずゆき、の入詣して關地藏尊と敬禮しける也

〔一休嘶〕むかし紫野の一休和尚こゝを通り給ひし時此尊像年久しく馬蹄の塵に穢れ莊嚴衰弊しぬれば里人集りてこれを修補し奉るに誰にても往來の僧の

大神宮 別道



たうとからんを頼て開眼供養すべしとてまちける所一休を見つけて開眼を頼しかばいとやすくうけがひ給ひ地藏に打向ひて何のこと葉はなくて

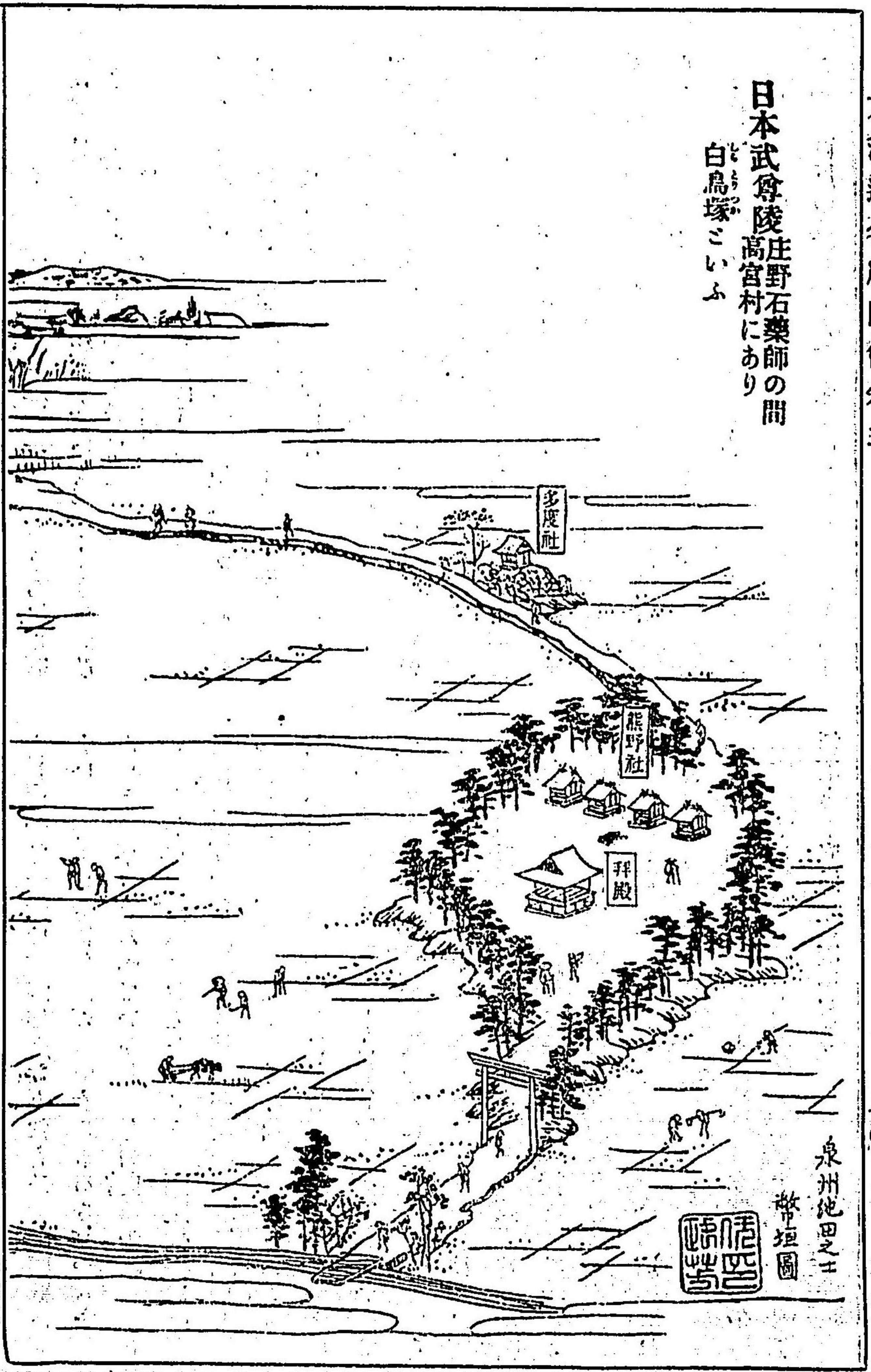
釋迦はすき彌勒はいまだいて問の

とよみて小便をしかけて通り給ふ里人安からぬ事かなと大にいかり凡開眼供養と申す事は威儀正しく經をもよみ其外さまゝの作善あるべき事なるにわけもなき歌よみちらし小便をしかけて打通り給ふこそ悪き僧かなと人々あつまりあらひ清めて又莊嚴彩色を直しあたりちかき寺の僧をやとひて開眼を改めけるかの僧ことゝしく威儀をつくるひ五條の袈裟に座具とりそへ水精の珠數をおしすり地藏發願經をかたことまじりによみ高座に昇り發願の鉦打ならし鼻うちかみなぎしてうるはしき聲を出して地藏經をわらく説のべ追従らしく啓白して此所の老若男女のちは切利天の天人にひとしくかたちは金剛不壞になぞらへ病のうれひは其名をもきかじ田島は穂に穂さかへ雨風の難もなく火難水難のおそれもなからん

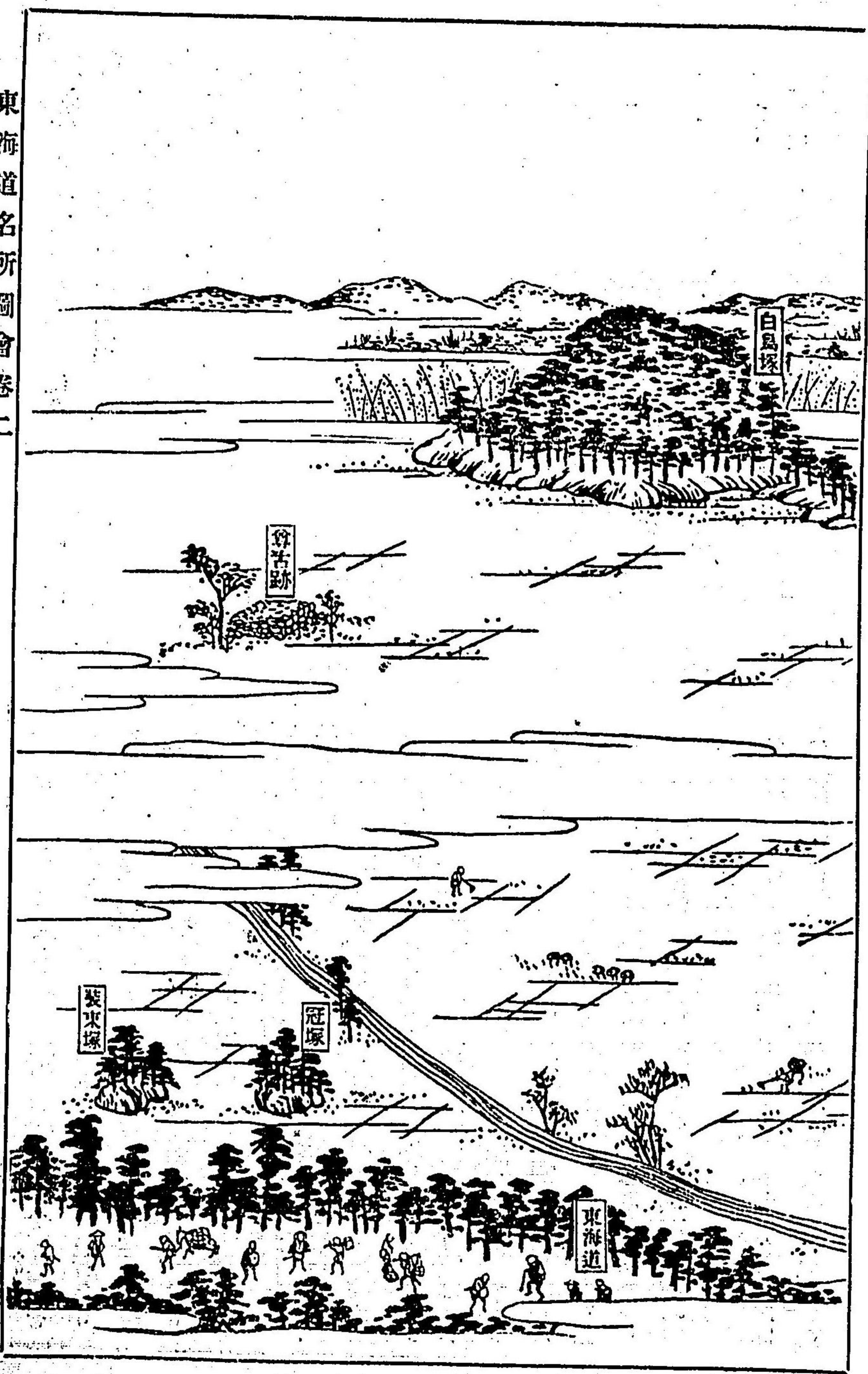
ましてや此本尊は將軍地藏なりたとひ大敵強盜ありといふともさらになかづきやふる事あるべからずなんぞよき事をそろへていひちらし廻向のかねをうちならしければ諸人これこそまことの開眼供養なれとて隨喜の涙をながしけり其夜在所中の者に地藏とつきたまひ口ばしりていはく名僧のくやうによりて目をあきけるものをいかにわけもなき供養にまよはしけるぞやもとのごとくになしてかへせといひて大熱出て煩ひけるほどに人々大に驚きて一休和尚をよびかへして詫言せんとて桑名にて追付願ひければこれより歸る事ならぬ我よみし歌を三返となへ此續鼻禪をはづしつかはすこれを地藏の襟まきにかげよといひやり給へば里人よろこびかへりをしへのごとくいたしければたちまち祟やみにけり今も麻のきれをえりまきにし給ふは此いはれとぞしらる

參宮道 關驛東の入口にあり京師及び關西より伊勢參宮の輩これより赴く山田外宮まで十四里鳥居神燈標石あり直道は東海道なり

日本武尊陵 庄野石藥師の間
高宮村にあり
白鳥塚といふ



泉州池田之工
敬垣圖



出羽森

小野村の北に少き森あり羽州羽黒權現を勧請して羽黒山といふ出羽森古詠あり此ひかしに大岡寺繩手十八町あり右に關川流る

古馬屋

關川の南にあり村の名とす天照太神五十鈴川の上へ遷座の時こゝに神馬をつながせ給ふ所なるゆゑ里の名となりぬ

布氣神社

野尻村にあり延喜式内今皇御太神宮と稱す例祭六月二十一日天照太神五十鈴川遷幸の行宮の古趾と也

龜山

庄野まで二里龜山市中十七町餘左の方に城あり慶長の頃岡本下野守といふ人居城せらる今は石川侯在城ある

狂歌 龜山をせなかにおひて春の日の

光 廣 柳

あたしかけさに甲をこそほせ

森の下

中富田村の内也八王子祠あり海道を後向に建たり

紀行 降雨に風さへそひてけふ笠の

爲 村 柳

雫ししくしりのした道

庄野

石薬師まで二十七町此驛の名物は倭入の熱穀を賣也これより二十町許東に植野村といふ所あり名馬生駿の出所といふむかし此所の長者野登の觀音の示現によつて此馬を得て右大將頼朝卿へ捧げけり其後佐々木高綱に賜り宇治川の先陣せしなり

白鳥塚

庄野より十町許東鈴鹿郡の内高宮村にあり是則日本武尊の陵也土人訛りて鶴家とよぶ此ほとり日本紀に見えたる能褒野なり陵の高サ十八間東西二十五間南面也今に此ほとりより靈響のたぐひ出る又これより坤の方に高サ二尺東西六間半巾二尺許に石を疊むこれも此尊の古跡也とぞ又奉冠冢といふあり又奉塋冢といふもあり俱に椎山川の側也兩冢同じ形にして高サ一丈廻り十間兩冢の間七町許土人ホゾ塚とよぶ又陵道の傍に石造の小祠あり尊の笠を藏めしゆゑ御笠堂といふ今多度權現を祭る又其南に熊野權現のやしらあり

〔古事記〕日本武尊自阿豆麻幸行而到能褒野之時思國以歌曰夜麻豆波久爾能麻本呂波多多那豆人

阿波加岐夜麻非母禮流夜麻登志宇流波斯」又歌曰

伊能知能麻多那牟比登波多多美許母弊具理能夜麻

能久麻加志賀波衰宇受爾佐勢會能古此歌者思國

也又歌曰波斯那夜斯和岐弊能迦多山久毛草多知

久母此者片歌也此時御病甚急爾御歌曰衰登賣能

登許辨爾和賀淤岐斯都流岐能多知會能多知波

夜歌竟而即崩爾貢上驛使於是坐倭后等及

御子等諸下到而作御陵即爾御廻其地之那豆岐田

而哭云々

夫日本武尊は景行天皇の皇子にして御母は播磨稻

日太郎姫也初の名は小碓命と申す又の名は倭男具那

命といふ西の方熊曾建の兩人勅に叛ければ此尊童女

の姿に身を粧ひ其家に入て酒宴し懐より劔を出して

兄弟の者を平げ給ふ是より倭建命と稱じける其後東

の方十二ヶ國の荒夷を平げ御凱陣の道にて御櫛あり

て終に此能褒野にして崩し給ふ御年三十歳なり天皇

大に哭し給ひ群臣に命じてこゝに葬しあり忽然とし

て靈白鳥と化して倭國に飛行群臣其棺を開き見れ

ば御衣ばかり留て屍これなし因茲大和の琴彈原に

陵を作る白鳥更飛で河内國古市邑に至る又其所にも

陵を登て時の人此三陵を號て白鳥の陵といふ委は日

本紀に見えたり和泉國大島郡大島社に日本武尊の

高富山瑠璃光院石薬師寺 石薬師驛の西にお

り眞言宗本尊石佛薬師如来長七尺五寸泰澄弘法兩

師感得の尊像なり羽面石をもつて彫刻す

〔寺記〕當寺尊像は金輪際より出現の靈石也 聖武帝

の御宇神龜年中越の泰澄此所を通り給ふに靈光暉々

たれば野を分て求給ふに泰然たる樹林の中より異香

薫じ十二神將あらはれたまひ一箇の奇石を捧く泰澄

感悟し給ひ末世の衆生利益の爲正しく醫王尊の示現

也とて速に一字を削して靈石を安す其後弘法大師泰

澄の蹟を追ひ靈石をもつて醫王の尊像を彫刻し相好

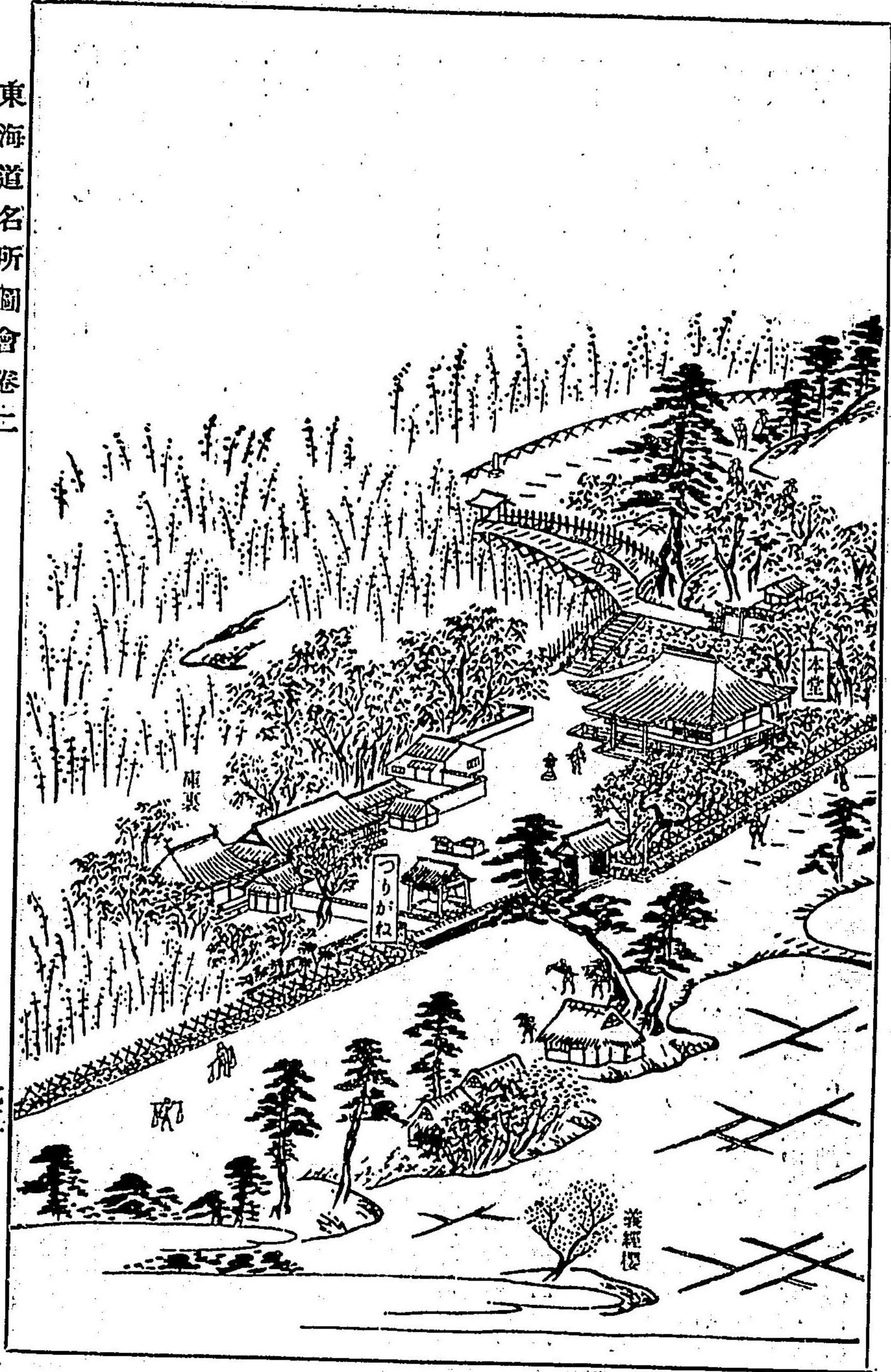
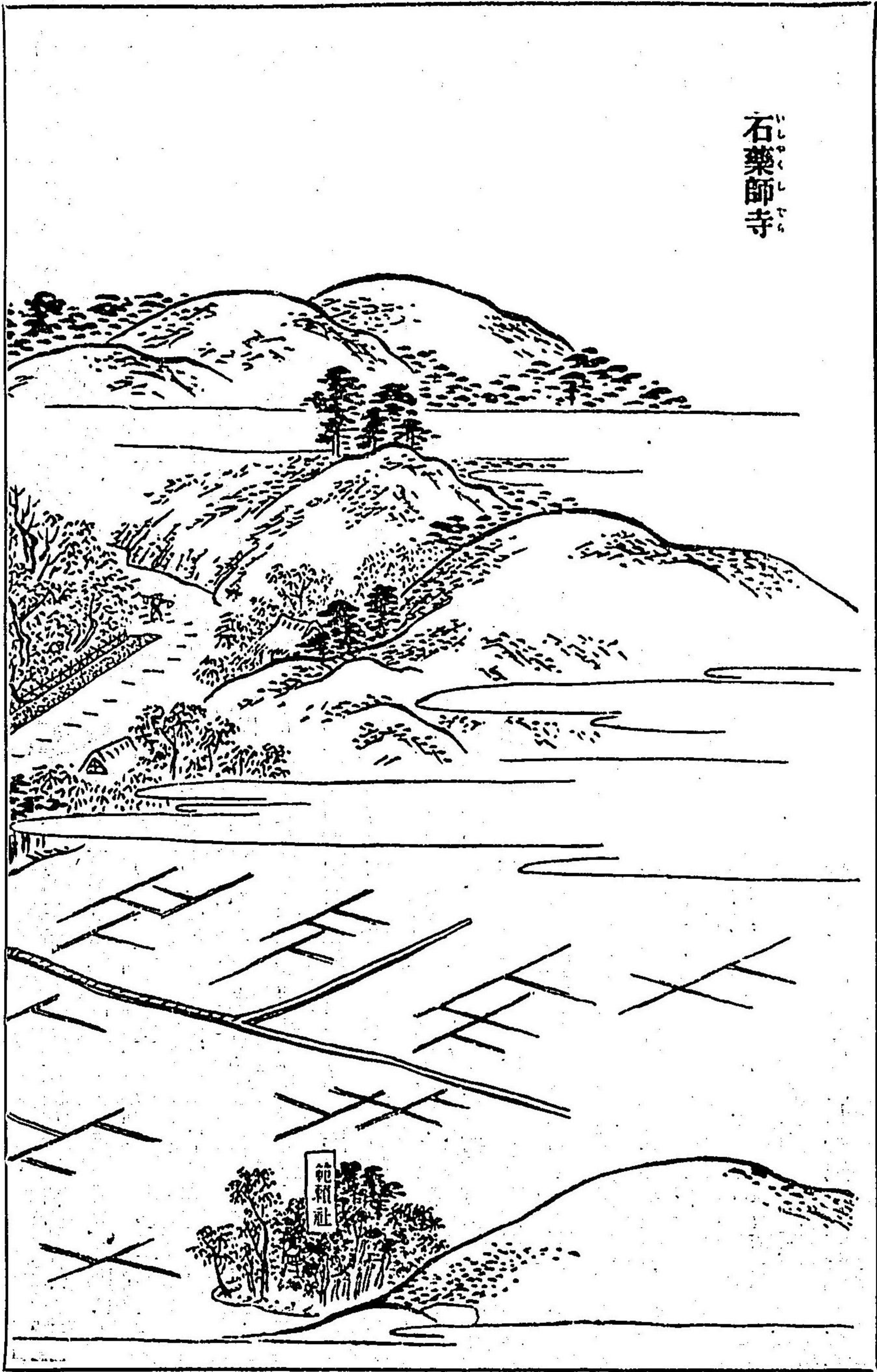
圓滿し給へは開眼供養ある其より靈應日々に新にし

て遠近の敬禮稻麻の如し此由 嵯峨帝の叙聞に達し

精舎僧房營建ありて寺産を寄給ふ中古壽永兵亂の頃

蒲冠者範頼卿上洛の時こゝに詣し丹誠を凝し武運を

石薬師寺



騰り携給ひし鞭を倒にして地にさし給ふ今に枝葉榮たり近くは天正の兵燹に罹て佛閣一時の煙となる幸に本尊は災を免れ燼中に恙なくまじける其頃の住職圓賢法印は智徳の沙門にてある時夢中に示現ありて秘法を教給ふ精米を加持し世上に與へ病難をすくひ殊には乳汁なき婦人出る事瀧の如し法印夢覺て教の如く世に弘むこれを藥師の八割米といふ一柳直盛侯當國神戸居城の時種々の奇特を感じ本堂院内再建ある又寶永六年秋九月十四日の夜當國四日市濱田村の長何某が夢に來る十七日夜風雨頻に起て驛中の人民死亡すべきを村雀多く其疫災に代ると示現あり翌日常寺に詣て夢のよしを語るに別當も同夢を感得せり果して十七日の夜暴風驟雨しきり也其時竹林の雀數千羽死落せり人みな奇也として追悼の作善をなす此靈應其頃世に流布する所也此驛の舊號を高富といひしを自然と靈尊を賞じて石藥師とよび山號を高富といふ

釋元政

繞過正野、郵、石、寺、雙、高、樓、西、福、門、前、景、東方、世、界、秋、百、病、無、自、性、四、大、一、淨、遍、刻、石、藥、師、佛、此、官、須、點、頭、澤庵和尚拜、石、藥、師、其、制、工、應、供、方、土、本、當、東、露、含、盞、碧、瑠、璃、色、間、出、身、途、聖、鑑、中、同物、の、名、古、郷、の、こ、ひ、し、や、柳、の、は、の、こ、に、か、き、や、る、ふ、み、の、數、は、つ、も、れ、と、
御曹子範頼祠 石藥師寺の向ひ民家の裏少しき林の内にあり土人云むかし範頼上洛の時名馬生食の出し所はこゝならんとめぐり見給ひ馬の鞭を倒にさし給ふ後に枝葉榮へり今義經逆櫻といふが田島の中伊勢にあり範頼を誤れるならん共に詳ならず
四日市まで二里二十七町此驛市中七町許東の立伊勢場を鞠が原といふ地名なり
狂歌 出立て露ほらひする鞠の野に 光 廣 柳
まづいそがるゝかへり足かな
稚武彦祠 長澤村にあり石藥師驛中より左の方へ入る事一里許祭神日本武尊御子稚武彦王なり御母は

橋媛 なり近年享保年中此祠を認りて日本武尊と稱して驛中に道標の石を建たり此近歳綾足といふ人日本武尊の御詠に
避比婆理都久婆須羅氏久用加泥都流

此文字を石に鐫て祠前に建るこれも俱に誤りしと見えたり

山邊赤人古蹟 石藥師驛の東小谷村右の方十三町許に山邊といふあり歌仙赤人の棲所といふ古蹟は里

の山上に東西百間許南北八十間餘也四方に双木の老松あり又良の方に一字一石の經塚あり又里の傍に赤人の硯水に汲れし清泉あり貞原篤信吾婿紀行に云近き年までは 禁裏より每春試筆の硯水に汲し運ばせられしと也

國分寺趾 石藥師の東河曲郡國分寺村にあり今淨土宗となる常慶山と號す往昔 元明帝養老年中に營給ふ一州一寺の古蹟也

杖衝阪 海道筋三重郡杖つき村にあり日本武尊東征

御凱陣の時御足に憫ありて歩行成難きによつて佩給へる御劔を解て杖につき給ふより此名あり又右の方の山上に尊の血塚といふあり詳ならず又杖つき川あり硯水を製して杖つき村の名物とす

〔古事記〕自當藝野上差少幸行固甚疲術御杖一稍歩故號其地謂杖衝坂也

歩行ならば杖つき坂を落馬かな はせな
この坂に杖つきの名ある事は 日本武尊龍井の御足な三重縣に曳ます時佩給へる所の御劔をささげしめて杖につき給ふより二千年の今までも野童樵夫これを呼事 大尊を慕崇し奉る自然の徳化成へしされは萬葉翁句の五文字に自己を罪して世に實情を導て此意則我國の大道也予これを感するの凝不朽の石に俾して古きを學ぶ旅客をもてなすのみ
白梵庵門人 村田潤州誌

花に對にこゝろの杖のみちしるべ 寶曆六年丙子秋八月之吉

采女村 杖つき坂の東にあり傳云 日本武尊御惱の時三重の郡家より采女出て御介抱し奉る御感ありて

御歌あり前に見えたり采女の名これより起る職原參考に采女は諸國より奉る郡の少領已上の女也 天子陪膳の役をつとむ陪膳は給仕也後世采女の職罷て典侍これを勤む

追分參宮道

此所關東より太神宮參宮道の別也これより神戸。白子。上野。津へ出る也山田まで十六里

日永村

此所萬金丹の藥店あり左の森に神明山王天満宮のやしろあり又寶蓮寺といふ淨土宗の寺あり慶

長の頃官家の尼公住給ふゆる尼御所といふ字あり

狂淋 桑名をばくはで出たればはし川の 宗 祇

朝氣を越て日永なるらん

安國寺舊址

日永と四日市の間西の方にありむかし伽藍僧房巍々たり初めの本尊如意輪觀音は寶曆年中京師嵯峨天龍寺へ移す今彌陀三尊を安す土人これを熊野權現と稱して生土神とす傳云正慶の頃東福寺の虎關和尚亂を避て此西の方日野村に來り此寺にて佛語心論を著す永祿年中織田信長勢州を押領せんとて瀧川一益に命じ一時に攻來り安國寺伽藍兵火の災

にかゝり焦土となりぬ 桑名まで三里八町當驛海陸都會の地にして商人多く宿中繁花にして旅舎に招婦見えていと賑し 尾州驛へ海上十里 四日市場人爭赴 處々商賈相共遇 春 密 交易添得一日多 郡中恐作公超勝

四日市

伊 桑名まで三里八町當驛海陸都會の地にして商人

尾州驛へ海上十里

四日市場人爭赴 處々商賈相共遇 春 密

諏訪神祠 四日市驛の南の端にあり此所の生土神とす例祭七月二十七日祭式の樂車遶物あり近隣群詣して賑しき神事也「祭神二座」都味齒八重事代 主命。建

御名方命建仁年中信州諏訪上下兩社をこゝに勧請す

三重川 同驛中にあり一名御瀧川といふ或は三瀧に書す水源は冠岳より出て三重郡の山中七里許流れ四日市にして海に注ぐ此橋上より那古の海鮮に見えわたる

〔古事記〕日本武尊自其地幸到三重村之時亦詔云吾足如三重勾而甚疲故號其地謂三重

萬葉 吾足三重乃河原之磯夜附 伊 保 廣 如是鴨跡鳴河蝦可物

に笠堂ともいふべきもの歟 那古海屋樓 四日市の海を那古浦といふ名吳浦は八雲御抄又は歌枕名寄に攝州に入今大坂日本橋の南今宮村邊むかしは海にして名吳浦なるべし日本橋の南九町目まで名吳町なるべし今訛て長町といふ越中にも那古浦あり勢州那古未考 此浦より春夏のあいだ屋樓海上にたつ諺云伊勢太神宮尾の熱川宮へ神幸あるといふ其形風興行幸蓋前後にあり又は諸侯行列の体又は樓臺宮殿の相鮮に見えて漁人時々見る事あり忽須更のあいだに消えくとなる又尾州鳴海の浦なごにも春の頃見ゆると也又西國北國なごにもあり按るに潮水の氣陽精に乗じて立昇るなり陽炎の類にやあらん

那古浦屋樓記

靜者天地之質也動者天地之氣也質者姑不論焉夫一氣之運動轉旋也含一氣者皆與焉神仙人靈禽獸麟蟲有逍遙者有苦勞者有顯見者有隱匿者一彼此萬態皆一氣哉吾鄉四日市驛之爲地也在勢灣北

夫木 我た、み三重の河原にいくし立

ゆふつたまで夏校しつ

季 經

或が云三重川の古渡りは四日市より一里許上流に延喜式内神前神社あり此所にて夏校の神事ありしとぞむかしの海道そのあたりにやあらん

東溟山建福寺

四日市にあり禪宗曹洞能州總持寺の輪番所なり末寺七字塔司十戸又學寮あり「本尊釋迦佛」作不知「辨財天」傳教大師作「大黒天」弘法大師作「毘沙門天」連慶の作共に客殿に安す

「鎮守」秋葉。稻荷。白山。庚申「當山會式」涅槃會二誕

生會月大施餓鬼月懺法月臘八會月

「什寶」十六羅漢。涅槃像俱に兆出山釋迦杖拈華釋迦願

筆十佛像。十二佛像俱に惠

當寺開基は笠堂了源和尚也總持寺二世峨山和尚二十

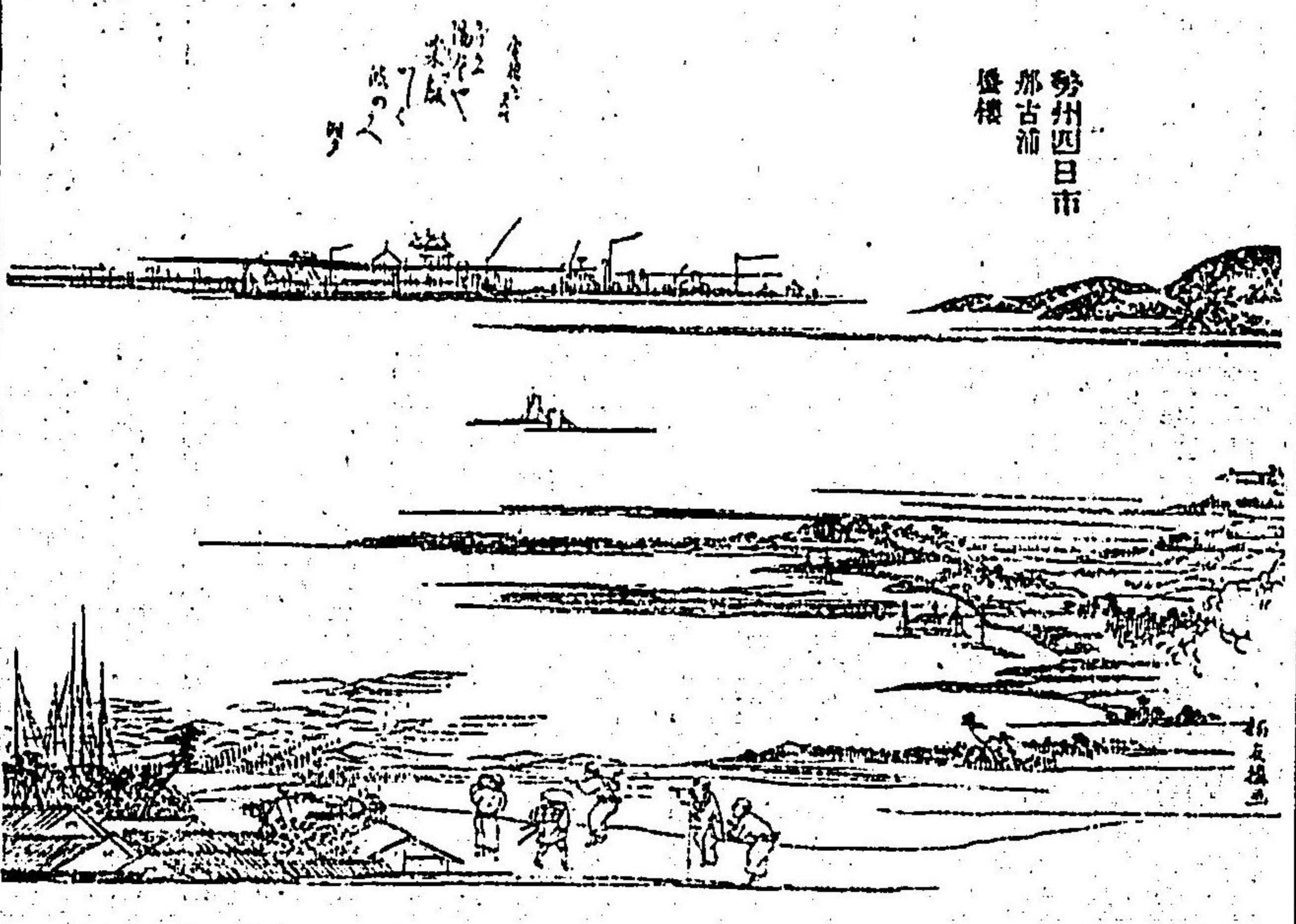
五哲の一人なり相傳ふ笠堂和尚は玄翁和尚の同門子

にして那須野の殺生石を濟度する時師の命にして笠

堂越さるべきを其頃病にて玄翁かはりて行かる此因

によつて石工の具を玄翁とよぶ若笠堂參られれば今

畔二而遠望東南數十里二面二于大洋海門二矣是海門也南界勢之熊岳北則尾州海嶠也其間亦數十里有隘洲及小洲數處二點々如二盆池設石然吾鄉所望不能二挹取其微而已春夏之交數月中一日晴霽和氣雲靜風收將雨之前自熊岳二至二尾之嶠一忽爾烟霧驟熾尖海門所在二而地如二連接二嶺上有物如二雲烟紛態二或穿閣或閃闕前有干旄後有禁路二行伍排列森々子々奇觀不可說也須臾湮滅而山海景象復二平常二矣其顯見也發二南而移轉而失二北古今不遠歲率五七回若二三回或不見焉不過二吾鄉畔數千步二蓋所以爲二吾鄉名勝二也土人傳道二所皇太神廟遊二幸于尾之熱田神廟一也博物者云勢灣之北畔産二蜃也尚矣蓋以爲二其所吐也嗚呼神靈之遊幸也蜃之吐二氣也天理不可窮神慮不可測若夫天地間之一氣運動轉旋爲二奇觀二爲二名勝二者非邪秋里生將二著二東海道中名所圖會上求二貞所記二圖二寫是奇勝二且題二事實二以贈亦貞之拙筆端之一氣哉
寛政七年乙卯夏五月



勢州四日市驛馬曹西村貞節市



垂阪觀音 四日市乾一里許垂坂山にあり天台宗本尊千手觀世音は慈覺大師作又樂師堂あり奥院には慈覺大師像を安す開基は慈覺の徒弟了源和尚本願は舟木兵部少輔躬恒むかし諸堂巍々たり天正の兵燹に荒蕪す

志氏神社 朝明郡羽津村にあり延喜式内祭神天照太神荒靈を祀る

萬葉 おくれしに人を思はし志氏の時 丹比真人
水綿とりして一連んとそ思ふ

西行庵蹟 朝明川の上方二里許福の山の麓也といふ今舊趾さだかならず

いせの西ふく山と申所に侍りけるに庭の梅
芳しく匂ひけるを
山家 柴の庵によるく梅のにはひきて 西行法師
やさしきつたも有すまひかな

名物揚蛤 東富田おぶけ兩所の茶店に火鉢を軒端へ出し松毬にて蛤を焙り旅客を饗す桑名の焙蛤とはこれなり

四日市桑名のあいた富田おぶけの揚蛤は名物にしてゆきの人もこゝに感ふて酒を勤めこれを賞するや
やき蛤のゆる

四日市に近年せをといふ名の技ありこゝろはへんにして糸の音妙に和歌を詠す
夜は
懸しき
こと音も
ひく手に
我なみた
かな

これも名産の白魚船にもならひけんかし

